

343

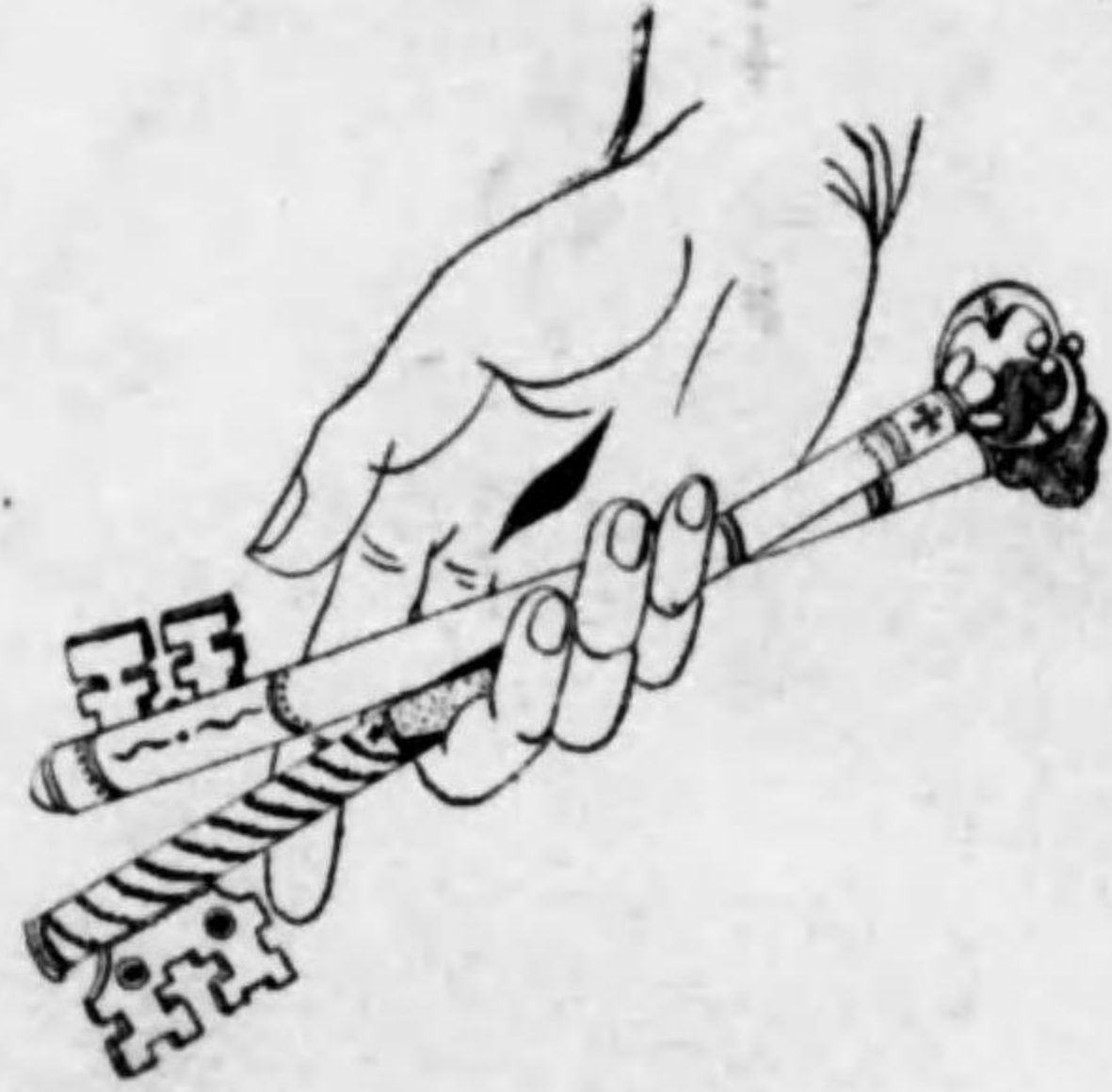
特234

679

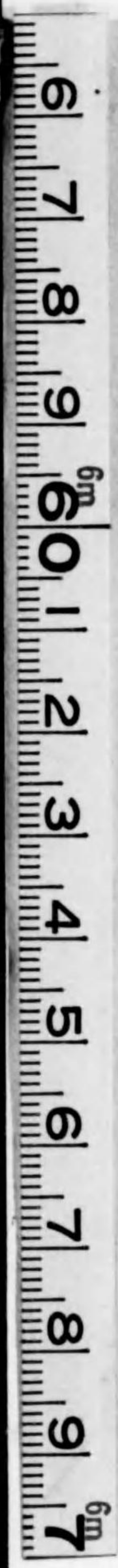
著 郎 三 和 川 浦

史會教クリトカ要提

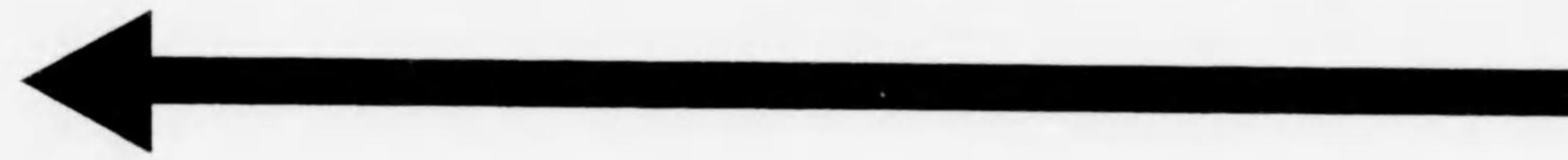
(上)



版 校 學 神 教 公 崎 長



始



特234
679

著 鄭 和 川 浦

史會教外下丸要提

(上)



版校學神教公崎長





自序

私は大正五六年頃、當時の長崎神學校長グラシー師と協力して、佛國トゥルーズ大學教授サルテ師 (P. Sallet) の名著「Histoire de l'Eglise」の翻譯に着手した。佛王安リ四世の改宗に達した時、グラシー師は病を得て、香港に轉地療養せられ、爲に翻譯もそのまゝ中止するの已むなきに至つた。其後、自分で教會史の講義を擔當することとなり、今度はブーランゼ師 (P. Boulenger) の「Histoire abrégée de l'Eglise」を底本とし、サルテ師の教會史、アルベル師 (P. Albers) の「Enchiridion Historiae Ecclesiasticae」マーン師の (P. Mourret) 「Histoire generale de l'Eglise」ベニニ師 (H. Benigni) の「Historiae Ecclesiasticae Propaedeutica」最近はフリミン師 (P. A. F. Eliche) とマルテン師 (P. Martin) の監修にかゝる「Histoire de l'Eglise」等を参考して講義録を書き、小神學校用として公刊すべく準備して居るに、たまたまマルクス の「史料基督教會史」發行の廣告が出たので、拙譯は暫く抽斗の中に藏ひ込んで置いた。然しいよいよその第一巻を手にした時、それが頗る高級で、到底中學程度の小學校に使用し難きを認め、淡い失望を禁じ得なかつた。さうして居る中に浦上神學校教諭片岡彌吉先生が訪ねて來られ、同校でも教會史の教科書

二
が無くて、困却して居る由を物語り、拙譯の刊行を速りに徳懃せられ、校正でも、裝釘でも、年表から索隠まで一切自分が引受けるまで言はれたので、私も思案の末、いよくその氣になり、ここに多年の宿望を達するこゝが出来た次第である。

本書は固より小神學校用として綴つたので、なるべく簡約を旨とした積であるが、何分二千年からの歴史で、餘り省略しては全貌が掴めないし、殊にサルテ師の作を出来るだけ活かさうとした爲、往々重複したり、木に竹を接いだ様な觀を呈したりしたこゝも免れ得なかつた。然しそれによつて、多少こも教會の横顔を覗くこゝが出来た様になつたではあるまいか、心竊に期待して居る。

終に本書は大家向きにしても、高きに失せず、低きに落ちず、ちやうき手頃ではないだらうかと思考し、その爲に總ルビ附して、繪圖をも多く挿入するこゝにした。

昭和十一年十一月三日

浦川和三郎識す

提要カトリック教會史 (上)

目次

緒言	一
古代史	二
前期 教會の創立よりミラノ勅令に至る。	四
第一章 對外史	四
第一節 ユデア人間に於ける教會の發展	四
第二節 ローマ帝國內に於ける布教	一六
第三節 基督教ローマに入る	三二
第二章 對外史(つゞき) 異教社會と基督教との衝突	三九
第一節 迫害の原因	三九
第二節 迫害の顛末	五〇
第三節 殉教者	六四
第四節 基督教の傳播	六七
第五節 殉教者に關する記録とカタコンブ	七〇

第三章 對内史 異端と基督教文學……………七四

 第一節 異端……………七四

 第二節 基督教文學……………八〇

第四章 對内史、教會の組織―秘蹟―禮拜……………九一

 第一節 教會の組織……………九一

 第二節 秘蹟と禮拜……………九六

 附たり。聖傳……………一〇四

 ローマ教皇年表……………一一一

後期 **ミラノ勅令より西ローマ帝國の滅亡に至る**……………一一六

後期第一章 對外史―教會とローマ帝國……………一一六

 第一節 ミラノ勅令……………一一六

 第二節 ローマ帝國內に於ける教會と國家との關係……………一二六

 參考……………一二八

後期第二章 對内史―教理の發展―異端―基督教文學……………一三〇

 第一節 異端……………一三一

 第二節 基督教文學……………一四八

後期第三章 教會の組織―秘蹟―禮拜……………一六三

 第一節 教會の組織……………一六三

第二節 秘蹟と禮拜……………一七〇

ローマ教皇年表……………一七七

古代史概観……………一八〇

 (一) 異教國內に於ける教會……………一八〇

 (二) 基督教帝國內に於ける教會……………一八三

古代史年表……………一八九

索引……………二〇三

提要カトリック教會史上

緒言

(1) 定義 — カトリック教會は神の創設に成ることは云へ、また人間の集團で、すべての集團と同じく對外史と對內史と二重の歴史を持つて居る。對外史は時間と空間とに於ける教會の發展、その健闘、敗退、凱旋なきを物語り、國家との交渉、異教、ユデア教、回教等との關係をも明にする。

對內史は教會の内生に立ち入り、その教義、制度、祭禮の三方面に於ける教會の進運を眼前に展開せしめる。然しこの進運は往々長期に亘れる激烈な紛争の結果に出るので、對內史は、教會の平和を亂し、分離を招くに至りし異端、及び離教の沿革をも詳にせねばならぬ。その方から觀るに、對內史はまたキリスト教思想史、傳統的教義の擁護に當りし學者の著作史、即ち基督教文學史でもあるのである。

(2) 利益 — 教會史は、護教家にも神學者にも寄與する所が非常に多い。護教家には、各時代を通じて基督教の感嘆すべき傳播、驚くべき保全の事實よりして、その神設に出でし的確な證據を提供する。

神學者には、現代のカトリック教會が原始教會と同一で、少くもその重要機關、その基本的信仰に於

て、毫も異なる所なきを立證してくれる。

(3) 史料—史料とは、我等に過去の出来事を知らしめる参考材料で、新約聖書を始め、その後に出せし幾多の文献、銘、メダル、記念碑、口傳等である。

(4) 分類—劃期的大人物、若くは大事件により、教會史を分つて、古代史、中世史、近世史とす。

古代史はギリシア・ローマ時代で、教會の創設より西ローマ帝國の滅亡に至る(四七六年)

中世史はゲルマン族が教會の懐に入り來り、教會がローマ教皇の統率の下に異常な發展を遂げた時代で、西ローマ帝國の滅亡より、宗教革命に至る。(四七六年—一五七七年)

近世史は宗教革命に始つて、現代に及んで居る(一五七七年—)

古代史

(三三三年より四七六年に至る)

概観—古代史は福音の光が舊世界に浸潤せし時代である。舊世界とは、ギリシア・ローマの世界で、ローマ帝國に服屬し、支那、印度を除外せし當時の文明諸國を網羅したものだ。宗教上から云ふと、舊世界はエルザレムを中心とせるユデア社會と、西はローマミアテネ、東はアンチオキアミアアレクサンドリアを主要都市とせる異教社會とに、劃然と二分されるのであつた。

古代史は之を前後二期に小分する、前期は衝突時代で、教會の起原よりミラノの勅令(三三三年)に至り、後期は凱旋時代で、ミラノの勅令より西ローマ帝國の滅亡(四七六年)に及ぶ。

前期—は大迫害と護教の時代である。福音が異教世界に浸潤するには容易ならぬ難關に打つ突かり、成功を博する前には、苦しい試練を経ねばならなかつた。使徒等は初めその活動の範圍をユデア社會に限つたが、忽ち頑強なる反抗に遭遇したので、何時しかその狭い範圍を越えて、廣漠なる異教社會に乗り出した。やがて異教徒より歸依せし信者團體がアンチオキアに建設され、急速の發展を遂げるや、ユデア人側の嫉視を買ひ、爲にキリスト教會とユデア教會との分離を來した。然し衝突はたゞそれだけに止らない。教會がローマ帝國に羽翼を伸すに及んで、舊來の國教は猜疑の眼を以て之を睨み、異教を代表せるローマ皇帝は搖籃の教會に向つて宣戰狀を投げつけ、之を嫩葉の中に根こそぎにしよう謀つた。斯くて兩宗教の衝突は頗る激甚を極め、二世紀半の久しきに亘れる迫害となつた。然しその結果は異教徒の豫想外に出で、倒に教會の基礎を固め、その擴張を促した。内部に於ても、教會はその傳統的教義を攻撃せるユデア派(Judaism)、グノーシス派(Gnosticism)、モンタヌス派(Montanism)等の異端、その他と戦はねばならなかつたが、然し護教家や、論戰家によつて勇ましく敵と對抗して、見事に最後の勝利を博した。

後期—は公議會、及び基督教文學の黄金時代である。早や四世紀の初に凱歌を奏した教會は、二世紀足らずの中に舊世界の隅から隅まで行き亘り、牢乎として拔くべからざる根據を築いた。國家もまた教

會の爲に一臂の力を惜まなかつたので、教會は全く外を顧るの憂がなく、その教理、その道徳の解説から規律の編成、祭禮の組織に全力を傾け盡すことが出来た。無論その間にも絶えず競ひ起る異端を向ふに廻して戦はねばならなかつたが、然しそれによつて信仰の法則を的確明瞭ならしむるを得た。

同時に教會はその階級制度を發展せしめ、之を強固な組織となすべく務めた。今日から以て觀るに、其次の時代に起るべき大激戦を豫感せるものゝ如く、その前進の途上に出遭すべき二大敵、北方の蠻族と回教の熱狂的戰士とに直面しても、よく對抗し得るだけの武装をなした譯である。

前期 教會の創立よりミラノの勅令に至る

(三三三—三三三三)

第一章 對 外 史

カトリック教會の起原

第一節 ユデア人間に於ける教會の發展

概觀—ユデアは、公 教會の發祥地で、公 教が始めて地味な、然しまた光輝ある地盤を据ゑたのは實にユデアであつた。そして搖籃の教會を特徴づけるのは使徒等の手に行はれし幾多の奇蹟と、その進路を遮らんとて反對者の起せし迫害とで、兩者何れも新宗教の神に出し所以を證明して餘りあつた。而

も教會は難關に打つ突かれれば打つ突かるほゞ長足の進歩を遂げ、やがては使徒等のみでは手不足を感じ、助手を求めなければならなくなり、こゝに初めて執事職の新設を見るに至つた。

(一) —舊約と救世主の約束—人祖が初めて神に造られた時は、自然的資賜と云ひ、超自然的恩寵と云ひ、頗る豊に恵まれたものであつた。惜しい哉、彼は天賦の自由を悪用して、神の誠命に背き、その特恩を失ひ、後世子孫までも現在見るが如き惘然なる境遇に陥れた。然し神は人間を見棄て給はず、人祖の墮落後、直に救世主を約束し給うた。元始の宗教は茲に起つた。

其後、世界は日に増し異教の暗黒裡に沈み入り、折角の約束をも忘却し去らんかゝ氣遣はれた。是に於て神はヘブライ民族—後のユデア人を選んで、新に之と契約を結び給うた。彼等にして神の御命を畏まつて之に敬事し、謹んでその選民たる事を誓はゞ、其代りに特別の愛顧を垂れ、保護を加ふべく保證し給うた。この契約によりて生れたのが所謂ヘブライ教である。

ヘブライ教の眞髓は二枚の石板に刻んで契約の櫃の中に秘藏せる十誡と、祭祀を行ひ、不淨を清め、日常の起居動作を規定する爲に設けられた律法と、國民に神の聖意を傳へ、救世主の御降臨を思起さしむべく遣されし預言者等の記述せる著書とに包含されてあつた。律法と預言書とは聖靈の神感によつて書かれ、舊約聖書の一部を成して居るのである。

(二) —新約—ヘブライ教は假に設けられた、一時的、當座限りのもので、後日一層完全なる宗教に代らね

ばならぬのであつた。預言書中には世の降るに隨つて、約束の救世主を、舊約に代るべき新約の事を愈明に豫告して、希望を將來に繋ぎ、光明を前途に望むべく力説してある。但し十誡だけは、人間の性の奥底に立脚せる萬古不易の大法で、新約が舊約に代つても、廢絶される筈は無いのである。所謂ヘブライ教に代るべき新宗教は基督教である。世の始から幾度も、幾層にも豫言され、人類の仲介者にして且つ約束の救世主たるイエズス、キリストによつて、神と人との間に取結ばれた新約が是で、この新約に有終の美を濟さしめんが爲に、イエズス、キリストは新律法、即ち福音を授け給つた。永久不易の宗教は茲に成つた。之に代るべき宗教は更に無い。天下億兆は必ず之を信奉せねばならぬ。

ユデア人は舊約聖書の眞意を十分に汲取り能はなかつた。それが終始一貫イエズス、キリストを豫言して居るのだと云ふ事を覺り得ず、謂はば封じたまゝ、其聖書を保存して來たのである。其封を破つて、之が眞意を明白にしたのが基督教である。實に舊約聖書は其胎内にイエズス、キリストを宿して居た。舊約聖書その物が既に福音書の前篇で、その豫言者は、キリストの前期使徒だ、と云ふ事實は、基督教の出るに及んで始めて明白になつた。されば元始教も、ヘブライ教も、基督教も全く同一宗教で、たゞ其發展進歩の道程を三期に區別した迄だ。元始教の告げし所、ヘブライ教の準備せし所の救贖の大事が、基督教に至つて、一般人類に遺漏なく配布されたと云ふに過ぎないのである。

然しながら神は猶數多の秘奥を留保し置かれた。使徒聖ヨハネは、七の封印を施し、上にイエズス・キリストの象徴たる羔羊の安臥せる一個の神秘書を以て、その秘奥を我等に仄した。其秘奥は主として一人宛の永遠の運命、救靈か滅亡かに係る大問題で、イエズス・キリストは最終審判の曉に該書を繙いて、其神秘を暴露し給ふのである。

(三)一カトリック教會の創立者たるイエズス・キリスト一億兆に救靈の福音を齎すべく預言に應じて生れ給つたのはイエズス、キリストである。彼は神の子の貴きを以てこの塵土に降誕し、我等に等しき人となり、罪の汚點にこそ染へ給はなかつたが、我等の如く備に人生の艱苦を嘗めさせ給うた。彼は神にして人、人にして神であつた。彼は自己の死を預告し、又その復活をも斷言し給うた。彼は人類の爲に自ら進んで犠牲となり、罪なくして十字架の上に死し、以て神と人類とを和解せしめ、死後三日にして復活し、其神たることを立證し給う。イエズス、キリストは既に神である。人の靈肉共に之を癒すの權能を有せられ、その靈を癒すには聖寵を以てし給うた。聖寵は我等を神と一致冥合せしめ、其生命に與らしめるものである。彼はガリラヤ (Galilee) に於ても、ユデア (Judaea) に於ても、豊にこの聖寵を人々の上に雨し給うた。然し唯夫だけに満足し給はず、その盡せぬ聖寵の泉を何時迄も此世に遺さんとして、カトリック教會を創設し給うた。

イエズス、キリストは曰うた「セザルの物はセザルに歸し、神の物は神に歸せ」云々。語は短いが意

義は非常に深長である。恐らくこの語ぐらゐる世界史上に甚大なる影響を及ぼしたものはあるまい。キリストは此語を以て、從來異教者間に行はれ來りし俗人的宗教制度を一切排斥し給うた。是よりしてセザル(Caesar)國王・若くは大統領の左右する政界に、神に服従する教會は全然區別せられた。二者各その分を守り、政事は之を官吏が取扱ひ、教務は之を聖役者が管理する様になつた。純然たる獨立の宗教は茲に初めて成立した。

(四) 聖役者—イエズス、キリストは異教の有せざりし「神の聖役者」を世界に與へ給うた。彼は其門弟中より十二使徒を選抜し、秘蹟を授け、因つて以て聖寵を人に配賦する權能を彼等に與へ給うた。彼等は自身かイエズス、キリストに選抜された如く、また他の聖役者をも選定する重任を托された。彼等に選定され、其後繼者となつた聖役者は即ち司教である。此時から人に秘蹟を授けて神の聖寵を蒙らしめる權能は、永久カトリック教會に絶われない。

完全なる宗教團を組織するのに必要缺くべからざるものは、之を統率すべき首領である。イエズス、キリストは聖ペトロ(S. Petrus)を以て使徒の首領と定め、其教會を統率せしめられた。使徒の後繼者は司教であるが、其司教の司教たる羅馬教皇は、この聖ペトロの後繼者である。イエズス、キリストが聖ペトロを以て使徒の首領に任ずる旨を宣言し給うたのは、一再に止らなかつた。先づヨルダン(Jordan)河の上流、フィリッポのセザレア市(Caesarea Philippi)附近に於て聖ペトロに曰うた。

「汝は磐なり、我この磐の上に我教會を建てん。斯て地獄の門は之に勝たざるべし。我なほ天國の鍵を汝に與へん。總て汝が地上にて繫かん所は天にても繫がるべし。又總て汝が地上にて釋かん所は天にても釋かるべし」(マテ二六二三) 次ニエルザレムは最終晚餐の席に於ても、同じく聖ペトロに遺訓して「シモン、シモン、看よ、麥の如く篩はんきて、サタン汝等を求めたり。然れど我汝の爲に汝の信仰の絶わざらんことを祈れり。汝何時か立歸りて、汝の兄弟等を固めよ」(マルコ一三) 曰うた。終に復活後、チベリアド(Tiberiade)湖畔に於て使徒等に顯れ、ペトロを顧みて、三度までも反覆しく、「汝、我羔を牧せよ。汝、我羊を牧せよ」(ヨハ一五二七) 命じ給うた。

(五) 當時のユデア社會—基督教初かめて世に顯れ出た頃、ユデア社會はパレスチナのユデア人ニ離散のユデア人ニ二分されて居た。

(イ) パレスチナのユデア人とは、會て祖國を出たことないか、或は流浪地より歸國してパレスチナ(Palestina)に定住するかせるユデア人を指すのであつた。その地域は嚴密の意味に於けるユデア(Judaea)ニガリラヤ(Galilaea)ニサマリア(Samaria)の三部に區分されてあり、嚴密の意味に於けるユデアにはユデア人のみに住み、ガリラヤには外國人を多く混じ、サマリアの住民はユデア人から背教者、又は異教徒と見做されて居るのであつた。

(ロ) 離散のユデア人とは、パレスチナ以外に居住せるユデア人を指し、その數はパレスチナのユデア

人に四五倍し(四五百萬)ペルシア、小アジア、エフエズ、エジプトのアレクサンドリア、コリント、アテネ、ローマ、ガリア、イスパニア等にまで離散し、各地に商館を設け、盛に貿易を営んだものである。商館は互に聯絡を保ち、氣脈を通じて居たから、國人が旅行する時も、商館から商館へ進んで行けば、必ず厚遇接待されるのであつた。彼等は祖國を去つて異邦人の間に雜居せる結果、その地の政治上及び知識上の影響を蒙らざるを得なかつたが、然し國民的傳統、その宗教的信念は毫も之を失はない。その居住地には必ず會堂(Synagoga)を設け、安息日毎に集會して、共に聖書を奉讀するか、その解説を謹聽するかしたものだ。會堂には聖書を藏める爲の櫃と講壇を備付けてあり、教職に在らずとも、通りすがりの旅客ですら、其講壇に立つて聖書を講義し、教話をなすことが出来た。一體離散のユデア人は、到る所に頗る勢力があつて、傳道熱にも燃ゆる、周圍の異教者に向ひ、務めて神の聖教を説いたものである。朦々たる多神教の暗黒の深へる世界に在つて、唯一無二の神を語り、柔かな真理の光を放ち、温い愛熱を送るのは、たゞ彼等の會堂のみであつた。異教者中にも心ある者は好んで彼等に近き、進んで會堂内に入り、全然ユデア人となる者もあれば、なほ門前を低徊しつゝあるものもあつた。前者を「義の歸依者」(Proselytus iustitiae)と云ひ、後者を「門前の歸依者」(Proselytus portae)と呼んだものである。願ふにユデア人が帝國の各地方に離散したのは、基督教の傳播を迅速容易ならしめたい神の聖慮に出たものに相違ない。最初の傳道者は皆ユデア人であつたから、何處へ行つても、自由に會堂の講壇に立つことが出来た。

して彼等はこの便宜を利用するこゝを躊躇しなかつた。

離散のユデア人は、エルザレム神殿の維持費として毎年二ドラクマを納め、金品を贈りて聖祭を献げ、又過越ミベンテコステの祝祭日には、好んでエルザレム聖都へ巡禮したものである。

(六) 離散と教會の前途—紀元三三年のペンテコステ、離散のユデア人が多くエルザレムに參拜せるその日に、使徒等は聖母マリア及びその他の弟子等と、高間—主が最終晚餐を行はれし室—に集合して、祈禱に餘念ないのであつた。するま午前九時頃「天より烈しき風の來るが如き響ありて、彼等が坐せる家に充ち渡り、又火の如き舌彼等に顯れ、分れて各の上にとつた。斯くて皆聖靈に満され、聖靈が彼等に言はしめ給ふに従ひて、種々の言語にて語り出た」(使徒行傳)

聖靈降臨に伴ふその烈しき風の音を聞き、エルザレムのユデア人も離散のユデア人も、何事が起つたかき怪んで、高間の前に多數馳せ集つた。ペトロは起つて彼等に演説をした。「今こそ舊約の預言が全うされた。ナザレトのイエスは其の奇蹟、その復活、その昇天を以て約束の救世主たるこゝを證明し給うた」ミ述べるや、人々は何れも其言に胸を刺されて、「我等何を爲すべきか」と問ひ、ペトロの勸に従ひ、改心して洗禮を受けたものが三千人に上つた。この三千人の中には固よりエルザレムに住み、母教會の基礎を成せる人もあつたが、また離散のユデア人で、各歸國の上、福音の種子をその周圍に蒔き散したるものも少くはなかつた。

(七)エルザレム教會の發展——第一回の迫害——聖靈に満され、その豊かな賜を蒙り、特に奇蹟の賜を忝うせし使徒等は、猛然起つてキリストを宣傳した。彼等の奮發心は何時になつても衰退することなく、中にも聖ペトロはその熱烈なる辯舌、その驚くべき奇蹟を以て巔然頭角を顯した。改宗者は日を追つて加はり、エルザレム教會は急速に發展した。信徒は男子ばかりでも三千人から間もなく五千人になつた。

衆議會(Sanhedrin)は之を見て狼狽した。衆議會はユデアの高等法院で、定員を七十一名とし、司祭長、律法學士、民間の長老等より成り、律法の遵守に注意し、宗教上の如何なる變更にも反對するものであつた。吾主を死刑に定めたのも彼等であつたから、新宗教の勃興を雲煙過眼し得るはずがない。殊に使徒等が自分等に殺害されしイエズスの復活を叫び、そのイエズスの名を以て奇蹟を行ふのだと稱して居る以上、いよく以て棄て措き難い。命じてペトロミヨハネを逮捕せしめた。罪狀は死者の復活——高級司祭等の屬するサドカイ派の排斥する教義——を宣傳し、併せてイエズスの名を以て美門の跛者を癒したと云ふの二點に在つた。だが彼等とても奇蹟を目撃せる民衆を憚り、事を有耶無耶に葬り去るに若くなしと思ひ、「一切イエズスの名を以て語り且つ教ふることを勿れ」と戒めて兩使徒を放免した。

然しそれから奇蹟は續々行はれ、改宗者もいよくその數を増して行く一方なので、衆議會は一網打盡的に使徒等を召捕つて獄に繋いだ。然るに使徒等は天使の手に救ひ出され、神殿に上つて盛に説教を始めた。衆議會は再び彼等に繩を打つて法廷に引据へ、斷乎たる處分に出んじした時、有名な律法學士ガマリエル(Gamaliel)が起つて異議を申立てた。

「イスラエル人よ、自ら彼の人々に爲さんとする所を慎め……彼の人々に遠りて之を措け。そはその計畫、若くは事業、人よりのものならば崩るべく、神よりのものならば、汝等之を壞すこと能はずして、恐らくは神にも逆ぶ者ご爲らるべければなり」(使徒行傳)云々。

ガマリエルの道理ある提言には、衆議會も流石に反對し得ず、たゞ使徒等を笞刑に處した上で、そのまま放還した。

(八)——初代基督教徒の生活——初代基督教徒の生活には、宗教上から觀ても、道德上、及び社會上から察しても、頗る興味を惹くものがあつた。宗教上から觀るに、搖籃の教會は、ユデア教式の禮拜と全然關係を斷つて居る譯ではなく、信徒は依然神殿に參詣し、その祭典に與るのであつたが、然しまた特異の宗教行事をも有し、彼等のみの集會に於ては、パンを擘くこと、使徒等の説教の二つが行はれるのを見た。パンを擘くことは今のミサ聖祭、及び聖體拜領で、使徒等の説教は、吾主の御教訓とその御行跡を摘要したものであつた。毎度同じ説教を繰返す中に、自づこ一種の口傳が形造られ、貴重な典據となり、福音書編纂の根底をなすに至つた。

道德上、社會上から察するに、最初の基督教團體を特徴づけるのは、信徒間に漲れる同胞愛と慈善心

こで、彼等は皆同心同意、その有てる物を己が物とせず、何物をも皆共有にした。随つて彼等の中には一人も乏しき者が無い。總て畑なり家なりを有てる者は之を賣り、その金額を持ち來りて之を使徒等の足下に置き、各その用あるに随つて、分け與へるのであつた。(使徒行三三—三五)

(九) 執事の選舉—信徒の數が加はるに隨ひ、使徒等のみでは十分手の届き兼ねる憾を免れなかつた。殊に貧困者の世話につき、ギリシア語のユデア人は、その寡婦等が毎日の施に漏されたまで、ヘブライ語のユデア人に對して、不平を鳴し出した。よつて使徒等は助手を採用したいと思ひ、信徒を集めて、「諸君の中より聖靈と智慮とに充ち、好評ある者七人を選め」命じた。そして選舉されし七人に按手して、之を執事—後の助祭—となし、彼等を食卓の給仕、その他教會の物質的事務に當らしめ、自分等は専ら祈禱と、宣教とに従事することにした。

(一〇) 執事ステファノの殉教と全般的迫害—七人の執事中でも特に恩寵と勇氣とに充ち、大なる奇蹟と徴とを人民の中に行つたのは聖ステファノ (Stephanus) であつた。彼の勢望は日増しに加はる一方で、それだけユデア教徒の嫉視と敵意とを買つた。彼等は人を教唆して、ステファノがモイゼと神とを冒瀆したと訴へしめ、捕へて衆議會に引出した。衆議會に於けるステファノの辯論は正々堂々たるもので、自分は神でもモイゼでも律法でも冒瀆した覺がない、むしろ自分を告訴せる人々こそ、祖先の跡を踐んで、神の聖靈に逆ふものだと云ふことを、一々例を擧げて證明した。之を聞いた衆議會の面々は切

齒して彼に狂ひ蒐り、終に市外へ引出して石殺にした。

ステファノの殉教を狼烟として猛烈な迫害が殺到し、信徒は皆蜘蛛の子を散すが如く、ユデアの在所、サマリア、シリア、クプロス島等へ離散し、其まゝエルザレムに踏み止つたのは、たゞ使徒等のみであつた。然し離散せし信徒は到る處に御教の種を蒔き散した。執事フィリッポはサマリアに福音を宣傳し、惡魔を追ひ、中風、跛足を癒して、多くの改宗者を得た。改宗者の中には魔術師のシモンと云ふ者すらあつた。エルザレムなる使徒等はその事を傳へ聞き、聖ペトロと聖ヨハネを遣し、新信徒の上に按手して、聖靈を受けしめた。それを見たシモンは、聖ペトロに金を差出して、聖靈を授ける權を買はうとした。爲に聖ペトロの嚴しい叱責を蒙つたが、後彼は異端の發頭者となり、多くの人を迷はした。

(一一) 使徒等の離散—信徒が離散したので、エルザレム教會は暫く小康を得た。然し紀元四十二年の過越祭に當つて、再び迫害の火の手が擧つた。ヘロデ、アグリッパ (Herodes Agrippa—大ヘロデの孫) はニラッディウス (Claudius) 帝よりユデア王に封せられ、ユデア教にたいして熱誠を表し、以て國民の歡心を買はんことを欲し、捕へて使徒大ヤコボを殺した。それがユデア人の意に適つたことを見るや、聖ペトロをも召捕つて獄屋に繋いだ。過越祭の後、人民の前に引出す考であつたのである。全教會は聖ペトロの身の上を案じ、頻りに神の援助を祈つた。神はその祈を聽し召され、天使を遣して彼を獄より救ひ出さしめ給うた。聖ペトロは自らヨハネ (後マルコの福音史家) の母マリアの家を訪れ、其所に集つて祈りつ

ありし人々に、自分の教はれたことを告げて、「他の處へ行つた」(一使徒行傳七)、自餘の使徒等も同じくエルザレムを去り、各地に離散して、福音を宣傳し、たゞ小ヤコボ一人がエルザレムに留つて、その教會の司牧に當つた。

第二節 ローマ帝國內に於ける布教

(一) — 是までの傳道はユデア社會のみに局限されたもので、其方の運動に最も活躍したのは聖ペトロであつた。然し迫害が全般的となり、エルザレム信徒の四散を見るに及んで、福音の宣傳にも新方針を立てる必要が起り、使徒等は異教世界に注目する様になつた。

異教世界の改宗は全使徒團の事業で、何れも熱誠を傾けて、この困難な事業に當つた。でも何人が何處で如何なる働きをなしたか、其方の文獻が格別遺つて居ない、たゞ詳にすることに出来るのは、聖パウロの活動のみである。無論聖ペトロは全教會の首長であり、他の使徒等も腕限り根かぎり働いて福音の種子を蒔き散したに相違ないが、然し何と云つても無双絶倫の大活動家、疲労知らずの福音宣傳者は聖パウロであつた。彼ばかりは實際異邦人の使徒で、そのアジア、ヨーロッパを踏破せし三大傳道旅行から云つても、その精力の旺盛さ、その教養の高遠さから觀ても、確に比類なき宣教師であつたのである。(二三) — 當時の異教世界 — ユデア人は自國民以外をすべて異邦人と呼び做したもので、異邦人とはつまり神ならざる神を崇拜せる民族の總稱であつた。然し我等は便宜上、ローマ帝國內に包有せられし諸民族

を暫く異邦人と呼んで置きたい、

(イ) 政治的方面から云ふと、其初はチベル(Tiberis)河畔の最爾たる一都邑に過ぎなかつたローマも、時の流の降々に隨ひ、四隣を攻略して漸く強大に赴いた。内は貴族平民の調和を謀り、外は進んでカルタゴ(Carthago)を取り、ギリシア(Gracia)を呑み、シリア(Syria)を朝貢せしめ、愈領土を擴張した。キリス



帝スウトスグツア

ト卸降誕の頃には、地中海を環れる大小百を以て數ふべき邦國は悉くその版圖に入り、皇帝アウグストウス(Augustus)は、北はライン(Rhin)河口より南はニール(Nil)河上の小瀑布に及び、東はアンチオキア(Antiochia)より西はジブラルタル(Gibraltar)に達せる廣大なる國土に君臨した。域内には帝の施設をの宜しきを得て、干戈の聲は全く絶わ、洋々たる平和の光は到る處に漾ひ、久しく戦亂に疲れた世界も茲に漸く肩を休めて、大きな息を吐いた。實にローマ人は世界を平定統一して、イエズス、キリストの爲に道を準備したのであつた。そのイエズス、キリストの御降誕は紀元前大凡四年頃に當るに云ふ。

從來世界は大小無數に仕切つた一大蒼盤見た様なもので、幾多の邦國は其小天地内に割據して、四境

に關を設け、柵を繞らして相誰何し、國毎に其神々を異にし、其宗教を別にしたものである。随つて平和の日ですら、國と國との交通はなかく、面倒で、一步國を踏み出せば、直に油斷ならぬ敵人を見做されるのが當時一般の風習であり、胸襟を開いて相親睦するに云ふは、容易に見られぬ圖であつた。然るにこの窮屈なる局面はローマ人の鐵腕によつて見事に打破せられた。彼等は漸次此等の小天地を蠶食併呑し、各國間を隔てし邊柵を容赦なく倒壊して、茲に前古未曾有の一大帝國を築き上げたのである。

ローマの將卒は、邊柵を撤去した跡に有名なる「ローマ街道」を開いた。該道は切石を敷詰めた直線箭の如き一大國道で、帝國の四境より起つて、山を踰り、谷を涉り、河には徒涉場を設け、橋梁を架して、悉くローマ公會場の金色里程標に集るのであつた。是に於て交通の便は大に開け、中央と地方との聯絡は頻繁になつた。加ふるにローマ人の呼んで「我海」と誇れる地中海は、此大版圖内に散在せる諸國民の爲に天然の大道となり、一層迅速に去來往復するの便を與へた。

(四) 宗教上から觀るに當時の異教は全くその勢力を失ひ、衰微の極に達し、如何にも憫然極るものであつた。或人の曰つた如く、「彼等は一切の物を神に祭り上げながら、獨り眞の神のみを認めなかつたものである」。而も其宗教は單に外的宗教、儀式と行列とを除けば、内容は皆無で、都市の公吏、州縣の知事、總督を以て神事を司らしめ、皇帝をその最高神職とせる俗人的宗教、否、都市なり州縣なりの名義、以てその祭典を執行する御用宗教であつた。固より人間の貧弱な腦髓を絞つて案出した宗教だ。

是以上に出るに能はぬのは、毫も怪むに足りない。

斯の如く彼等の宗教は單に外觀的に止り、内心には全然没交渉であつた。國家の御用宗教で、斷じて個人の宗教ではなかつた。俗人的宗教だけに、内心的宗教に於けるが如く、眞の神も無く、眞の司祭も無かつた。其神事よりの歸途には、たゞ耳は洋々たる音楽に充ち、目は賑なる儀禮に輝き、時には口腹までが美酒佳肴に眼んで居るにしても、然し靈は全く空虚であつた。その精神には堅實なる何物をも與へられぬ。その心は毫も慰撫せられる所が無い。靈の饑渴を醫せん欲するも、到底得べからざる所であつた。是れ眞の神に代るべき物が一つとして存しない實證ではあるまいか。

なるほご宗教行事は今尙盛に行はれ、民衆は先を争つて、その祭典に與るのであつたが、然しそれは祭典に附隨せる遊戯、觀劇の爲で、信仰心に惹かれて此に出るのではなかつた、支配階級の如きは懷疑者以上の懷疑に流れ、低級な多神教的神話を信する者にては一人も居なかつた。尤もローマ帝國の勢力が四方に伸びるに隨ひ、東國の諸宗教が次第に入りこんで來て、國民の間に宗教心の覺醒を促すに與つて頗る力あつたことは見逃してならぬ。

(一四) 聖ペトロ—教會の首長—聖ペトロはガリラアの小邑ベツサイダの出身で、聖靈降臨後、使徒團の先頭に立ちて盛に活動した。執事ステファノの殉教後、信徒が四散しても、暫くはエルザレムに踏み止つた。新信徒に按手すべくサマリアへ赴いたこともあるが、間もなくエルザレムへ引返した。紀元四十年

頃、教會も小康を得たので、ユデア、ガリレア、サリマア等の諸教會を訪問し、ルツダ(Ludata)ではエネア(Eneia)が云ふ中風者を癒し、ヨッペー(Joppe)今日のジャッファ(Jaffa)ではタビタ(Tabitha)が云ふ婦人を復活せしめた。同地の革工シモンが云ふ信徒の家に寄寓して居る時、セザレアから百夫長コルネリウス(Cornelius)の使者が尋ねて来た。偶聖ペトロは天よりの幻影によりて、異邦人たるユデア人たるこの別なく、誰しも一様に基督教に入り得べきことを諭された所であつたので、使者に同行してセザレアへ赴き、コルネリウスとその一家に洗禮を授けた。異教者にしてユデア教の門を潜らないで、そのまゝ教會に入つたのは、このコルネリウスを以て嚆矢とする。斯の如く聖ペトロは廣大にして前途有望な新傳道の門を開き、異邦人の使徒聖パウロの爲に東道の主人となつた。

聖ペトロはセザレアからエルザレムへ歸つた(使徒行傳九、二〇—二二)、傳説に由るに、彼はその後教座をアンチオキアに据ゑ、歴史家エウゼビウス(Eusebius)(二六七—三三八)の言ふ所を以て眞とせば、夫れからカツバトキア、ポント、ビチニア等を巡教し、進んでローマに乗り込み、此處を全教會の中心地と定めた。

(一五)使徒聖パウロ聖パウロはキリキア(Cilicia)州のタルソ(Tarsus)に生れ、初めサウロ(Saulus)と稱し、「生れながらに(三、二)ローマの公民権を有したものである。タルソは燦然たるギリシア文化の淵藪であつたが、サウロは格別その影響を蒙らず、純ユデア式の教育を受け、夙に律法學士の召出を感じ、エルザレムはガマリエルの門に遊んで聖書を講修した。狭量、猛烈なフアリザイ人となり、キリスト教

の大敵を以て自ら任じ、當然ステファノの石殺にも立合つた。

迫害は全般的となり、信徒は思ひ／＼に逃亡した。サウロは「家々に入りて男女を引出し、之を拘留せしめた。終には司祭長に至り、ダマスコの諸會堂に寄する書簡を乞ひ、その道の男女を見出さば、縛りてエルザレムへ引歸らうとした」(使徒行傳九、一二—一四)、然るにダマスコ(Damascus)に近いた頃、突然天來の光に打たれて、地上に倒れ、「サウロ、サウロ、何ぞ我を迫害する?」と云ふ聲を耳にした。「主よ、御身は誰なるぞ」と言ふや、「我は汝の迫害するイエズスなり。刺ある鞭に逆ふは汝に取りて難し」と聲の主は答へた。彼は忽ち改心して「主よ、我に何を爲さしめんと思召し給ふぞ」と問ひ、「起きて市中に入れ、汝の爲すべきことは彼處にて告げらるべし」と云ふ答を得た。ダマスコにはアナニアと云ふ者が居た。逃亡信徒の首領であつたらしい。このアナニアが聖靈の告を蒙りて、サウロをその寓居に訪ひ、彼に洗禮を施し、彼をダマスコのキリスト教會に紹介した。サウロは迫害者より一變して熱烈な使徒となり、直に會堂に立つて、イエズスが神の御子にて在すことを宣傳した。

(一六)聖パウロの傳道—聖パウロは改心後アラビヤ(ダマスコの東方)に赴き、靜にその天職に當るの準備をなすこと数年、後ダマスコに歸りてキリストが約束のメツシアたることを宣傳した。爲にユデア人の怒を買ひ、彼等に殺害されんことを恐れたので、竊に遁れてエルザレムへ赴き、聖ペトロを訪問した。止ること十五日、兄弟等に送られて、故郷のタルソへ歸つた。

ステファノの殉教した時、四散せし信徒中には、シリアの大都アンチオキアへ走つたものがあり、彼等はギリシア人(異教徒)に向つて傳道を試み、多数の歸依者を得た。そのこゝを耳にせしエルザレム教會は、バルナバを遣して傳道を監督せしめた。バルナバはパウロと相識の間柄であつた。傳道の効果の大に擧げられるを見るや喜びに堪へず、自らタルソへ赴いてパウロを伴ひ歸り、共に力を合せて滿一年間、活動を續け、多大の成功を博した。この頃より信徒は基督教徒と呼ばれるに至つた。

アンチオキア(Antiochia)の新教會は、たゞその發展が目醒しいばかりでなく、またエルザレム教會にたいして、大に博愛心を發揮した。其頃アガブス(Agabus)と稱する預言者が來て、世界に大饑饉の起るべきことを告げた。果してクラウディウス(Claudius)帝の時(紀元四十四年頃)、それが襲來したので、アンチオキアの信徒はエルザレム教會あてに補助を贈ることに定め、使者としてパウロとバルナバを遣した。

エルザレムから歸つたパウロは、アンチオキアを根據地として大傳道旅行を試み、旅行が終るに、一應アンチオキアへ歸り、暫く休養した上で、再び旅程に上るに云ふ様にすることに三回に及んだ。

(一七)一聖パウロの第一回傳道—パウロとバルナバは聖靈の仰を承はり、ヨハネ(マルコ)を伴つてアンチオキアを發足し、バルナバの生里たるクプロス島へ渡つた。是時までサウロと云つて居た彼は、ラテン形のパウロと改名し、以後ローマ直屬の地方を傳道する便宜上、専らパウロの名を用ひることにした。ク

プロス島では地方總督のセルジウス、パウルス(Sergius Paulus)を改宗せしめ、轉じて小亞細亞のローマ領に入り、パンフリヤ州(Pamphilia)のペルゲン(Pergen)を経て、ピシディア州(Pisidia)のアンチオキア、イコニウム(Iconium)、リカオニア州(Licaonia)のリストラ(Lystra)、デルベン(Derben)等を歴訪し、ユデア人の商館を辿り、その會堂に立つて福音を宣傳した。何地のユデア人も頑として改心しな。パウロの行つた奇蹟に驚きながらも、之に石を投げたり、之を追放したりして、絶えず妨害を試みた。之に反して異邦人は喜んで彼の説く所に耳を傾け、先を争つて洗禮を受けた。パウロとバルナバはデルベンより同じ路を傳うて逆戻し、到る處に教會を設け、長老を立て、之が司管に當らしめることにして、一應アンチオキアへ引舉げた。

(一八)アンチオキアにての衝突—紀元四十九年、聖パウロが第一回傳道旅行よりアンチオキアへ歸還した頃、異邦人の改宗問題はまだ決定的に解決されて居なかつた。ユデア主義の基督教徒は百夫長コリネリウスの洗禮を以て一個の奇蹟的除外例、聖靈の特別の表示に由るもので、常則すべきものにあらずみなし、其後雖も基督教徒たらんことを欲する異邦人に課すべき條件—モーゼの律法の遵奉—に就き、絶えず論争したものである。

然るにパウロとバルナバは、小アジアにユデア人を混じない、純異邦人の教會を設置し、アンチオキアへ歸つてその由を物語るに、それが何時しかエルザレムなるユデア人の耳に入つた。彼等は是を以てイ



スラエルの死活問題ミなし、憤然起つてアンチオキアへ駆けつけ、パウロの爲す所に反對して、基督教會に入り、救靈を全うするには必ずモーゼの律法を嚴守せざるべからずミ大聲疾呼した。問題は非常に重大である、モーゼの律法を以て救靈に必要缺くべからざるものミするならば、キリストの御血ミ、その功德ミは全然無用の長物ミなり、キリスト教の根底は顛覆され終る譯になる。何うしても其儘に放任して置かれない。

(一九) — エルザレム會議 — 是に於てエルザレムなる母教會に訴へて、そ 裁決を仰ぐに若くなしミ云ふこミになり、

パウロミバルナバミが選まれて、アンチオキア教會の代表者ミなり、エルザレムへ赴いた。よつて聖ペトロ、聖ヨハネ、聖ヤコボの三使徒及び長老等が集會し、パウロミバルナバを加へて討議を凝した。激しき評論の後、聖ペトロは起つて意見を開陳し、異邦側から改宗した信徒に、モーゼの律法を課する必要なき旨を斷言した。聖ペトロ許りでない。ユデア人中に敬虔の譽最も高く、頑冥者ですら擧つて尊崇措く能はざりし聖ヤコボまでが、聖ペトロに贅意を表し、その發議によりて、自今異教側から歸依した信徒は、偶像に献けられた物ミ、動物の血ミ、絞殺された物ミ、私通ミを斷つべし、其他は何等モーゼの律法を守るの義務なしミ決定し、その旨を各地の教會に書き送つた。斯くて教會の門は全く開放された。異邦人にも自由にもその門を潜れる様になつた。

(二〇) — ユデア人離らずの教會 — 聖パウロの傳道によつて新規模の基督教會が現出した。是迄の教會はユデア教から出た信徒ミ、異教側から出た信徒ミを取雜せた混成教會であつた。然るに聖パウロの新設したのは、全然ユデア人を雜へず、曾てユデア人の會堂に入出した覺のない新信徒より成れる教會であつた。是こそ舊約を一つも混じない、純新約的で、將來に採用すべき教會の新しい典型、眞正なるモデルであつた。

世の教主にして神の御子なる基督は、モーゼの律法を廢止して之に代ふるに福音を以てし給うた。この福音の外に基督教徒の守るべき律法は無い筈だ。然るにユデア人は、威權赫々、富貴比びなきメッシ

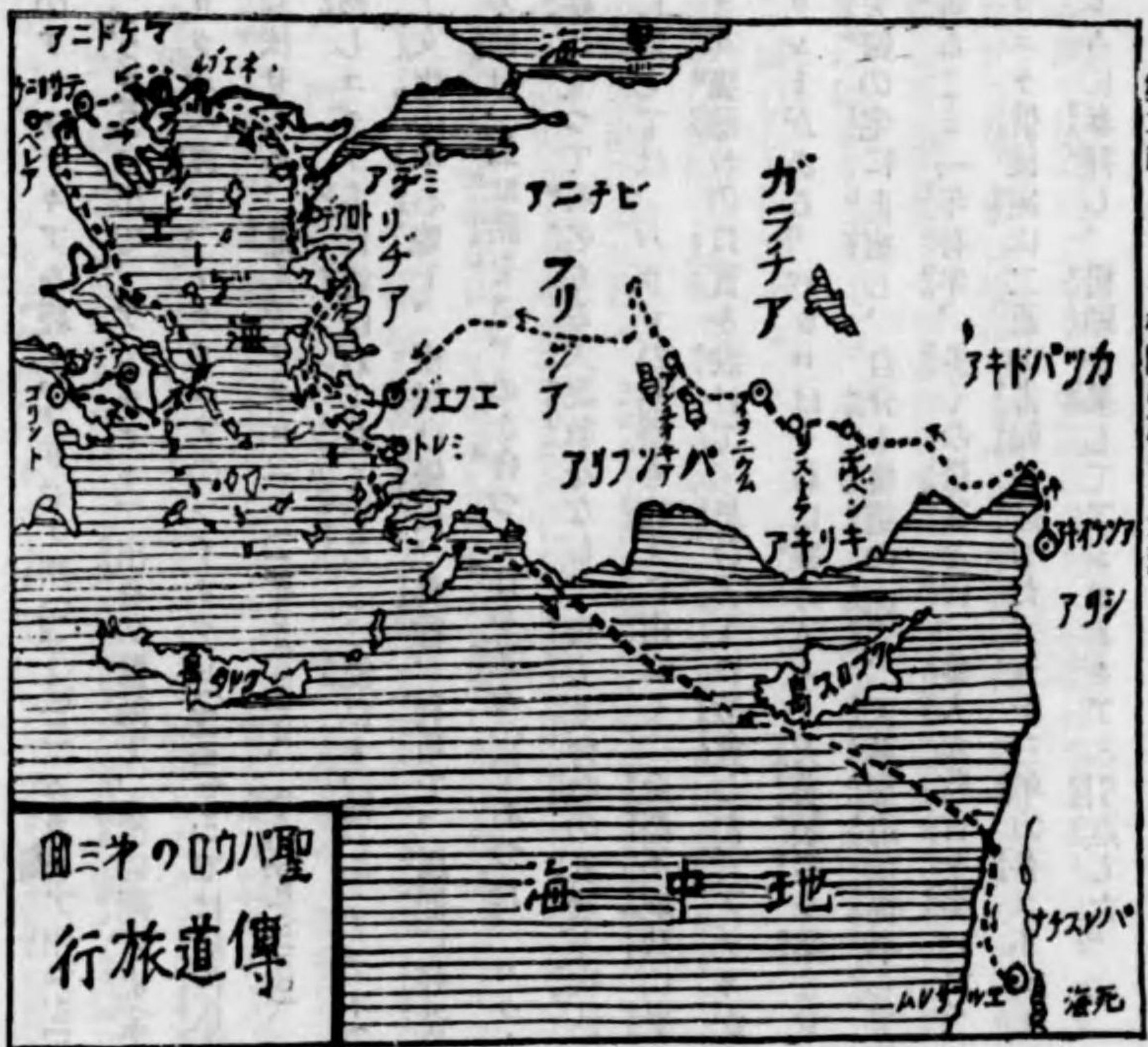
アを夢て居たのだから、貧賤に生れ、窮乏に成長せしイエズス・キリストをば約束のメツシアとは認め得なかつた。使徒等は早くも夫と感付いた。殊に聖パウロは第一回の傳道に際して、十分に彼等の頑冥不靈を看破した。今や基督教會はユデア人を離れても立派に獨立し得る。彼等が耳を假さなければ、異教徒に傳道するまでだ。異教徒ならば頭を延して福音を待ち、雙手を舉げて歓迎してくれる。使徒等は斯う決心したのである。

何たる變化であらう。二十年前、エルザレムの高間に於ける聖金曜日（聖金曜日）の光景を思へ。流石の聖ペトロも絶望落膽の淵に沈み、ユデア人を怖れて堅く戸を締切り、身を小くなして居た。その大なる希望の光は殆ど消失せて、暗澹たる暮色に包まれんばかりであつた。然るに今や洋々たる光明は前途に輝き初めた。使徒等は道を分つて世界の平和的征服に出掛けようとして居る。聖ペトロは猛然手に唾して立つた。早や、ユデア人を怖れる譯は無い。異邦人は續々歸依して来る。彼等の面前に之を突付けて見せても可い。門戸は開放された。来るものは誰をも拒まぬ。隨意に這入れるのだ。

(二) 第二回傳道旅行—アンチオキアに暫く足を駐めた上で、聖パウロと聖バルナバは路を分つて再び傳道旅行に上つた。バルナバはヨハネを同伴してクブロス島へ渡り、幾年かの後、同島で殉教した。

パウロはシラ（Silas）を伴ひ、アンチオキアを北に向つて發足し、第一回旅行とは旅程を逆に取りて、デルベン、リストラを訪ひ、リストラではチモテオ（Timotheus）を同伴に加へ、イコニウム、ピシディア州

のアンチオキアを経て、フリジア州（Phrygia）、ガラチア州（Galatia）、ミシア州（Mysia）等を巡教し、トロアデ（Troade）に出で、アンチオキア出身の醫師で、後の福音史家なるルカ（Lucas）を得た。トロアデからヨウロッパへ渡り、マケドニアのフィリップ（Philippi）では紅色染料商リディア（Lydia）婦人、及びその一家を歸依せしめ、進んでテサロニケ（Thessalonica）、今のSalonica、ベレア（Berea）等にも福音の種子を蒔いた。然しユデア人に逐はれて長く留るゝ能はず、轉じてアテネ（Athenae）市に赴いた。當時アテネは、ギリシア文化の中心地じ、市民は優美、典雅、利巧で、馬鹿に好奇心が強く、平生街衢に立つて珍聞奇談に耳を傾け、無駄話をさぐり合つて日を送るのであつた。パウロはアレオパゴス（Areopagos）に稱する大審院に立つて有名なる大説教をなし、極力基督教の眞理を吹込まんと務めた。然し浮華輕佻なるアテネ人に對しては、パウロの熱辯も施すに由なく、全然不成功に畢つた。彼等は「孰れまた御話を承らう」と其場通れの口實を設けて、思ひ／＼に散會した。アテネから程遠からぬ處にギリシア第一の貿易港コリントがある。パウロはそれに乗り込み、天幕製造を業とせるアクイラ（Aquila）、プリシイラ（Priscilla）夫婦の宅に止宿し、自分も傳道の傍、天幕製造に従事して糊口の資を求め、以て自給傳道を試みた。居るこゝ一年有半、多くの信徒を得、盛大な教會を築いた。コリントより五十一年か五十二年かにテサロニケ信徒宛に二通の書翰を送つた。五十三年の春コリントを發し、小亞細亞のエフェゾを経てエルザレムに參拜し、誓願を果してアンチオキアへ引返した。



(二二)―第三回 傳道旅行―五十四年パウロは三度アンチオキアを發し、シリヤ、キリキヤ、ガラチア、フリジア等の諸教會を訪問して、エフェゾに出で、五十六年の秋まで此處に足を駐めて、熱心傳道に従事し、多くの奇蹟を行つたので、キリストの御名は附近一帯に響渡つきた。其間(多分五十六年の四月頃?)にコリント前書を書いた。エフェゾ市民はディアナ(Diana)女神を篤く尊信し、その像は天から降つて來たのだと稱して、特に之を崇敬したものである。市の金銀細工人等も女神の銀厨子を作つて之を巡拜者に賣り、莫大の利益を收めるのであつたが、パウロの

傳道以來、女神の信仰は頓に衰へ、自分等の商業も大打撃を蒙つたので、彼等は一齊に蜂起してパウロに怨を報いんじした。パウロは己を得ず、エフェゾを去つてトロアスに冬を過し、翌五十七年三月マケドニアへ渡りて、コリント後書を書き、同年十一月、自身コリントへ赴いた。ガラチア書を書いたのも、その頃であらうか云ふことだ。五十八年二月にはローマ書を認め、フェエ(Phoebe)と云ふ女執事に托して之をローマ教會へ送つた。コリントから陸路マケドニアへ引返し、ミレト(Milet)へ渡り、人を遣してエフェゾ教會の長老等を招き、別を告げた。その告別の辭は、パウロの肺肝を絞つたものだけに、言々句々皆涙で、彼が精力絶倫の人たるに共に、また熱情、感激性の人たりし半面を伺ふに餘るのである。ミレトを發したパウロは、五十八年のペンテコステ祭の頃エルザレムに詣り、各教會の義捐金を分配した。彼の第三回傳道旅行はこゝに終つた。

(二三)―パウロの教義―パウロの宣傳せし教義の如何を知るが爲の参考書には、使徒行録にパウロの書簡集がある。使徒行録にはパウロの三大演説を收めてある。一つはユデア人相手のもので、他の二つは異教徒に向つて述べたものである。パウロは聴衆に従つて、その説き方を異にして居る。ユデア人に向つては、イエズスが約束のメツシアたることを、聖書に由り、御復活の事實によつて證明せんむ務めたものであるが(ピシディアのアンチオキアに於ける演説)、然し異教徒の前には、聖書の權威を持ち出す譯には行かぬので、より哲學的な辨證法を用ひた。唯一の神、天地萬物の創造主たる神を説き、その神が決して金や銀や石の彫

刻物に似たるものと思ふべからず、その神を求めめるには、須く心を改め、罪を痛悔せねばならぬ、「その日を期して……自ら死者の中より復活せしめ給ひし一人を以て世界を審かんし給ふからである」(使徒行一四ノ二以下)、云ふことを力説して居る。

然しパウロの思想は特によくその書簡集に伺はれる。當時ユデア教より基督教に歸依せし信徒中には、飽までモイゼの律法を墨守し、之を基督教徒に強制せんとするものがあつた。所謂「ユデア主義者(Judaizers)」が夫れで、パウロは極力彼等に反対し、救靈を全うするに必要なのは信仰である、神がイエス、キリストを以て罪ある人間を救はんと思召し給うて以來、モイゼの律法はその使命を終り、福音に後を譲つた。人の義せられるは律法の業に由らず、たゞ信仰に由るのだ、と痛論して一歩も譲らなかつた。パウロのこの主張は一種の「主樂調—Leit-Motiv」にも謂ふべく、大抵の書簡にはくりかへされてあるが、その全力を傾けて強調されてあるのは、ガラチア書、コリント後書、及びロマ書である。斯の如くパウロはその傳道旅行、その文書を以て、廣大無比の大偉業を全うした。恐らくパウロはキリスト教の傳播に與つてかあつた者は、他に一人として居なかつたであらう。

(二四)―自餘の使徒等―聖ペトロも聖パウロ以外の使徒等は何處に布教し、何を爲したか、之を詳にすることを出来ない。信憑するに足るべき實話を歴史に遺して居るのは、たゞ聖大ヤコボ、聖小ヤコボ、及び聖ヨハネの三人に過ぎない。

聖大ヤコボはユデアに布教し、紀元四十二年、ヘロデ、アグリッパの命により斬首せられた(一参照)西班牙側の傳説によるに、信者等はその遺骸をヨツベに運び、ヨツベから船に乗せて西班牙の西北イリア(Iria、今日のEl-Praton)に移し、終にコンポステラ(Compostella)に埋葬したと云ふ。右はイリアの司教テオドミル(Theodimir)の書き傳へた所で、夫れよりして中世紀の頃コンポステラは有名な巡禮地の一となつたのである。

聖小ヤコボはクレオファスと聖母の妹マリアミの子で、聖ペトロの出發後、エルザレム教會の司牧に任じた。彼は實にユデア・キリスト教徒(Judeo-Christian)の使徒で、「義者」と稱せられ、彼等の間に多大の尊敬を博したものである。ヨゼフスの傳へる所に由るに、紀元六十一年か六十二年かに、大司祭ハナン(Hanan)は、總督フェストウスが死し、後任アルピヌスがまだ到着しない隙に乗じて、衆議會を開き、ヤコボを出頭せしめ、律法を破つたを誣ひて之を石殺に處したと云ふ。

聖ヨハネは大ヤコボの弟で、初の聖母マリアと共にエルザレムに留つた。紀元六十八年頃、エフエゾへ赴き、是まで聖パウロの建設指導せしエフエゾ教會を管理した。ドミチアヌス帝の時、パトモス島に流されて、黙示録を書き、後赦されて、エフエゾに歸り、福音書を綴つた。彼の弟子は少くなかつたが、就中最も有名なのはポリカルプス(Polycarpus)とパピアス(Papias)の兩人であつた。

その他の使徒に就てはたゞ傳説が存するのみに過ぎない。夫れによるに、聖マテオはベルシアに布教

し、聖アンドレアはシチア(Syria)及びトラキア(Thracia)に福音を宣べ、後ギリシアのパトラス(Patras)に於て十字架に釘けられた。聖ユダ、即ちタデオはシリア、メソポタミア、ペルシア等に傳道し、聖バルトロメオはアルメニアに、聖シモンはメソポタミア及びイドメアに、聖トマは印度に、聖フィリッポは小アジアのフリジアに、聖マチアはエチオピアに宣教し、いづれも殉教を以てその傳道生活を終つた云ふ。

第三節 基督教ローマに入る

(二五)ローマに於ける聖パウロ 聖パウロは到る處に、「ユデア教は其使命を終り、福音に後を譲つた。覆滅は寧ろ當然である」と痛言力説した。事實は夫に相違ないが、然し之を直言するのは危険千萬であつた。ユデア人等は坐して覆滅を俟たんよりは、寧ろパウロを亡きものにせん息捲いた。紀元五十八年パウロが第三回傳道を終へてエルザレムへ歸着するや、彼等は好機失ふべからずみなし、急に起つてパウロを殺害せん謀つた。然しローマ守備兵の干渉により、事が意の如くならなかつたので、彼を以て人民にも、律法にも、神殿にも有害な説を主張する惡漢とみなし、ローマ總督に告訴した。總督は彼を其駐在地たるセザレア(Caesarea)に引致して、拘禁二ケ年に及んだ。終に彼は自己の有せるローマ公民権により、皇帝の親裁を仰ぎたいと申出た。斯うなつては總督も難下(なんげ)にその願を拒絶するこゝでできない彼は長い危険な航海を續け、マルタ島の附近で船は終に沈没したが、乗込員は幸に全きを得て、紀元六十一年ローマに到着した。四方八面より集中せるローマ街道によつて、基督教は夙にローマへも流

れ込んで居た。ユデア人は例によつて辛辣なる壓迫を之に加へた。然し信徒は不屈不撓の精神を以てその壓迫に打勝ち、ローマ基督教徒の信仰を天下に轟かした。パウロが彼等を訪問せんと思立つたのは久しい以前からであつた。幸ひ今度セザルに上告した爲に、被告人としてとあるが、兎に角多年の宿望を達するを得た。彼は禁足のまゝ二ケ年間滯留して傳道を試みた。紀元六十三年頃、一應無罪放免となつた。確言は出来ないが進んで西班牙にも布教したらしく、それから東國の諸教會を歴訪して再び羅馬へ歸り、間もなく殉教した。時は大凡紀元六十七年であつた。

(二六)羅馬に於ける聖ペトロ 聖パウロが小亞細亞、希臘地方に傳道せる間に、聖ペトロは進んで大帝國の首都ローマに入つて、茲に其教座を据ゑ、最初の羅馬教皇となつた。羅馬の位置は最も善く彼に適し、彼を外にしては茲に据わらばき適任者は居なかつた。エルザレムの使命は既に終つた。カトリック教會の首領たる聖ペトロが、ユデアの如き一小邦の首都に小さくなつて居ては、息喘しくて活動も何も出来たものではない。之に反してローマは神の深い攝理によつて當時文明世界の中心地であつた。全世界に擴張發展すべきカトリック教會の根據地としては之に過ぎるものはなかつた。聖ペトロがこの大都市に教座を置いたのは、自ら公教會の首領たることを立證した所以のものではなかつたらうか。

聖ペトロは少くも前後二回ローマに乗り込み、彼地に教會を設置し、終に殉教の血を以てその教會の基礎を固めた。右は動かすべからざる文献に根據つけられ、近世批評家も雖も一般に承認せざるを得な

い所で、たゞ異論の存するのはその布教の年代に就てのみである。

最も有力で且つ最も真に近いと思はれる傳説に由るに、彼が初めてローマに赴いたのは紀元四十二年頃であつたらしい。使徒行録を見がし、彼はヘロデ、アグリッパの爲め獄に繋がれ、天使によつて救ひ出され、「出て他の處に往けり」(二七)とある。「他の處」はローマを指したもので、當時ローマにはユデア人が多く居留し、トランスチベリヌス(Transiberinus)と稱する貧民窟に群居して居るのであつた。紀元四十九年頃、ローマの場末に紛争が起り、その結果、クラウディウス帝はすべてのユデア人に退去を命じた(二八)とある。ベトロも信者等ミアシアに去り、ユデアに歸つてエルザレム集會に臨んだ。二度目にローマへ取つて返したのは六十年頃であつた。

(二七)一羅馬の大火一時のローマ皇帝はネロ(紀元五四)と稱し、歴代皇帝中の桀驁で、其師セネカの訓誨には毫も耳を傾けず、其威權の絶大にして、萬事意の如くなるのに乗じて、狂亂暴虐に及ぶ所なしであつた。紀元六十四年羅馬に未曾有の大火が起つた。延焼八日に及び、市の大部分を灰燼に歸せしめた。市民は狂憤した。放火者は帝自身だ、羅馬改造の虛名を博せんが爲、この暴舉に出たのだと、連に街談巷議して帝の身邊に有ゆる怒號惡罵を投付けた。ネロも流石に狼狽した。自己の急場を切抜けんが爲に、無辜の基督教徒に放火罪を轉嫁けた。「因つて、夥しき信徒を召捕つて、之を糺問し、之に天地容れざる大罪を負はして、殘酷極まる刑戮を加へた」と史家タチトゥス(Tacitus)は記して居る。



元來羅馬人は、天資殘忍酷薄、興行物にしても、特に流血淋漓たる荒事を好んだものである。然しネロが彼等に觀覽せしめたのは特に殘酷沒義道を極めたもので、彼は其宮苑、及びワチカン(Vatican)興行場へ基督教徒を曳出して之を磔刑に、火責に、猛獸の牙に掛けて斃殺にした。彼は前代未聞の慘刑を案出し、男子は生きながら全身に松脂を塗つて之を十字架に磔け、

火を放つて街燈に代用し、婦人は之を暴牛の角に束ねてその翻弄に委せた。實に酸鼻見るに忍びざる活人畫を演ぜしめ、その大團圓には演者を殺戮するに云ふ暴虐を敢てしたものである。この時聖ベトロは逆磔に懸けられ、聖パウロは首を刎ねられて殉教した。迫害は次第に中央より地方へ波及した。(二八)一聖化されしワチカン一ネロに殺害された殉教者等は、直に聖人崇められ、信徒の模範と仰がれた。後で使徒聖ヨハネは、天上に大なる祭壇が設けられてあり、其下にネロの迫害に殉教せし幾多の靈魂の立てるを幻影の中に見た。然し地上にも夫に劣らぬ祭壇があつて、其下に彼等殉教者の遺骸を收めてあつた。この祭壇は實にワチカン丘で、此時から羅馬は基督教徒の聖都と化し去つたのである。



聖ペトロ 聖パウロ

ネロの興行場は長方形をなし、長さ二百米突、羅馬街道に沿うて設けられ、街道の一方には、興行場に面して聖ペトロの靈塋があつた。靈塋は今に至るまで其位置を變せず、依然ミケランゼロの設計に成れる聖ペトロ大聖堂の圓頂閣の下に横つて居る。カトリック教を諒解せんには、是非もこの靈塋の前に立たなければならぬ。この靈塋は一個の美しい歴史を持つて居る。古代より世界のカトリック教徒は皆此處に詣で、聖ペトロを尊敬した。カトリックの一致は代々この靈塋を中心として肯定せられ、聖ペトロの崇敬によつて鞏固められた。

(二九)一福音書の編纂 — 聖ペトロと聖パウロがローマで活動して居る頃、最初の福音書は成つたのだ。聖イレネウス(S.Irenaeus)は曰つて居る。聖マテオ(S.Mathews)は十二使徒の一人、聖マルコ(S.Marcus)は聖ペトロの弟子、聖ルカ(Lucas)は聖パウロの弟子であつた。然し聖ルカが福音書の著作に指を染めた時は、イエズス、キリストの傳記は既に幾種もあつた。是等の傳記は多く口傳に過ぎなかつたが、中には書に綴つたものもあつた。餘程古くて、親しく基督の警咳に接した人々の手に成つたものも無いではなかつた。それからするに第四福音書はズツと新しく、聖ヨハネが之に筆を染めた時は、

ネロの迫害から大凡三十年ばかりも後であつた。

(三〇)灰燼に歸せし神殿 — 猶太人の期待せるメツシア(Messiah)は、威權赫々として天下を征服し、四海に君臨すべき一大英傑であつた。彼等は羅馬に服従するのを堪ふべからざる屈辱を思ひ、紀元六十六年終に戈を執つて起ち、羅馬の羈絆を脱せんを計つた。羅馬は早速大軍を差向けた。ウエスバジアヌス(Vespasianus)帝の皇子タイトウス(Titus)は紀元七十年四月から九月に亘つてエルザレム城を圍み、激烈なる戦闘の後、漸く之を陥れ、其城廓を毀ち、其人民を屠り、其神殿を焼拂つた。神殿は永久破滅しないものと思つて居たユデア人の失望を知るべしであつた。

紀元七十一年六月タイトウスは軍を率ゐて羅馬へ凱旋した。今度の大勝利を語るべき戦利品を誇示しながら市中を練行いた。戦利品中には神殿中から奪取つた七枝の燭臺、供へのパンを陳べる几案、杯盃、律法書等が見受けられた。この行列を傍觀した羅馬の基督教徒は、恰も神の審判を面に見るかの如く感じたに相違ない。神殿は灰燼に歸した。禮拜用の聖器は異教徒の手に落ちた。舊律法は茲に廢絶された。猶太教の實行は全く不可能になつた。今後はたゞ會堂内に禁居するなり外はない。エルザレムには僅に神殿の石垣が残つて居るばかり、猶太人は今日まで之を「哀傷の石垣」と呼んで參詣を怠らない。兎に角、神殿の破滅は神の攝理に出たもので、イエズス、キリストも夙に其事を豫言して置かれた。

(三一) ユデア 教皇の教 會—エルザレムには紀元六十八年まで一個の基督教會が嚴存して居た。教會中ても最も古い創立に係り、聖殿の蔭に生存して、基督教播籃地の保護に任じたものである。該教會は例へば親戚の「御隠居様」に云ふ格で、無暗矢鱈に自己の權利を振舞し、何時も古を尊んで今を軽ずるのであつた。言ひ換れば多少ユデア教臭味を帯び、會堂を経ずして直に基督教に歸依せし信徒には、一向信用を置き得ないのであつた。



門旋凱のスウトイテ

然るに紀元六十八年聖都エルザレムの包圍される前に、この名譽ある老教會は其地を去つて、ヨルダン河の彼方ペララ(Pella)



ローマ軍戦利品を携へて行列する光景

云ふ異教地へ引越した。夫から五十年間云ふものは、エルザレムも焦土殘石の累々たる廢墟に過ぎなかつたので、其まゝ其處に踏止つた。固よりエルザレムから見るに頗る遠隔の地であつたし、彼の尊敬すべき老隱居も全く世に懸離れて、次第に忘却の墓に葬り去られた。然し夫は基督教の發展上むしろ慶すべき至で、是より信徒はエルザレムの天を望まずして、羅馬の空を仰ぐやうになつた。



アデユの嘆愁

羅馬にはティトゥスの戰勝記念に於て元老院の建てた凱旋門が今だに遺存する。其門の天井は兩側には凱旋當時の行列を浮彫にしてある。猶元老院の命じて鑄造せしめた記念牌もある。棕櫚樹の下に坐して愁嘆の涙に掻暮れて居る婦人の背後に、一勇士が傲然突立つて居る姿を見せ、周圍に「征服されしユデア—Judaea capta」を銘してある。愁嘆の婦人は敗殘のユデアを表し、傲然突立つる勇士はウエスバジアンヌ皇帝を示したものである。

第二章 對外史(つづき)、異教社會と基督教との衝突

第一節 迫害の原因

概観—基督教が異教世界に宣傳され、迅速な發展を遂げるや、間もなく舊來の社會と衝突を來し、

二世紀半の久しきに亘つて血腥き迫害の嵐に吹き捲られた。その二世紀半の間には、相當靜謐な時期を見ることも無いではなかつたが、然し絶對的安靜、決定的平和を樂むことは出来なかつた。史家はこの長年月に亘れる迫害を十回に區分するを常として居るが、然しその數字は皇帝の命に基き、全國的に行はれた迫害のみに當り、それとは別に民衆の狂暴、地方長官の獨斷によつて捲起されし迫害も少くはなかつた。

今右十回の迫害を略記する前に、一應ローマ帝國内に於ける傳道の便宜とその障礙を探り、併て迫害の原因を突き留めるのも、強ち無益ではあるまいかと思ふ。

(三二) 一 諒解し難い幸福——基督教が廣く世界に流布發展して、牢乎たる根據を据ゑるに至る迄には、固より多大の便宜もあつたが、また少なからぬ障礙も横つて居た。異教の内容の貧弱空虚なるに反して、基督教の實質に富み、至大なる幸福を心靈上に及ぼせるが如きは、確に其便宜の一つであつた。

夫れ山に入つて山を見ず、山を出て始めて山を見る、今日基督教徒たるの幸福を眞に諒解せんご欲せば、全然基督教徒の立場を離れて觀察しなければならぬ。然し夫はなかく容易な事ではない。今や基督教の感化は世界に浸潤し、爲に社會も、家庭も、個人も全くその面目を一新した。吾人の呼吸する空氣までも、既に従前の夫ではない。我國の如く基督教とは比較的遠縁の間柄に在つてすら、社會萬般に亘つて基督教の影響を蒙つて居る事云つたら夥しいものである。況んや歐米諸國に於ては、その今日あ

るを得たのは、全く基督教の賜で、自ら基督教の大敵を以て誇りさせる人々までが、其長所、美點の上から云へば、紛もない基督教徒である。夫も其筈で、基督教なるものは、手軽に脱棄てられる衣服見た様なものではなく、寧ろその脈管を流れ、心臟に鼓動つて居る血液の如きものである。

然し初代の基督教徒は、今日吾人の諒解に苦む幸福をば、十二分に體驗するこゝが出来た。彼等は異教を去つて基督教に歸依するに共に、自己心靈の全く一變せるのを痛切に感得した。改宗前と改宗後の状態を比較して、その變化の著しいのに驚かざるを得なかつた。加ふるに基督教徒になつても、周圍は異教徒ばかりなので、基督教徒生活と異教生活を兩々突合せて見るの便宜もあつた。

彼等が第一に有難く感じたのは、信仰の幸福、眞の神を信じ、自己の現世、及び來世に於ける運命を知り得るの喜悦であつた。次に眞の愛、神を愛し、又神の爲に人を愛するの幸福であつた。異教の天下は暗黒に閉ざれ、冷い、利己一天張りであるのに反して、基督教會は明るく、朗か、温かい愛の漾へる世界であつた。

(三三) 一 基督教徒となるの困難——然し基督教徒となるには、斯うした便宜を得るに共に、また種々の障礙にも打突からねばならぬ、右様の幸福は随分苦しい犠牲を拂つて買はなければならぬのであつた。基督教の教義中には、人智の得て悟り難い女義がある。之を信するには傲慢自尊の念を斷然取棄てねばならぬ。基督教が自他に對して負はしめる義務も頗る重大で、之を全うするには、利己心が微塵もあつて

はならぬ。異教の中に在る間は、何を信じようか、何を爲さうか、思ひの儘であつたが、一旦基督教に歸依してから云ふものは、全然その生活を一變し、誠意から神と教會とに服従せねばならぬ。

以上の二つでもそれは、重大な障礙であるのに持つて来て、更に容易ならぬ難關が横つて居た。歴代の羅馬皇帝は、刀鋸鼎鑊を備へて臣民の自由を束縛し、之が基督教に歸依するのを嚴禁した。蓋し個人を一變せしめた基督教は、延いてはその個人の集團たる國家をも、根底から革新するに至るのは、火を見るよりも明瞭であつた。然し國家でも、皇帝でも、當時の世界を喰物にして居たので、一變されずには自腹を肥やす途が杜絶する。是れ彼等が極力基督教を禁遏し、個人の一新を阻止して、現状維持に腐心した所以である。

(三五) — 基督教の迅速なる傳播 — 然し乍ら基督教は早くから社會の各階級に弘通傳播した。大家、名門は言ふ迄もなく、皇族間にすら頗る歡迎された。上は執政、及び其他の高官要職から、下は卑賤なる奴隷に至るまで、均しく之に隨喜した。蓋し神の人に聖寵を降し給ふや、全く一視同仁で、その貴賤、貧富を問ひ給はぬ。何人の靈も神の御目には平等無差別である。金玉の光眩き寶座に安せる帝王だらうか、番犬に伍して階段の下に眠れる奴隷だらうか、靈魂上から云へば何れも苦痛に泣き、煩悶に惱める可憐兒なのである。

(イ) — 皇室と基督教 — 紀元九十五年、羅馬の基督教徒中に一人の執政官が居た。名をフラウイウス、クレメンヌ (T. Flavius Clemens) と呼び、時の皇帝ドミチアヌス (Domitianus) とは從兄の間柄であつた。夫人トミチーラ (Domitilla) も同じく帝の姪に當り、また熱心なる基督教徒であつた。クレメンヌとドミチーラは帝の最も近い親戚で、その二子は一時帝の後繼者に擬せられた。皇位は將に基督教徒の手に歸せんとしたのである。

(ロ) — 貴族と基督教 — 基督教に歸依せし貴族は他にも少からずあつた。而も夫が極めて舊い、由緒ある名門、嘗ては羅馬軍を提げて、世界征服の大任に當つた猛將、勇帥を出せし舊家、名門であつた。然し子孫は福音の前に拜跪くのを誇りとした。ネロ帝の時代に其名を謳はれた貴婦人ポンポニア、グレチナ (Pomponia Graecina) も多分基督教を信奉して居たらしい。紀元九十一年に執政官となつたアチリウス、グラブリオ (Aclius Glabrio) の如きは確に基督教徒であつた。

(ハ) 奴隷と基督教 — 奴隷は固より人間であつたが、羅馬では毫も其人格を認めず、單に一個の物品として取扱ひ、活かさうと殺さうと、全く主人の意の儘であつた。然し教會はさうした非人道的見解を採らない。奴隷もイエズス、キリストに贖はれた一個の靈魂を有する。その靈魂の價値から云ふと、決して主人の夫に劣る所はない、と説いた。説いた許りではない、實際教會内に於ては、洗禮を授けるにも、聖體を拜領させるにも、主人と奴隷との別を設けない、全く平等に待遇した。斯くて奴隷は基督教の御蔭で物品たるを免れ、立派に人格を備へた人間となり、主人と雖も之に對して當然拂ふべき義務を負

はねばならぬ様になつた。

(二)——婦人と基督教——基督教は婦人の地位をも改良した。一體異教の家庭組織に云ふものは、たゞ强者、即ち男子を利する一方で、眞面目臭つて、男尊女卑を唱へたものである。女子は假令主婦になつても、何等の權利なき未丁年者も同様に取扱はれた。内に在つて家を治めるのが女子の本分だ、家外の事は女子の與知るべき所ではない。重要事件は一切女子をして携らしむべからず、云ふのであつた。然るに基督教はこの状態を一變せしめた。重要事件の前には男女の差異は無きものだを教へて、大に主婦の權威を高めた。異教徒の家庭に在つては、一度寡婦になるに、母の名義すら失はねばならなかつたのに、基督教徒間では、依然その名義を保持した。否、寡婦の我子に對する權力は、一段に完全にして尊重すべきものを見做された。

(三五)——迫害の原因——迫害の原因は一にして足らずであつた。

(イ)——羅馬及び皇帝禮拜——羅馬帝國では、羅馬及び皇帝を直に神となし、殿堂を各地に建立して之を禮拜した。往々現皇帝に先皇帝を合祀することもあつた。全く一種の愛國的宗教だ。心に信するに否かは各人の隨意であつたが、實行だけは嚴重に命じられた。固より實行に云つても頗る手輕なもので、一擧手の勞たるに過ぎない。皇帝の半身像の前へ進んで、一抹の香を焼けば夫で可いのであつた。

抑も古は都市(若しくは小國)毎に、夫々の宗教が設けられ、其宗教は全く其都市(若しくは小國)に

局限されてあつた。眞の神を知らない古代人は軍隊を作るが如く、隨意に宗教をも製作し、之を指揮統率した。國家は萬能で、思ひの儘にその國民を取扱つた。國家即ち神であつた。宗教も兵役と同じく、國家に對する神聖なる義務で、國民は皆その所謂國家神を祀らなければならぬ、否らざれば一死あるのみだ。國家神を祀つてこそ始めて公民權が得られる。宗教は既に國家の宗教である。外人は之に入るを許されない。随つて何等の權利をも享有し得ない。國家の宗教を信奉し得ない外人は、全く破門されたのも同様、否な殆ど仇敵視されるのであつた。

基督教の説く所は全く之に反する。人は互に外人ではなく、皆同胞である。同一の宗教を信じ得るのみならず、教會に云ふ一大家族に加はり、必ず之を奉じなければならぬ。

羅馬及び皇帝の禮拜も、やはり一都市の宗教で、たゞ羅馬市が幾多の都市を併呑し、打つて一丸とした迄に過ぎなかつた。當時の文明世界は、羅馬市を擴大した一大都市に併呑し得るので、其宗教もやはり羅馬の宗教であつた。羅馬市は擴大されても、その異教的色彩は決して失はれない、否、却つて益々濃厚の度を加へ、一層鮮明に國家神の特色を發揮した。軍隊に號令するが如く、其宗教をも左右し、帝國民たる者は併呑された小都市に於けるに同じく、擧つて其宗教を信奉しなければならぬ。たゞ異なる所は、其宗教を左右する國家が、いよく其廣きを増し、之が信奉を命じられる人民が、ますく其多きを加へたこと、國家神が自己の利益の爲に其宗教を驅使し、羅馬及びアウグストゥスの名義で以て、自

己の禮拜を強制した事、この二つに過ぎなかつた。

斯の如く羅馬の宗教は、單に都市的異教を擴大したもので、二個の謬説が其根底を成して居る。一つは宗教と政治との混淆で、それは從來から併呑された小都市に行はれ來つたものである。一つは羅馬及び皇帝を神として禮拜するので、是は羅馬の新發見であつた。要するに彼等は、自製の傑作とも謂ふべき羅馬文明の前に叩頭再拜した。而も其禮拜は國民の神聖なる義務とせられ、肯ぜざれば死を俟つのみであつた。然し右等の謬説は、「セザルの物はセザルに歸し、神の物は神に歸せ」と叫んで、基督が夙に排斥し給つた所で、基督教徒たる者は、必ず之を承引してはならぬ、迫害の原因は主として此處にあつた。

(ロ) — 先帝を神列に就かしめる — 羅馬のキャンパス・マルチウス(Campus Martius)の大練兵場に於て、先帝を神列に就かしめる式は實に盛大を極めたものであつた。帝が崩するや、直に白蠟を以て半身像を作り、八日目に元老院議員は之を奉じて練兵場に到る。軍隊は云ふも更なり、無數の群衆が先を争つて参列する。新帝は最高神官となりて、式を司り、自ら火を靈柩に放つと、忽ち嘯鳴たる喇叭の音が起り、一羽の鷲が急に靈柩の中を飛び出して空中高く舞ひ上る。先帝の靈が昇天して神々の列に就かせ給ふのだ。是に於て神官は祈禱を誦へ、犧牲を献ける。牡牛を打倒し、其腹を割いて、未來の吉凶を卜するのであつた。

(ハ) — 基督教徒に應る嫌疑の雲 — 斯る儀式は神に奉るべき善の崇敬を、セザルに呈するのである。

基督教徒たる者は、これに参列する譯には行かぬ。するに忽ち國賊の嫌疑が彼等の上懸つて來る。既にネロ帝の迫害當時からして、基督教徒は迂散と見られた。況んや彼等は國家の認定しない宗教を奉じて居る。爲に其嫌疑の雲は一段と深きを加へるのみであつた。

歴代の羅馬皇帝は妙に團體組織を恐れたもので、トラヤヌス(Trajanus)帝の如き名君ですら、消防組の設置を許容さず、消防組を設置せんよりは、寧ろ全都市を灰燼に歸せしむるに若くと思つた。斯る次第があるから、基督教徒の集會を認可する筈がない。認可されぬのに集會すれば法律違反だ。故に基督教徒は絶えず國法に違反して居る譯になる。既に嫌疑の雲に包まれた彼等である、頓んでもない濡衣を着せられ、聖體拜領を以て嬰兒の肉を喰ふのだ、と誣ひられるに至つたのも怪むに足りない。

(ニ) — 基督教徒は無宗教者だ — 基督教徒は迂散と見られ、其筋の注意人物となつた。個人は之を告訴し、官吏は之を檢舉するを得た。之を判事の前に引据ゑるに、判事は直に聲を勵まして「其方には嫌疑が懸つて居る、是非晴さねばならぬ、焼香して陛下を禮拜し、他意なきを證せよ」と命ずる。「否」、基督教徒の答は始から分り切つて居る。判事は承知しない、「其方は思遠をして居る。單に一個の儀式たるに過ぎないのだ。然し國法だから守らぬ譯には行かぬ。應へば夫で可し、直に放免してやる。應はぬさあつては、其儘では置かぬぞ」。信徒は頑として應じない。「よし然らば、其方は神々を崇拜しない無宗教者だ。羅馬及び皇帝は現身神であらせられるのに、之を承認しないさあつては大逆罪だ」。斯う云

ふ理由の下にさし／＼有罪の宣告を下し、之を極刑に處するのであつた。

(ホ)―基督教徒を人間の敵と見做す―右様な基督教徒の態度は、異教徒の諒解に苦む所であつた。判事は威丈高になつて「解らぬか、其方が耶蘇神を尊拜するのを禁じはしない。たゞ帝國の神々も、全世界の等しく認める所だから、崇敬せねばならぬのだ」と怒鳴り付ける。然し基督教徒は動かぬ。爲に「全人類の敵」と宣告され、基督教徒と云ふ名ばかりでも、赦すべからざる大罪と見做された。時には「集會法違反」の罪名さへ加へられ、容赦なく處分されるのであつた。

(ハ)―國難の責を基督教徒に負はせる―紀元六十四年から同三百十三年に至る二百五十年間と云ふものは、異教徒は絶えず嫌疑の目を失はして、基督教徒を睥んだ。殊に教徒の數が著しく増加するよゝ見た時、帝國が戰爭や、饑饉や疫病やに苦める時等は、いよく躍起になつて、其責を基督教徒に負はせ、「是等の天災地異は神々の祟だ。基督教徒の無宗教を怒らせ給ふ結果だ。神々を宥め奉るには罪人を處罰せねばならぬ。基督教徒を獅子に投ぜよ(Christianos ad leones)」と叫んで、到る所に基督教徒を檢査し、拷問し、虐殺した。史家は斯る暴戾の行はれし期間を迫害時代と呼び、之に時帝の名を冠して、某帝の迫害時代と稱するのである。

第二節 迫害の顛末

(三六)―迫害の二大別―迫害の經過とその原因とを概観するに、之を二大別して、前期の四大迫害と、後期の六大迫害とになすことが出来る。

(イ)―ネロ帝より、セプチムス・セウエルス帝に至るまでの迫害の原因は、主として基督教徒にたいするユデア人、及び異教徒の敵意に在るのであつた、ミ謂はなければならぬ。ユデア人は基督教徒を以てモイゼの律法を蔑視せる背教者と見做して、之を官憲に告訴した。異教徒はまた彼等が皇帝を禮拜しない、神々の祭禮にも與らないのを見て、不忠、不君、不敬虔の徒輩となし、爲に國家の慘禍を招くのだと稱し、之が虐待、殺戮を叫んで止まなかつた。それよりしてネロ帝の發布にかゝる「Christianos esse non licet―基督教徒たるを許さず」と云ふ禁教令が勵行され、「基督信者」といふ名の爲に、幾多無辜の民が拷問、所刑されるに至つたのである。

(ロ)―後期の六大迫害は主として政治的理由に基き、皇帝の發案と敵意とにその原因を歸せなければならぬ。彼等はローマの國境が蠻族に脅かされるを見るや、帝國の一致を妨げる様な宗教の宣傳を禁絶し、以て協力同心外敵に當るべしと主張したものである。

(三七)―前期の四大迫害―第一世紀の後半より第三世紀の初にかけて、四回の迫害がネロ、ドミチアヌス、

トラヤヌス、マルクス・アウレリウスの四帝によつて遂行された。

(イ) 第一回ネロ帝(六八)の迫害は既に略記した通りであるが、彼の死後、基督教徒は可なり長く平和を樂むことが出来た。

(ロ) 第二回ドミチアヌス帝(九六)の迫害—ドミチアヌス(Domitianus)帝はエルザレムを陥れたティトウス帝の弟で、彼が迫害の大鉞を振つたのは、最後の二年間(九六)であつた。キリスト教徒がユビテル神殿の維持費を献納せよと命ぜられて、拒絶したのが、その導火線であつたらしく思はれる。

犠牲者の重なるものは使徒聖ヨハネ、帝の甥で、九五年に執政官たりしフラウイウス・クレメンス(Flavius Clemens)、その夫人フラウイア・ドミチラ、及び執政官アチリウス、グラブリオ(Aelius Glabrio)等であつた。使徒聖ヨハネはエフエゾからローマへ引致され、ラテン門前にて沸騰せる油釜に投ぜられた。然し何の危害をも受けず、却つて一層健になつてその油釜を出で、バトモス島(Patmos)に流され、其處で黙示録を書いた。ドミチラはパンダタリア島(Pandataria)へ流された。

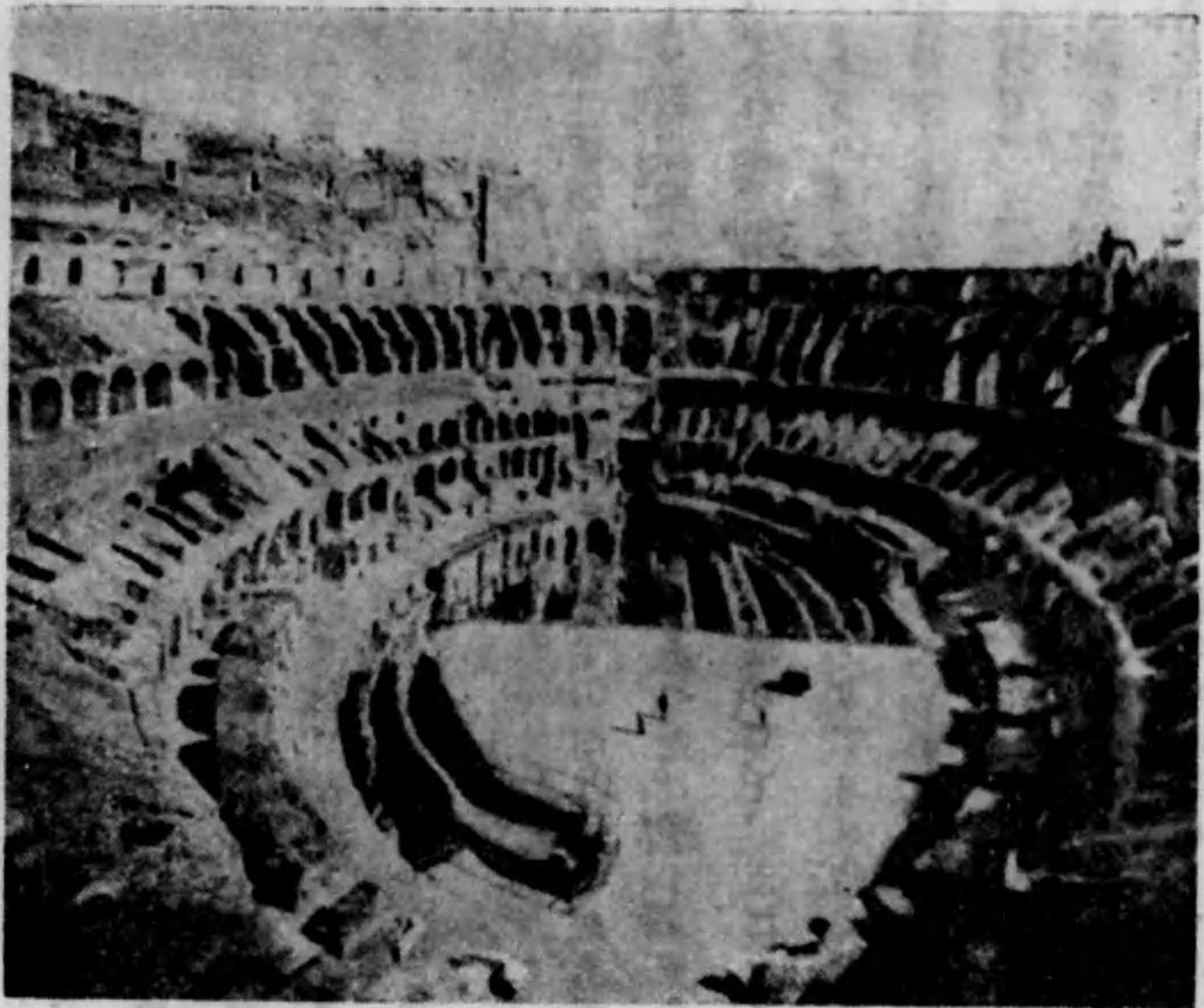


帝ヌヤラト
(ハ) 第三回トラヤヌス帝(九八)の迫害—トラヤ

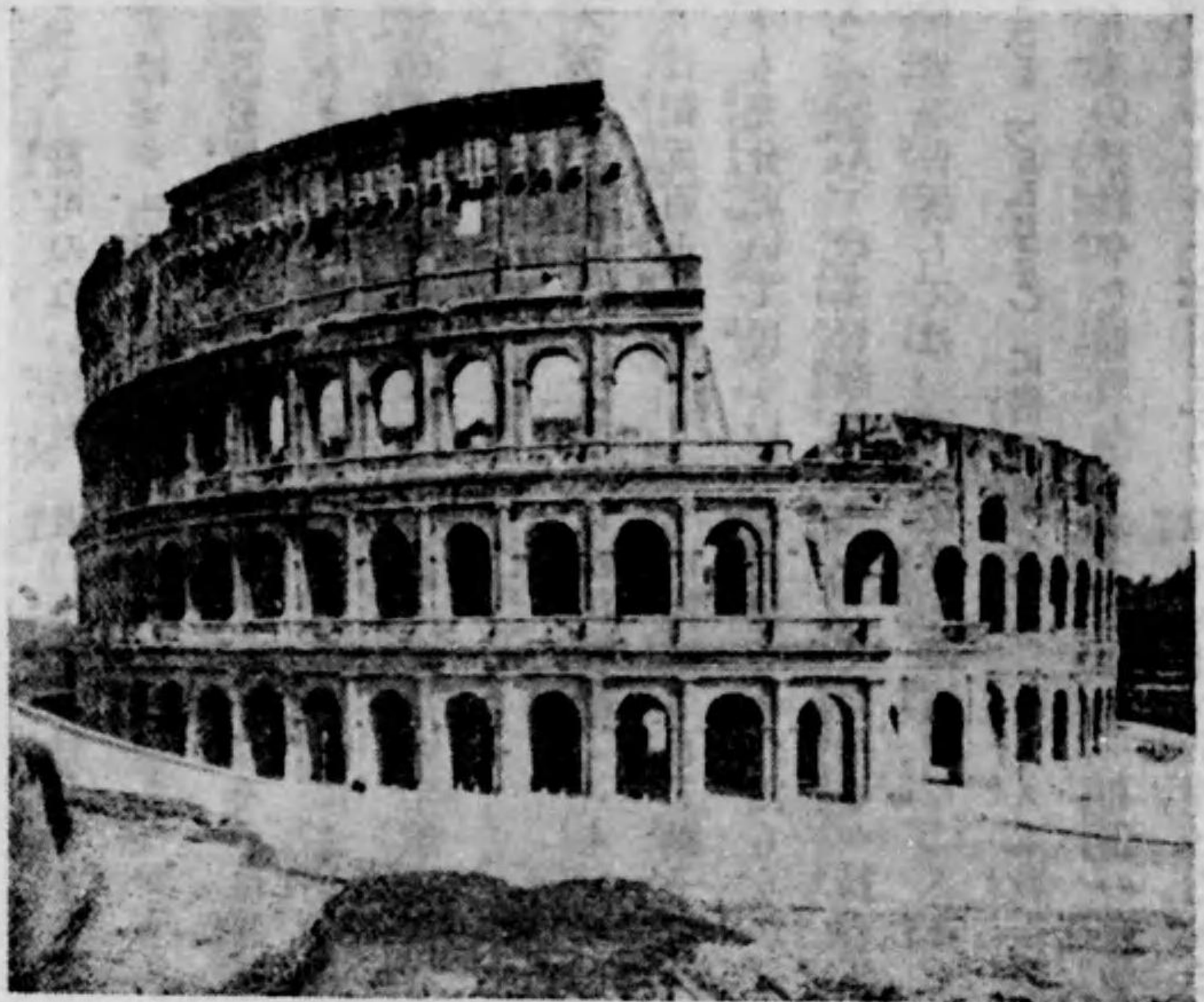
ヌス帝は、最良の君主(Optimus princeps)とへ呼ばれ、著名な立法家たると共に、また征服者でもあつた。然し國家萬能主義を奉じ、即位二年には勅令を發して、許可のない結社、及び集會を禁じ、キリスト教徒をして立つ瀬もなきに至らしめた。時に小アジアはビチニアの總督少プリニウス(Plinius Junior)は書を帝に奉り、キリスト教徒にたいして如何なる處置を執つて可なりやと問うた。帝はそれに答へて「進んで檢舉するには及ばぬ。たと告發されて、キリスト教徒たることを自白したら、法によりて處分せよ、然しキリスト教徒に非る旨を斷言し、その斷言の偽りなき證據を以て、神々に祭祀を献けた者は無罪放免すべし」と曰つた。

犠牲者の重なのはアンチオキアの司教聖イグナチウス(S. Ignatius)、エルザレムの司教聖シメオン、ローマ教皇聖クレメンス一世等であつた。聖イグナチウスは紀元百七年頃、ローマに護送されて獅子に投ぜられた。場所は多分新築したばかりで、まだセメントも充分乾いて居ない大圓戲場であつたらうか。

トラヤヌスに繼いで立つたアドリアヌス帝(Adrianus)(一一七)は基督教徒にたいして同情心を持つて居た譯ではないが、民衆がワイ／＼と騒ぎ立て、基督教徒を告訴しては、國家の安寧を害すること甚しいので、一二年總督ミヌチウス、フンダヌス(Minutius Fundanus)に書を與へて、キリスト教徒の所刑を叫ぶ民衆に屈すべからずと嚴命して居る。然し在來の禁教令を撤廢しなかつた爲め、相當の殉教者を出した。その中で最も著名なのはローマのアレクサンドル(Alexander)常にローマ教皇となせや



コロッセオと稱し、客十萬以上を容るべき大圓劇場の現狀



外から見た大圓劇場

も、實は然らず云ふことだ。(ヨウスタキウス (Eustachius)、其妻のテオピスタ (Theopista) の三子、及びシンラオロザ (Symphorosa) のその七子であつた。

次帝アントニヌス・ピウス(二六二)もキリスト教徒にたいして敵意を挟んで居たのではなく、民衆が蜂起して教徒の刑戮を迫るのを嚴禁せし程であつたにも拘らず、依然迫害は行はれ、教皇テレスフォルス (Telesphorus)、ヒジヌス (Hyginus)、ピウス一世、エルザレムの司教マルクス・スミルナの司教ボリカルプス等の殉教を見るに至つた。ボリアルプスは聖ヨハネ使徒の弟子で、「キリストを誑へ」に總督より命ぜられても、毅然として屈せず、「私がキリストに奉仕するに茲に八十六年、未だ曾て何等の害をも蒙つたことがない、如何して私を救ひ給うた王様を冒瀆するに出来ませう」と答へて殺された。

(二)―第四回マルクス・アウレリウス帝(二六〇)の迫害―マルクス・アウレリウスはストア派の哲學者で、「瞑想録 (Meditationes)」を著し、高潔な思想、感嘆すべき格言を蒐集して、今に其名を誦はれて居る。然し當時の民衆はチベル河が氾濫しても、饑饉に襲はれても、疫病が流行するか、北蠻が侵入するかしても、直にその罪を基督教徒に歸し、「クリスチャンを獅子に投ぜよ」に叫ぶのであつたから、帝も彼等の歡心を買はんが爲に、前々よりの禁教法を勵行して、第四回迫害を起し、ローマの全天下を腥い血の雨に漂はせた。

有名な殉教者はローマの護教家聖ユスチヌス (S. Justinus)、聖女チエチリア (Cecilia)、リオンの司



アリチエチ女聖

教聖ポチヌス(S. Potinus)・ウイエンヌの助祭聖サンクツス(S. Sanctus)・聖アツタルス(S. Atralus)・若年の女奴隷聖ブランヂナ(Sa. Blandina)等であつた。

(ホ)―雷電部隊―マルクス・アウレリウス帝は一七四年マルコマン族(Marcomani)を親征して、ドーナウ河畔に戦ひ、敵の重圍に陥り、水道を絶たれて今にも渴死せんばかりになつた。帝は魔術師に命じて雨乞をさせたが、固より何の効もあらうはずがない。幸ひ軍中には「雷電部隊」(Legio Fulminata)を稱し、カッパドキアのメチレナ(Metlena Cappadociae)で募集した將卒皆基督教徒より成れる第十二部隊が居た。この危機一髪に際して六千の將卒は營外に出で、兩手を擴げて神の御助を祈つた。するに一天俄にかき曇り、やがて篠つく豪雨となり、ローマ軍は胃や楯にその雨を受けて、渴を醫した。敵は隙を見て急に攻め込んで来たが、雷鳴はためき、大粒の降雹さへ加は

つたのに膽を潰して逃走した。この奇蹟に感じて帝は迫害中止を命じた云ふ傳説もあるが、信するに足りない。なるほき夫によつて基督教徒の信仰はいよく堅固になつたであらうが、然し帝は自分等の救はれたのをユピテル、ブルウィウス神(Jupiter Pluvius)の御蔭によるのだと稱して、少も迫害を中止しないのみか、一層之を激化せしめた。



帝スエウセ・スムチブセ

て頗る寛容の態度を持した。治世の初めアフリカやエジプトを吹き卷れる迫害の嵐は地方官の獨斷に出で、帝の意ではなかつた。然るに二百二年、帝は東國を巡行し、キリスト教勢の隆盛に一驚を喫し、それを喰ひ止めんが爲、従前の迫害令を別種の新令を發して、キリスト教を宣傳したり、之に改宗したり

するこゝを禁止した。随つて生れながらなるキリスト教徒は措いて問はなかつたが—是も文字通りには行はれなかつた—新に改宗せる信者は、峻刑に處せられて多く殉教した。

迫害は全國的であつたが、エジプト、アフリカ、ガリア等では特に猛烈で、史家ヨウゼビウスの言ふ所によるに、やがてアンチキリストが来るのではあるまいか、人々は竊に危懼の念に打たれたものであるが。

主なる殉教者はアレクサンドリアの聖レオニダス (Leonidas—オリゲネスの父)、女奴隷の聖ポタミア (S. Potamiana)、及びその母マルセルラ (S. Marcella)、カルタゴの聖女フェリチタス (S. Felicitas)、及び聖女ヘルペツア (S. Perpetua)、リオンの司教聖イレネウス (S. Irenaeus)、ローマのウイクトル (S. Victor) 教皇等であつた。

セプチムス帝に繼いで立つた三帝は、何れもシリア出身で、格別ローマの國教に關心を有せず、それだけキリスト教には寛容であつた。先づカラカラ帝 (Caracalla—二一七) の乳母はキリスト教徒であつたらしい。次帝ヘリオガバルス (Heliogabalus—二一八) はすべての禮拜式を自分の信奉せるシリアの宗教に取り入りたいと思つた。アレクサンデル・セウエルス帝 (Alexander Severus—二三三) は母后ユリア・マンメア (Julia Mamaea) に倣ひ、頗るキリスト教徒に好意を寄せた。宮中の神棚には、アブラハムや、オルウェウス (Orpheus) の傍にキリストの像を安置し、聖書より抜粹せる格言を宮廷の四壁に刻

みつけた。ローマの基督教徒が禮拜所を建てようとして、居酒屋連土地を争つた時、帝は彼等の爲に有利な裁決を下して「この地を居酒屋に與へるよりは、神の禮拜所を建てさせたがましだ」云つた位。それにしても迫害は全く沙汰済みはならなかつた。教皇聖カリクストゥス (Callixtus) の殉教したのは二二二年で、この帝の時であつた。

(四)—マクシミアヌス帝 (Maximinus) (二三三—二三八) の第六回迫害—アレクサンデル帝を弑して自ら位に昇つたのはトラキア (Thracia) 出身のマクシミアヌス帝で、彼は心からキリスト教徒を憎んで居た譯ではなかつたのだけれども、アレクサンデル帝の最負したものと云ふ處で之を迫害し、新に法令を發して司教及び司祭を殺戮せしめた。然し彼の治世が長からざりし上に、北蠻侵入の憂ありし爲め、この法令も全般的には行はれなかつた。特に猛烈な迫害を見たのは小アジアのポントゥス州、ミカッパドキア州であつた。教皇聖ポンチアヌス (Pontianus) と著名な司教聖ヒッポリトゥス (Hippolytus) はサルディニア島に流されて死し、同じく教皇聖アンテルス (Anterus) もこの迫害に殉教した。

(ハ) 後期の迫害中でも殘忍酷薄を極めたのは最後の三回であつた。三回とも臨時に法律を發布するが勅令を下すかして之を斷行した。それには信徒の捕縛から宗教の吟味、刑罰の種類まで一々規定してあつた。規定通りに都にも鄙にも厲行せられた。全く組織的に隅から隅まで、草を分けて信徒狩をやつたものである。聖職者は言ふまでも無く、元老院議員だらうと、貴顯紳士だらうと、宮廷の大官でも、普

通の平信徒でも、容赦なく搜索し、檢舉し、殺戮した。家宅、墓地、動産、聖書類に至るまで一切官没し、基督教を根絶して、羅馬の國教を樹立せん計つたのである。

(二) — デチウス帝(二四九)の第七回迫害 — マクシミアスの後にゴルヂアヌス(Gordianus)(二四八)ミアラピア出のフリッパス(Philippus)(二四九)が相次いで立ち、教會に平和を與へた。フリッパス帝の如きは古代著作家より基督信者なりと曰はれる位に好意を表してくれた。然し内心は兎に角、公には異教徒であつたが、帝にせよ、皇后のセウエラ(Severa)にせよ、オリゲネスと文通して居たことだけは確だ。平和は十年間ばかりも繼續した。二四九年デチウス帝(Decius)が位に即いた時、ゲルマン族の一なるゴト族が黒海方面より進んでドナール河畔に迫つた。帝は盛に國難來を叫び、今こそ舉國一致以て外敵に當るの覺悟であらねばならぬ、然しキリスト教は主義として政治と宗教との分離を唱へるので、斯くては國民の統一も望むべくして得べからざる所、一舉に之を撲滅するの外なしと思ひ、峻嚴な法令を發し、少し怪しいと見たものは、すべて之を神社に召集し、その名を呼出して焼香を命じ、キリストを唾棄せしめ、然る後に證明書を與へて放還した。その證明書は今に遺存して居る。命に應ぜざるものは、死刑、追放、財産沒收等に處した。死刑と云つても、一氣に殺して了ふのではない。なるべく死なぬ様に長く苦め、時としては誘ふに耳目の樂を以てして、彼等を背教せしめん謀つた。其點は我徳川幕府の迫害法によく類似して居る。比較的長期の平和に氣を緩め、信仰を眠らして居た揚句に突

然かゝる猛烈な迫害に見舞はれたので、懦弱、冷淡な信徒が色を失ひ、狼狽措く所を知らなかつたのも無理はない。爲に最初の隱修士、聖パウルス(S. Paulus)の如く、テバイド(Thebaid)の荒野へ走つて、その生命と信仰とを全うせんを欲せし者も少くなかつた。然し恐れて偶像を祀つた者(Sacrificati)、像前に燒香したもの(Thurificati)、祭祀を行つたこと云ふ證明書を受た者(Libellatici)、或は役場の帳簿にその名を記入して、帝意を果したかの如く装へる者(Acta facientes)は頗る多かつた。それにしても飽まで信仰を固守して、微動だもしない者(Sabiles columnae)が幾千を以て數へられたのは、誠に以て痛快事であつた。

殉教者中でも指を屈すべきは、ローマの聖ファビウス教皇(S. Fabianus)、聖アブドン及び聖センネン(SS. Abdon et Sennen)(スルヤ人でローマに來て居たもの)、シチリア島の聖アガタ(S. Agatha)、マンチオキアの聖パピラス(S. Pabylas)、エルザレムの聖アレクサンデル司教、バリーの聖ドニー(チオニジウス—S. Dennis)イタリヤはノラの聖フェリクス(S. Felix)、聖クリストフォルス(S. Christophorus)(大力無双で、キリの重さに堪へなかつた)等であつた。有名なオリゲネスもこの迫害に投獄の憂目を見、嚴しい拷問に掛けられても、毅然として屈しなかつた。二五一年デチウス帝歿して迫害は終を告げ、出獄を許されたが、禁錮中に甚く健康を害せし爲め、兩三年の後、終に歸らぬ旅に就いた。

(ホ) — ヴレリアヌス帝(Valerianus)(二六〇)の第八回迫害 — 初め帝は頗るキリスト教徒を優遇したが、

二五七年に至つて、魔術師マクリアヌス(Macrianus)に説きつけられて第一法令を發し、信徒の集會を禁じ、カタコンブ、その他の墓地を官没し、司教、司祭、助祭に命じて神々に祭を献けしめ、應ぜざれば追放に處すべしと威嚇した。翌二五八年更に第二法令を飛して、聖職者を法廷に引出して斬首せしめ、武士、元老院級の信徒はその族籍を剥ぎ、その財産を没收し、婦人は財産を巻き上げた上で遠島に處した。迫害令は嚴に厲行せられ、老若男女、貴賤貧富の別なく、教難に殉せし信徒は夥しい數に上つた。

就中、最も有名なりしは教皇聖ステファヌス(S. Stephanus)、及び聖クシストゥス二世(S. Xistus II)、助祭聖ラウレンチウス(S. Laurentius)、聖體の殉教者と尊ばれる聖タルチシウス(S. Tharcisius)、カクタゴの司教聖チブリアヌス(S. Cyprianus)、聖クリサントゥス及び聖ダリア夫妻(SS. Chrysantus e Daria)、アフリカのウチカ市で生石灰の池に投ぜられ、白坊主となつて死亡せし所より「白團—Massa Candida」に云ふ榮名を博せし百五十三人の殉教者等であつた。

(ハ) — アウレリアヌス帝(三七〇)の第九回迫害 — ワレリアヌス帝に繼いで立つた子のガリエヌス(Gallienus)(二六八)は迫害を中止し、先帝の代に没收せしカタコンブ、墓地、集會所等を返還した。キリスト教は「適法の宗教—Religio licita」に認められなかつたにせよ、二百六十年から三百年までは比較的平和を享有することが出来た。

尤もアウレリアヌス帝は二百七十三年から迫害令を準備して居たが、捺印前に落命したので、執行の運びを見るに至らなかつた。されば帝を以て第九回迫害者として特記するのは當らない様に思はれる。

(ト) — デイオクレチアヌス(三〇四)とその同僚の第十回迫害 — 基督教は長く平和を享有し、その間に多大の發展を遂げ、多くの改宗者を得た。然しその改宗者は數の多きに比して、餘り價值あるものではなかつた。平和は信仰心の弛緩を來し、微温の空氣を漲らした。

デイオクレチアヌス帝(Diocletianus)は英邁の君主で、北蠻の侵略いよくその甚しきを加へ來るを見るや、分國制度を取り、鞏固な政府を組織するに若くなしと思ひ、二八六年帝國を兩分して自ら東國のアウグスツス(Augustus)となり、西國のアウグスツスにはマクシミアヌス・ヘルクレス(Maximianus Hercules)を立てた。デイオクレチアヌスはキリスト教に好意を有したが、マクシミアヌスはその反對に出で、教徒に無法な迫害を加へた。

二九一年デイオクレチアヌスとマクシミアヌスの兩アウグスツスはミラノに會合し、更にガレリウス(Galerius)とコンスタンチウス・クロルスとを副帝(Caesar)に任命し、斯くて翌年三月より帝國は四分せられた。デイオクレチアヌスはニコメデアを都として、アジア、トラキア、エジプトを、ガレリウス、チエザルはシルミウムを都として、イリリア、マケドニア、ギリシア、クレタ島を領有し、マクシミアヌス、アウグスツスはミラノに都して、イタリア、イスパニア、アフリカを支配し、コンスタンチウス・クロ

ルス、チエザル(Constantius Chlorus)はトレヴ(Treves)に都してガリア、ブリタニアの統治に任じた。即位の初めディオクレチアヌス帝は決して基督教徒の敵ではなかつた、皇后のプリスカ(Priaca)、皇女のワレリア(Valeria)も基督教徒だつたので、帝は教徒を黙認した。否、むしろ彼等を重く擢用した。

然しガレリウス、チエザルが絶えず基督教徒の上に悪聲を放ち、その危険を叫んで止まなかつた結果、二九五年先づ軍隊に向つて迫害の火蓋が切つて放たれた。ローマの軍隊中にはアフリカ駐屯軍を除けば、基督教徒が頗る多かつた。軍人たるものはキリスト教を棄てるか、軍籍を去るか二者その一を擇ぶべし云ふ命令が出るや、キリスト教徒は殆ど皆軍籍を去つた。中には殉教を遂げたものもあつた。

紀元三〇三年二月二十四日、帝都ニコメディアに迫害令が掲示された、(1)基督教徒の集會を禁ず。(2)聖堂を倒壊せよ。(3)教會文書を引渡せ。教徒は皆背教せよ、背ぜざれば、地位あるものは公民權を剝奪し、下層民は奴隸となすべし云ふのであつた。その頃宮殿に火災が起り、地方にも叛亂が爆發した。するにガレリウスは一切の罪をキリスト教徒に歸し、ニコメディアの司教、及びその部下を殺戮し、信徒も多く監禁した。次で第二令を發し、聖職者を投獄せしめた。牢獄は爲に滿員となり、普通の犯罪者を收容する餘地がなくなつた。間もなく第三令が出た。入牢者にして神々に祭を献けた者は之を赦免し、信仰を固守して動かない者は、あらゆる拷問を以て之に臨み、その決心を打破すべし云命じた。三〇四年に至つて政府は更に第四令を發して、キリスト教徒たるものは皆神々を祀るべし、應ぜざるも

のは一死あるのみ、と言ひ渡し、一私人にでもキリスト教徒を虐待し、放逐し、殺害することを許した。地方總督の中には身の毛も森立たんばかりの酷刑峻罰を考案して、キリスト教徒の血を、川の如く瀧の如く海の如く流したものが多かつた。迫害の特に猛烈なりしは東國であつた。コンスタンチウス・クロルスだけは頗る寛大に信徒を取扱ひ、命じて教會を閉鎖し、その二三を破壊せしめたのみに止めて、逮捕も殺戮もしなかつた。

三〇五年ディオクレチアヌスとマクシミアヌスの兩アウグストスは讓位し、ガレリウスとコンスタンチウスがアウグストスとなり、フラヴィウス・セウエルスとマクシミアヌス・ダイアがチエザルミなつた。フラヴィウス・セウエルスはイタリアミアフリカを得て、コンスタンチウスの配下に屬したので、直に管内の禁教令を弛めた。後マクシミアヌスの子マクセンチウス(三〇六)がセウエルスを排斥し、自立して、アウグストスと稱したが、然し迫害は斷行しなかつた。東國ではガレリウスの下にチエザルミなつたマクシミアヌス・ダイアはガレリウス以上に冷酷なりしより、ガレリウスはいよく圖に乗り、三一年まで迫害を續行した。だがキリスト教撲滅の到底實現し得べからざるを悟り、臨終の床より「公安を害せざる限り、基督教徒は自由に集會するを得」云ふ勅令を發して、迫害令を撤廢した。この勅令にはマクシミアヌス、リチニウス、及びコンスタンチウスの嗣子コンスタンチヌスも署名したのであるが、東國ではマクシミアヌスの爲に一片の反故に終り、迫害は依然として行はれ、以て三二三年、彼が死亡の時に及んだ。

今回の迫害は全國的ではあつたし、且つ長期間に亘りて行はれただけに、殉教者の數も非常に多かつた。その中の主なるを擧げるに、カッパドキアはチエザレアの聖ゼオルジウス(S. Georgius)、ニコメティアの聖ドロテウス(S. Dorotheus)、聖ゴルゴニウス、聖アンチムス司教、ローマの聖セバスチアヌス(S. Sebastianus)、聖マルクス及び聖マルチエリアヌス、聖女アナスタジア、聖女アグネス、シラクサの聖女ルチア(S. Lucia)等である。

第三節 殉教者

(三九)「殉教者とは?」第一世紀から第四世紀に亘れる迫害の歴史は、キリスト教會が神に創立されたこと云ふ貴重な証明を與へたものである。護教論者は常に殉教を以て歴史の常則に嵌らない超自然的現象を見做すのであつた。

一體殉教者(Martir)の語根を尋ねるに、ギリシア語の「マルツル—Martur」に出で、證人を意味する。然り、殉教者は皆証人である。血を以て己が信ずる教の眞なることを証明した人である。最初のキリスト信者中には、親くキリストの奇蹟を目撃し、その教を聞き、之を世の救主と信じたものが少くなかつた。その信仰を、捨て、そのキリストを棄てよと命ぜられて、之に應ぜず、むしろ慘刑酷罰を堪へ忍び、血を流し命を捨てたのは、それこそキリストの奇蹟、その教の眞實偽りなきを証明する所以

のものではなかつたらうか。

殉教者の數は、殊にデチウス、ワレリアヌス、及びディオクレアヌス帝の迫害に倒れた犠牲の數は夥しいものであつた。夫は迫害の慘酷さを記述せる古人の著書に就て見ても明であるが、單に理を推して考へても首肯されぬことはない。

1—迫害は二百五十年の久しきに亘り、其間、基督教はローマ國法の嚴禁せる所であつた。

2—ローマ云へば、當時の文明世界を悉く包有せる前古無比の大帝國で、該禁令はその廣大なる帝國の領土内に洽く行はれた。

3—たゞへ禁令の實踐履行せられない期間に雖も、信徒を告發する者があるに、判事は之を受理して相當の處分を加へねばならなかつた。以て殉教者の數の如何に多かつたかは略察せられるであらう。然し其實數に至つては、之を概算することすら出来ないのは遺憾に堪へない次第である。

(四〇)「証明の價值—實數の知れないのは、吾人の好奇心を滿たし得ない云ふ許りで、遺憾は遺憾に相違ないが、理論上の斷定だけでも満足するに餘りありだ。數知れぬ信徒は、其信仰を裏切らんよりは、寧ろ慘刑、酷罰に倒れた。使徒等を初端とせる殉教者の鎖の環は連綿として今日に及んで居る。バスカルは曰つた。「余は萬死を辭せざる證人の言を信するに躊躇しない」云。吾人は其言に續いて、「時の

古今を問はず、常に殉教者を有せる教會を信ず」を叫びたい。實際、今日も雖も殉教者は其跡を絶たない。布教年報は之を明に證して居る。

殉教者の樂隊—教會は初から篤く殉教者を崇敬した。彼等の遺骸を丁寧にかタコンブ内に保存し、その遺骸の上でミサ聖祭を執行した。信教が自由となり、随意に聖堂を建築し得るに至るや、信徒は務めて殉教者の墓上に之を建て、己が墳墓をその附近に設けるのであつた。後ノルマン族やサラセン人が侵略を逞うするに當つて、殉教者の遺骸に暴行を加へられない爲め、之をローマ市内に移した。遺骸は最ミ丁重に保管され、宗教的崇敬の標となつた。その殉教當日は、凱旋の日とも、永遠の生命に誕生せし日ともして、盛に之を祝つたものである。

(四一)一轉び者—白刃猛火の前に立つたキリスト教徒中には、百人が百人まで、泰然自若、微動だもしない勇士ばかりは居なかつた。中には阿容く、ミその所信を抛ち、偶像の前に禮拜せし意氣地なしも居た。固よりその多くは刑を恐れ、死を厭ひ、口先ばかりで背教を申立てたのみに過ぎなかつたのである。後で彼等が再び改心して來た時の處分方につき、教會内に異論が起つた。司教等は一應之を公の懲罰(固より精神的)に付し、然る後その聖職權を以て之に赦罪を與へた。

然るに三世紀はデチウス帝の迫害後、一部の不家連は起つて、右の處分を以て餘りにも寛大に失すに非難した。「背教、殺人、姦淫の如き大罪を犯した基督教徒は無期懲罰に付すべし。臨終の際にすら

赦罪を與へずして、そのまゝ之を神の審判に押送せねばならぬ」を絶叫して止まなかつた。主唱者はローマの司祭ノワチアヌスであつたから、ノワチアヌス派の異端を稱し、六世紀頃まで存続した。

第四節 基督教の傳播

(四二)(イ)一人の賢者—聖パウロの改心少し前の事であつた。ユデアの衆議會は使徒等を死刑に處せんとした。律法學士ガマリエルは起つて反對し、「イスラエル人よ、自ら彼の人々に爲さんとする所を慎め……そは其計畫、若くは事業、神よりのものならば、汝等之を壊すこと能はずして、恐らくは神にも逆ふ者さ爲らるべければなり」(使徒行録 五ノ三)と日つた。ガマリエルの眼は流石に黒かつた。若し彼にして二十年も長生したらば、基督教が神よりのものたることを確め得たであらう。紀元五十八年頃には、ユデア教から歸依せし基督教徒は既に幾萬の多き上つた。

(ロ)一人の官吏—聖ペトロの殉教後、五十年許りを経て、紀元百十一年頃、小アジア、ビチニア州の總督プリニウスは書をトラヤヌス帝に上つて、州内基督教徒の取扱方に就き、帝の意見を求めた。

「基督教徒問題は、大に考慮を要すべきことと愚考する。殊に同一の危険に瀕せる員數の上から見ても、放任して置かれたものではない。夥しい人々が告發され、又毎日告發されんとして居る。この迷信の傳染は唯だ都市許りでなく、村邑にも田野にも普く及んで居る。左りながら相當の手段を施し

たら、其流行を堰止め得る見込は十分ある。自分は爾く信するものである」
ミ申送つた。然し總督は其見解を誤つた。流行は堰止め得られなかつた。施すべき手段は全く無かつたのである。

(ハ)一人の護教論者—後百年(紀元一九七七年)—、アフリカのテルツリアヌスは異教徒に向つて絶叫した。

「我徒の世に出たのは、昨今の事である。然るに早や帝國大小の都市、島嶼、市會、兵營、宮殿、元老院、公會場に充滿して居る。唯だ諸君に遺して居るのは神社ばかりである。我徒か諸君を攻撃せんミ欲せば、干戈を執らなくとも、叛旗を翻さなくとも、何處かに立退きさへすれば夫で澤山だ。我徒が多數相率ゐるて世界の遠い一角に退き去つたら、諸君の領土は忽ち其住民を失つて荒廢に歸し、諸君はその號令すべき民なきに苦むであらう」。

この護教論者は基督教徒の實數を計上して、多少誇張に失せる嫌が無いではなかつた。然し將來に對する彼が不動、不拔の確信だけは決して過大とは言はれない。

(四三)—有力なる少數黨—四世紀の初にアンチオキアのルチアヌス殉教者は「基督教徒は帝國に於て殆き過半數を制せんばかりだ」ミ書き遺して居る。然らば當時基督教徒は、まだ全國民の半數迄には達して居なかつた、基督教徒の勢力は主としてギリシア語を語る東國にあり、信徒の最も密集せるのは小アジア、アンチオキア州、エジプト等であつた。ルシアヌスの統計は之を東國に當嵌めては眞實であつた

が西國に就て云へば、過大に失して居たミ謂はなければならぬ。

西國の布教は遅々として捗らなかつた。固よりローマ、伊太利の中部、及び南部、アフリカのチュニス、アルゼリアの東部、西班牙、プロウインシア州(Provincia) (ガリアの部)には稠密なる基督教會があつた。然し伊太利の北部、ガリアの中部、及び北部等には福音の光は左まで深く波及して居なかつた。概して云へば、基督教は主として都市及び其の附近、ローマ街道に沿へる村邑に流布した。ガリアの田舎の如きは、プロウインシアを除けば全く異教地であつた。

要するに基督教徒はなほ少數黨に過ぎなかつたにせよ、然しその勢力は中々侮り難いものがあり、大小の都市を根據地として、ローマ社會の粹を集めたものであつた。異教は到底人心に満足や與へ得なかつた。將來の世界は當然基督教の有に歸すべきであつた。

帝國外は如何に云ふに、アルメニアには既に二九五年頃から盛に傳播した。國王は率先して之を信奉し、命じて偶像を破壊せしめた。同國の歸正は全く聖グレゴリウス光照者(S. Gregorius Illuminator)の努力に由るの結果であつた。三世紀にはベルシアにも基督教會は建設され、數個の司教區を見るに至つた。アルメニア教會はカツパドキアのセザレア教區の管下に屬し、ベルシア教會はアンチオキア教區の治下に歸した。

基督教が如何に驚くべき速度を以て、廣く遠く傳播したかを知らんミ欲せば、其進路に横れる障礙物ミ對照して見なければならぬ。實に福音は徐々き、而も不可抗的勢力を以て、世人の心を押開いて、

之を擴大ならしめた。四周に鉄環を繞らして堅く自ら守れるローマ法も、終に其の強壓に敵し得ずして解體し、福音は一瀉千里の勢を以て四方に弘通、發展した。斯の如きは振古未だ曾て見ざる所で、是ばかりでも、基督教の眞理なることを證するに餘あるではないか。

然しながら事の未だ成らざる前に、イエズス、キリストは既に之を預言して置かれた。其事の成りしは全く人力に由らず、唯だ十字架の宣傳に由るのみであつたことを思つたら、いよく以て驚かざるを得ぬであらう。實に聖パウロも曰つた如く「神は智者を辱めんとて、世の愚なる所を召し給ひ、強き所を辱めんとて、神は世の弱き所を召し給へり……是れ何人も御前に於て驕らざらん爲なり……」(コリント前書)である。

第五節 殉教者に関する記録とカタコンブ

(四四)「殉教者に関する記録」——殉教者に関して二種の記録が遺つて居る。一つは裁判の様様やら、死刑の状況やらを書きこめた「受難記」で、其場に立合つて實見せる基督教徒の認めたものである。紀元百七十七年にリオンの信徒が、ボチヌス司教等の殉教談を綴つて小亞細亞はスミルナの教會へ送つた書簡の如きは、今に教會史を飾る珍籍の一つとして丁寧に保存されてある。

今一つは「殉教者の供述」である。判事が訊問を發し、殉教者が夫に答辯する傍から、書記が一言

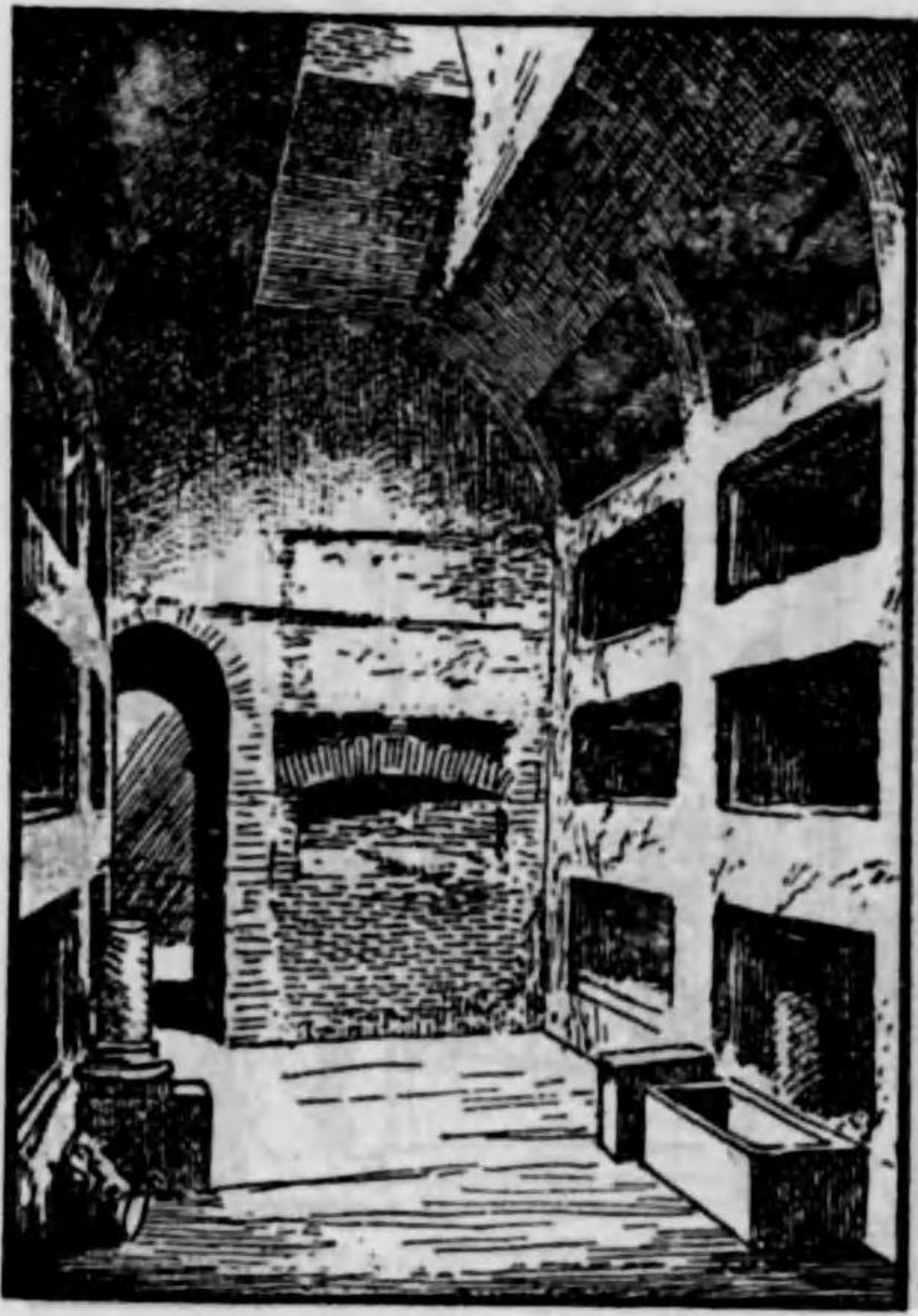
之を筆記したもので、嚴重に裁判所の書庫に格納されてあつた。信徒の爲には、極めて貴重な書類なので、彼等は書庫の保管者に金を與へて、之を贖寫させて貰つた。哲學者聖ユスチヌスの訊問録の如き、其他總て「殉教者」の供述の今に遺つて居るのは、信徒が斯うして手に入れたものである。是等の供述を一讀するに、身は親しく羅馬の法廷に立つて、逐一之を傍聴して居るかの如き感じを覺ゆる。

(四五)「カタコンブ」迫害の間信徒はカタコンブ(Catacumbes)内に集つて、禮拜式に與つた。カタコンブはナポリ、シチリア、アレクサンドリア、小アジア等にもあつたが、然し數に云ひ、規模の廣大さ云

ひ、最も有名なのは、ローマ市のそれである。

カタコンブはもしく一種の地下墳墓で、羅馬街道に沿ひ、城廓の四周三、四軒以内の散在して居る。軟弱な岩を穿つて築造したもので、大小五十以上の多きに達し、互に孤立して居て、其間に何等の連絡も無い。

カタコンブは二階三階に分れ、極く幅の狭い隧道(三尺六寸)が上下左右に織るが如く交錯んで、之が通路をなして居る。内部は幾個かの房舎を、



カタコンブの内現狀



カタクコンブ内の小聖堂と死體埋葬

小聖堂より成り、兩側の岩石に穿つた墓穴は、幾段にも重り合つて居る。墜道を延長すれば、八百 軒（二百里）に及び、五百萬からの死體を納め得べし云ふ。通風孔の設備もあるから、地底深く降つても、窒息する憂は無い。

最初カタコンブは其數多からず、規模もまた狭小で、たゞ富豪の専有物たるに過ぎなかつた。市南、ドミチラのカタクコンブの如きが夫で、舊

ものである。後に至つて是等の富豪は知己の基督教徒をも許して之に埋葬せしめた。三世紀に及んで、彼等は其カタコンブを舉げて之を羅馬教會に寄贈したので、此頃からカタコンブの規模は擴張せられ、其數も多くなつた。

三世紀の最も大きな地下墳墓云へば、カリクストゥスのカタコンブであつた。助祭カリクストゥスの施設に係る所から、其名を得たので、是も羅馬の南方、ドミチラのカタクコンブ附近に位せるのであつた。其中には「教皇の小聖堂」並に「聖チエチリアの地下堂」云ふのがあり、「教皇の小聖堂」には三

世紀の教皇が十一人まで埋葬されて居る。カリクストゥスの墳墓の舊い分は、コルネリウス家 (Cornelius)、チエチリウス家 (Cecilius)、ボンボニウス家 (Pomponius) など羅馬第一流の貴族の寄贈したものである。カタコンブの四壁、天井、器物等に遺れる碑銘、繪畫、彫刻等は、藝術品としてのみならず、また宗教學上、得難い資料である。

(四六) 五世紀以後になるに死體はカタコンブに納めないで、之を地表に葬るこゝになつた。さればカタコンブは紀元百年から全四百年迄、三世紀間に亘れる基督教徒の努力を物語るものだ謂つて可ならんか。四世紀の頃ダマス (Damasus) 教皇 (三六六) は之が修築を思立ち、新に階段を設け、小聖堂を増設し、且つ之に裝飾を施した。

紀元四百年から九百年頃まで殆ど五百年間云ふものは、カタコンブは一個の聖地、靈蹟を尊ばれ、殉教者の遺骸を崇敬せんじて、參集する順禮者は引きも切らずあつた。後戦亂相繼ぎ、カタコンブの順禮も頗る危険になつたので、羅馬教皇は八世紀から九世紀に掛けて、遺骸を大低羅馬市内に移した。夫よりカタコンブは次第に世人の記憶に消え失せ、出入口さへ塞がつて軀らなくなつた。漸く十六世紀、殊に十七世紀に至つてカタコンブは再び發見せられたが、然し科學的に研究される様になつたのは十九世紀に入つてからである。

第三章 對内史 異端と基督教文學

第一節 異端

概観—この期の異端は主として、ユデア思想と、異教思想の源泉より流れ出たものである。基督教に依せしユデア人中には、モイゼの律法が全然廢止され、基督の新法に取つて代られたことを承認し得ないものが少くなかつた。「ユデア主義者の異端—Haeresis Judaizantium」なるものは此處に基く。一方異教者は萬物の創造と惡の起源とに關する基督教義に反對し、それより「グノーシスム—Gnosticismus」
「マニケイムス—Manichaeismus」の兩異端が起つた。三位一體の女義、即ち御子と聖靈とが神なりと云ふ信仰と、神の唯一性の信仰とを如何にして調和せしめること出来るか、と云ふ大問題よりも、別種の異端を見るに至つた。

(四七)—ユデア主義の異端—この異端はキリスト教とユデア教との關係を決定するにつけて起つたもので、キリスト教の搖籃時代に當つて、モイゼの律法は新宗教内に如何なる地位を占むべきか、それを決定しなければならぬ必要があつた。何時までも義務として之を遵守しなければならぬか、キリストによつて廢絶されたものを見做すべきであるか、それは大きな問題であつたが、エルザレム會議に於て遵守の必要なしと決議された。その議決に服しないものは異端者となり、「ユデア主義者—Judaizantes」と呼ば

れ、主としてエビオン派と、ナザレ派との二派に分れた。

エビオン派 (Ebionistae) は、キリストを以て普通の人間と見做し、飽までモイゼの律法を嚴守すべしと唱道し、聖ペトロの教を正しし、聖パウロを排斥するのであつた。名の出所はヘブライ語の「エビオン—Ebionim—貧者」で、團員が皆貧しい生活をなした所から起つたものである。

ナザレ派 (Nazareni) は前者と同じくモイゼの律法を新約の掟よりも尊重するのであつたが、たゞキリストが聖靈により、聖母の胎内にやさり給うたことを認める點に於て異なるのみであつた。

(四八)—グノーシスム派 (Gnostici)—は「Gnose-cognitio—智識」に出で、智者を意味する。ユデア派、プラトン學說、及び基督教等をちやんほんして捏ち上げたもので、使徒時代にその發端を見、二世紀から三世紀にかけて、大に流行し、四世紀の終頃から次第に埋滅した。

この異端は分派が六十を下らないと云ふ程、互に解説を異にしたものであるが、各派に共通せる根本思想は、善惡二元、即ち神と物質との共存によつて、惡を説明しようとしたものに外ならぬ。萬物は無より創造された、惡は自由の濫用に過ぎない、と説くキリスト教に反して、グノーシスム派では、或は物質の無始無終を説き、或は神の實體よりの流出 (Emanatio) を唱へるのであつた。何れにせよ、世界は神が之を發生せしめ、之を組織したものである。純靈なる神は直接物質と關係すること出来ない、たゞ神の實體よりエオン (Eon—永遠者) なるものが流出する。そのエオン中の下位を占めるエオンが

無始無終なる物質を合して、「デミウルゴス—Demurgos, auctor mundi」になり、物質世界や人間を作つたのだ。

斯の如く物質世界は悪であるから、神と一致せんと欲する人は、如何したらば、以てその悪の手を振り切り、物質の支配を脱すること出来るか。神はその方法を授けしめんきて、高等のエオンたる「ロゴス—Logos—御言」を遣し給うた。このロゴスの全うせし事業を、贖罪と云ふ。イエズスはこの事業を全うせんが爲め、肉體の外観だけを纏ひ給うた。物質（肉體も物質だ）は悪それ自體であるから、ロゴスは之を合體すること出来ない。この外観説を主張する者は「ドケテ—Doctae—Dokain より」呼ばれ、聖ヨハネがその福音書の巻頭に「御言は神にてありたり……斯くて御言は肉となりて、我等の中に宿り給へり」を書きつけたのは、このドケテ説を破る目的からであつた。見なければならぬ。

グノーシス派の道徳は、精神を物質より解脱するにあつた。當然の結果として、劇しい荒行を身に課するものもあつた。

グノーシス派を大別してアレクサンドリア派と、シリア派とす。アレクサンドリア派の牛耳を執つて居たのはバシリデス(Basilides)とワレンチヌス(Valentinus)で、バシリデスは三百七十五のエオンを認め、ワレンチヌスはプラトンの善悪二原説と、雌雄エオンの存在を説いた。

シリア派はサツルヌス(Saturnus)とタチアヌス(Tatianus)を首領とし、物質はエオンによつて生動

されるに教へ、婚姻、肉食、飲酒等を禁じた。

マルキオン派(Marcion)——彼は初め基督教徒であつたが、不品行の故に破門されてグノーシス派に入り、神をユデア教の不完全なる神と基督教の完全なる神とに區別し、舊約聖書を排斥し、新約聖書も聖ルカ福音書と聖パウロの二三の書簡を除いて、他は悉く之を抛棄した。

マニケイ派(Manichaeism)——所謂「魔尼教」は、二百十六年ベルシアに生れ、二百七十六年に死せしマネス(Manes)の創意に成り、悪の世に存在する所以を説明せんを試みたものである。基督教では神獨りを永遠なりと認め、悪や、サタンや、原罪やは、すべて神の御手になつた被造物の自由意志に出たものとするのに、マネスの主張は全く之に反する。善も、悪も、明も、暗も、神も、サタンも等しく永遠である。現世、殊に人間は善と悪との混淆物だ。救霊とは吾人の内に存する善因を悪因より解脱せしめ、之を光明、即ち神に合致せしめるにあるのだと云ふのであつた。

この宗教は悪の勢力を過大視し、延いては社會を咀ひ、生命を厭ふに至つた。外観は大に基督教を模倣し、博士を立て、司教を設けた。その説く所は微を穿ち、細に亘つて居るので、能く緻密な頭腦を満足せしめ、聖アウグスチヌスの如き大天才をも一時は教徒として居た位、その厭世的思想は、民衆が時勢に不満を抱ける際には、頗る共鳴する所であつたのである。

(四九)——モンタヌス派(Montanism)——同派の主唱者モンタヌスは元キベラ(Cybele)女神の神官で、百七

十年頃一旦キリスト教に歸依したものであるが、後背いて左の如き異説を唱へた。曰はく「世界には二個の律法が與へられた。第一の律法は父なる神の與へしユデア教で、第二の律法は子なる神の與へしキリスト教である。然し世界の成熟期に及んで、前二者よりも遙に完全なる律法がモンタヌスの胸中に在し、彼の口を以て語り給ふ聖靈より發表された。この第三律法の特異點はその苛酷なる規律に在り、頻繁且つ嚴重なる斷食を命じ、再婚を禁じ、迫害に直面しても逃避すべからず、教會は聖人だけの集團であるから、洗禮後に犯した大罪は決して赦してはならぬ」云々。この異端はイタリア、ガリア、殊にアフリカに流行し、テルツリアヌスの如きも晩年之に加名して頗る熱狂したものである。教皇エレウテリウス、ウイクトル、及びゼフィリヌスより非認、排斥された。

(五〇) — 一千年至輪説 (Millenarismus) — 是はメツシア國に對するユデア人の誤つた偏見より起つたもので、六千年の後にアンチキリストが來て世界に王たること三年半、其時キリストは天の雲に乗りて來り、敵を撃破り、諸の義者と共に一千年間エルザレムを都として世界を統治し、あらゆる地上の福樂を擅にせしめ給ふ。その間サタンは堅く拘束されて毫も蠢動し得ない、一千年の後サタンは拘束を解かれ、魔軍を提けてエルザレムを包圍する、然し神の怒が發して彼を打倒し給ふべく、其時、第二回の肉身の甦りがあり、公審判が行はれる、云々云々のである。

この説はカトリック教徒間にも相當の共鳴者を得、廣く行はれたものである。然し東國ではアレクサンドリアの聖ディオニジウス (S. Dionysius) に破られて影を潜め、西國ではラクタンチウス (Lactantius) の如き有力な贊成者を得て、猶しばらく餘命を保つたが、迫害時代の終るに共に、教父等の攻撃を受けて次第に埋滅した。

(五一) — 三位一體説 (Antitrinitarism) — この異端は神の唯一性を、その三位を調和するの困難なるより生じたものである。唯一神觀を失はざらんを欲する所から、初代教會の異端者中には、神の唯一性を誇張して極端に走り、三位を全く削除するに至れるものがあつた。總稱して「モナーキア派」 Monarchianismus — 「體神派」云ひ、分つて甲乙兩派をなす。

(イ) — 甲派は「從屬主義者」 Subordinatiani とも稱し、キリストを以て神に遣された人間か、神のペルソナではあるにせよ、父に從屬せるものかを主張するのであつた。サモサタのパウロ (Paulus Samosatensis) の如きも、この派の巨魁で、バルミル (Regina Palmyrae) の女王ゼノビア (Zenobia) に擁立されて、アンチオキアの司教となつたが、アウレリアヌス (Aurelianus) 帝の爲に罷免せられた。

(ロ) — 乙派は父と子と聖靈とを以てたゞ名を異にするのみで、同じ神なるペルソナが異なる形式を以て働くのだ、父として創造し、子として托身し、聖靈として世を聖ならしめるのだ、を主張したものである。ローマでこの謬説を弘めたのはサベリウス (Sabellius) であつた。彼等は「バトリバツシアニー — Patripassiani — 天父受難派」にも稱せられた。

第二節 基督教文學

概観—初代教會の作品は、その性質及び目的から見ても、之を三期に區分することが出来る。第一期に屬するのは聖靈の神感によつて書かれた聖書、その聖書の附録と云つても可い使徒的教父等 (Patres Apostolici) の著作である。第二期に編入すべきは護教的、論戰的作品である、第三期に至つて信仰上の教を解説、論述せる纏つた作品を見る様になつた。

(五二)—第一期—第一期に於ける教會の大事業は、筆を以てよりも口舌を以て信仰を宣傳するに在つた。

随つて本期に出た作品は、何れも間に合せの作で、一般に書簡の體裁を帯び、宗教上の簡單なる教訓や、信者團體の取締や—その組織に關する實行的難問題の解決案を載せたものに過ぎない。細別するに、

(イ)—新約聖書—即ち聖マテオ、聖マルコ、聖ルカ、聖ヨハネの福音書、使徒行録、聖ペトロ、聖パウロ、聖ヤコボ、聖ヨハネ、聖ユダの書簡、及び聖ヨハネの默示録等である。

(ロ)—使徒的教父等の著作—教父とは、古代教會に出でし學徳兼備の著作家を云ひ、その中でも使徒等と共に生活せし人を使徒的教父 (Patres Apostolici) と稱する。ディダケミバルナの書簡の著者、ローマの聖クレメンス、アンチオキアの聖イグナチウス、スミルナの聖ポリカルプス、ヒエラポリスの司教パピアス、バストル (牧者) の著者ヘルマス等が夫である。

(a)—ディダケ (Didache-Doctrina)—は別名を「十二使徒の教」と呼び、その原文は一八七二年コンスタンチノブルで発見され、一八八三年に公表された。第一世紀の終頃に著された一種の公教要理で、教理の發展を見る爲に頗る珍重すべき作品である。

(b)—バルナの書簡—は其實、使徒バルナの作ではなく、ネルワ帝 (九六年) かドミチアヌス帝 (九六四年) の時にアレクサンドリアで綴られたものらしく、舊約と新約とにつき、筆者の見解を述べ、舊約は早や之を守る義務がない、その誠命は之を比喩的に解すべしと説いて居る。

(c)—聖クレメンス (S. Clemens) 教皇 (九〇) の作—はコリント教會の紛擾を鎮定せんが爲に送つた書簡で、ローマ教皇の主權を證明する爲によく引用される。コリント第二書簡「童貞女への書簡」は偽作である。

(d)—聖イグナチウス (S. Ignatius)—がローマへ曳かれ行く途中に物せし七通の書簡は、教會の階級制度、及びローマ教皇の主權を證明する爲に貴重な論據を提供してくれる。

(e)—聖ポリカルプス (S. Polycarpus)—は聖ヨハネ使徒の弟子で、フィリッピ教會に送つた書簡が今に遺つて居る。

(f)—ヒエラポリスの司教パピアス (Papias Hieropolitanus)—は主の談話の解説を物した。今は散逸して、たゞ聖イレネウス及びエウゼビウスの作中に引用されし断片が残つて居るのみである。福音書編纂を論断する爲によく引用される。

〔五〕—ヘルマスの「牧者—Pastor」は少し後代の作である。ヘルマス(Hermas)はピウス(Pius)一世教皇(二五〇)の兄弟らしく、苦行の必要、効果、方法等を默示録風に説いて居るのである。

〔五三〕—第二期—この期に及んで、外には迫害の難があり、内には異端者の蜂起するありて、教會は頗る多事であつた。それだけ護教的、論戰的作家が多く輩出した。

基督教の 愚腹一杯であつたに相違ないが、然し夫れは望むべくして得べからざる所であつた。異教徒は餘程彼等を怖がつたもので、百方手を盡して之を攻撃した。手段の如きは固より問ふ所でなかつた。何處の國でもだが、一般民衆の攻撃ならば、格別意をなすに足りない。當時も馬鹿けたボンチ繪等を書き、一番基督教徒を愚弄した積りで、得々たる先生等も居た。一八五六年、羅馬の舊い壁上に發見された漫畫の如きも其類のものであつた。基督教徒の神を驢頭人體で、十字架に磔けられた姿に描き、アレクサメノス(Alexamenes)に云ふ教徒が其前に立ち、禮拜の印に手を口に



羅馬民衆の惡戲



當てた所を寫し、「神を禮拜す」を希臘語の銘を加へてあつた。然し基督教徒が其愚弄に一矢を酬いて、直ぐ其側に「アレクサメノスは忠信の士なり」と書添へて居る。

彼等は漫畫に描いて愚弄する許りでない。更に此種の塑像を作り、大勢で之を擔ぎ廻り、毒麻を持ち、菓束を高く差上げ等して囃立て、斯くて宗教全體を愚弄笑殺せんとしたものである。

斯る嘲弄を浴せられては、誰しも氣持よく感ずるものではないが、然し其爲に自己の信仰を危くされる様な憂はない。恐るべきは寧ろ哲學者達の攻撃であつた。從來彼等は精神界の醫師を以て自ら任じ、國民間に餘程幅を利かしたものである。然るに基督教が一たび羅馬の天下に顯はれるや、彼等の勢力は頓に衰へ、門前雀羅を張るの慘狀を呈するに至つた。今は徒に拱手傍觀して居る場合でない。彼等は結束して起ち、猛烈な攻撃を基督教に浴せた。羅馬の哲學者クレセンチウス(Crescentius)の如きは其隨一であつた。然し基督教にも其人があつた。同じ哲學者の聖ユ

スチヌス (S. Justinus) (二〇五年) は見事な應戦振を見せた。クレセセンチウスは敗れて沈黙したが、其腹にユスチヌスを告訴した。爲にユスチヌスは捕はれ、有罪の宣告を受けて、其まゝ直に處刑された。哲學者連を反駁する許りでは足りない。當時の爲政者は、基督教を全く法律外に置いて、無理無體な壓迫を加へるのであつたから、之に向つても異議を申立てる必要がある。この重任に當つたのが所謂護教家であつた。護教家は一二に止らなかつた。最も古い護教家は書をハドリアヌス帝 (一三七) に奉つて基督教徒の無罪を辯じたクワドラトス (Quadratus) であつた、アテネ出身の哲學者アリストイデス (Aristides) も、同じく護教論を次帝アントニヌス・ピウス (一六八) に献じた。然し二世紀の護教家中で、最も有名なのは聖ユスチヌスで、彼は書を裁して、之をアントニヌス・ピウス、マルクス・アウレリウスの兩帝、元老院、及び羅馬國民に奉呈すること兩回に及んだ。其冒頭には「全人類が憎惡、迫害せる基督教徒の爲に、彼の徒の一人なるユスチヌス謹んで本書を呈す」云書き出して居る。彼は曰つた。「基督教徒を處分するのに、たゞ基督教徒の名を冠するの故を以てするのは不法である、處分するには處分するだけの罪状があらねばならぬ」云。然し彼徒に限つて何の非難すべき點があつたであらうか。猶ユスチヌスの作で、「ユデア人トリフォンシの問答—Dialogus cum Judaeo Tryphone」云題するものも有名である。

(ロ) —論戰的作家—グノーシス派、モンタヌス派を向ふに廻した著作も少からず發行されたが、多くは散逸し終り、今に遺つて居る中で、最も有名なのは聖イレネウスの「異端に對して—Adversus Haereses」のみである。

イレネウスはグノーシス派の異端を攻伐せんを欲して、神の唯一性、御言の托身、その神人兩性、聖體内に於ける現存、聖傳の權威、教皇の首位權等を證明して居る。

(五四) —第三期—本期に入つて聖學がそろく開花し初めた。固より聖學といつても、依然として護教的、論戰的ではあつたが、然し宗教眞理を分析し、之をより詳しく研究する必要が起つて來たので、次第に深味のある著作、基督教に堅實なる證明を與へるに共に、反對の宗教をビシ／＼と駁論破せる著作が公にされる様になつた。

其頃までギリシア語がローマ帝國の到る處に行はれ居た關係から、亦教會の用語もなり、從來の作は皆ギリシア語で物された。然るに第三世紀以來、西教會には漸次ラテン語が行はれる様になり、隨つてギリシア教父の外に、ラテン教父をも見るに至つた。

(イ) —ギリシア教父—アレクサンドリア學府—本期の有名なギリシア教父は主としてアレクサンドリア學府から出たものである。アレクサンドリアには、古くから一種の要理學校 (Schola catechistica) があつて、一八〇年聖パンテヌス (S. Pantaeus) が學長となるに及んで、次第にその名を知られ、パンテヌスの死後、クレメンヌ及びオリゲネスが相繼いで學長の椅子に就き、同校をして哲學、神學の最高學府となし、

幾多の俊才を輩出せしめた。クレメンスは同様に教鞭を執ること十五年許り（一九〇年—二〇二年の迫害に中絶、後カッパドキアに到る）、その公にせし作品中には、「Protreptikos—改宗のすゝめ」「Pedagogos—兒童教師」「Stromates—教訓」の三部作がある。第一は異教徒に改宗を勧めたもの、第二は改宗者の爲に基督教生活を説明したもの、第三は基督教眞理を哲學的に講じたものである。別に聖書註釋書も公にしたが、今は散逸し終り、遺つて居るのは、「富者にして救はるゝ者は誰ぞ—Quis dives salvabitur—」の一小冊子のみである。

(四)—オリゲネスはクレメンスの門人で、一八五年アレクサンドリアに生れ、父聖レオニダスの殉教一年の後、齡僅に十八歳にしてアレクサンドリア學府の總長に推された。彼は極めて嚴肅な生活を送り、夜の大部分を黙想と祈禱に過すのであつた。彼は聖學の各分科に精通し、聖書、倫理神學、修徳神學、護教論、定理神學等、行く所まで可ならざるなしてあつた。彼の著作は、八百種の多きに達し、一生を費しても、よく讀破するにすら出来ない程である。アムプロジウス云ふ富豪は彼の親友で、彼の爲に多くの書記を雇つてくれたので、彼は其等の書記にその口述せる所を一々書き取りし、彼が作中の眞珠も云ふべきは「祈禱論—Tractatus de oratione」であらう。「ケルススに對して—Contra Celsum」も有名である。ケルススはキリスト教を論破し、之に嘲笑を浴せ、その威信を失はしめんを務めた異教學者中の第一人者で、「眞實なる談話—Sermo veridicus」云ふ書を著し、主として吾主の人となり、その御事業をば猛烈に攻撃した。よつてオリゲネスは本書を公にして彼に反駁を加へ、福音傳播

の驚嘆すべき迅速さ、預言の成就、基督教倫理の超越性等を根據として、基督教の眞理を證明して居る。

オリゲネスは六ヶ國語對照聖書(Hexapla)なるものを作り、第一段にヘブライ文をヘブライ文字で書き、第二段には同じヘブライ文をギリシア文字で書き、第三段にはアキイラ(Aquila)譯、第四段にはシンマクス(Symmacus)譯、第五段には七十人譯、第六段にはテオドチオ(Theodotio)譯を陳べ、以て容易に對照して、テキストの批判をなし得る爲の便宜を謀つた。不幸にして今残つて居るのは、その斷片のみである。彼の説教集も大抵散逸し終つて居る。

オリゲネスの作中には不正確な用語、カトリックの教義に反する様な論旨が往々散見する。聖書は餘りにも寓喻的(Allegorice)に解説して、文字通りの意義に重きを置かない憾があり、信仰上の教義でもプラトンの哲學に由りて説明しようを試みた結果、世界は永遠なりだの、靈魂は肉體よりも前に存在せりだの、世の終には罪人もその罪の償を果して救はれるだの、を説いて居る。然し彼の作はその生前にすら、彼の盛名を利用せんとして、勝手に筆を入れた異端者があつた位だから、彼の作中に右等の誤謬が濫入して居るにせよ、果して彼の手に出たものであるか否か、斷言の限りでない。たゞへ正銘な彼の作であるにせよ、謂はば前人の嘗て踏破せしこもなき處女地に始めて分け入つたのであるし、教理を正確に言ひ表はす爲の用語も未だ確定して居ない時代ではあつたし、大に容赦すべき點があらうかと思ふ。

哲學や科學や批判をカトリック神學に取り入れると云ふことは、聖イレネウスや、クレメンヌスによつて緒を開いたのであるが、オリゲネスはいよ／＼多量に之を採用して、大に神學の領域を擴張した。若夫れ彼の人格に至つては、その意向は純潔にして、誠心誠意教會を愛し、拮据勉強老の至るを知らず、犠牲を恐れず、信仰故に投獄の難を見、幾度か拷問にかけられ、爲に病を得て、二五五年チロに於て不歸の客となつた位。たゞ彼の所説に不純な點があつたにせよ、それは決して彼の惡意に出たものとは思はれない。

オリゲネスの名は天下に響き渡つた。紀元二百二十二年アレクサンデル・セヴェルス帝(Alexander Severus)の母ユリア、マンメア(Julia Mamaea)は、特に彼をアンチオキアへ招致して教を請うた。母后は平素から基督教を識りたいと欲して居た。羅馬の司祭で博學の譽高かりしヒツボリトウス(Hippolytus)は嘗て復活を論ぜん一書を母后に奉獻した事すらあつた。アレクサンデル帝も基督教徒には頗る好意を有した。基督教の問題も都合よく解決して呉れさうに思はれた。不幸にして紀元二百三十四年、帝は母后と共にマインツ市附近に於て叛兵に弑せられた。

オリゲネスの門人で、有名なのはアレクサンドリアの司教パピオニジウス、エルザレムの司教アレクサンデル、ボントゥス州ネオセザレアの司教聖グレゴリウス奇蹟者等であつた。

(ハ)セザレア學府—オリゲネスは後故あつてアレクサンドリアを逐はれ、パレスチナのセザレア(Caesarea)に赴き、二二二年同地に學園を開き、圖書館をも設けた。エウゼビウスの友人で、司祭、且つ殉教者たる

りしバンフィルス(Pamphilus)は大にその圖書館を擴張し、之をして古代基督教圖書館中の隨一たらしめた。

(ニ)アンチオキア學派—はサモサタのルチアヌス(Lucianus)を創立者とする。アレクサンドリアには一個の高等學府があり、それを中心として、所謂「アレクサンドリア學派」なるものが築かれて居たのに反して、アンチオキアにはさうした學府があつた譯ではなく、たゞここに輩出せし學者等の主義主張を總稱して、さう呼び做した迄に過ぎない。してアレクサンドリア學派は主として寓喩的に聖書を解説するのであつたが、アンチオキア學派はむしろ文字通りの解説に重を置き、隨つて實證主義に流れる傾向を有した。アリウスにせよ、ニコメデリアのエウゼビウスにせよ、ネストリウスにせよ、皆同學派に出たものである。

(ホ)ラテン教父—キリスト教ラテン文學は特に北アフリカのカルタゴに薈を破つて、馥郁たる芳香を放つた。その最も有名なのはテルツリアヌスと聖チブリアヌスである。

テルツリアヌス(Tertullianus)は一六〇年カルタゴに生れ、一九〇年キリスト教に改宗し、二二〇年に死亡したのだが、その間によく椽大の筆を奮つて基督教の擁護に當つた。彼は異教徒の嘲弄に對して、辛辣極まる嘲弄を投返した。流石の異教徒も彼の嘲弄には辟易せざるを得なかつた。彼は身を高所に置いて、堂々論戰を挑み、無遠慮に皮肉を浴せ、詰難、窮迫、大聲、疾呼、更に怖れる色を見せなかつた。異教徒にして彼の矢面に立ち得る者は一人も無い。是まで基督教徒を嘲笑して居た傍觀者も、今や翻つて異教徒を愚弄するに至つた。

テルツリアヌスは異教徒の爲に恐るべき敵手であつた許りでない。異端者にもその鋭い攻撃の鋒先を向けた。異端者と言へばカトリックの教義を勝手に切盛して、たゞその欲する所のみを採用するのであるが、テルツリアヌスは彼等に對して基督教を正確、明瞭に解説した。要するに彼は基督教徒に自信を與へた。實力相當の態度を保ち、輿論に訴へて是非を争ふの道を彼等の爲に開いた。惜しい哉、彼は熱狂の餘り、晩年モンタヌス派の異端を奉じ、終を全うしなかつた。彼の著作中最も有名なものはローマ官公吏に呈せし護教論、異端者にたいする時効(De praescriptionibus)である。

(ハ)―聖チブリアヌス(S. Cyprianus)は二〇〇年カルタゴに生れ、二四五年頃に至つて、基督教に改宗し、二四八年にカルタゴの司教となつた。デチウス帝の迫害(二五〇年)には、カルタゴの附近に潜伏して居たが、ワレリアヌス帝の時(二五八年)に深く殉教した。

彼が各方面に送つた書簡は迫害日記とも云ひたい位に頗る貴重な史料である。ノウアトスの離教にたいして「カトリック教會の唯一性に就て―De unitate Catholicae Ecclesiae」を題する有名な作を公にした。その中に「教會を母さしないものは、神を父と呼ぶこと能はず」と断言して居る。

聖チブリアヌスは自らテルツリアヌスの門人と稱して居るが、行文は全くその趣を異にし、テルツリアヌスの文が雄大でこそあれ、生硬で、かさくした、不明瞭であるのに反して、チブリアヌスの文は簡明で、平易で、すつきりして、氣持よく讀まれる。

其他、ローマのヒツポリトゥス、アフリカのアルノビウス(Arnobius)及びラクタンチウス(Lactantius)等もまた有名であつた。

(五五)―(イ)―要するに反對者の攻撃が教理の發展を促したことは、察するに難からぬ。異端者の誤つた考を正すが爲に、「信仰の法則」を確定し、以て真理と誤謬とを判別し易からしめねばならぬ。使徒的教父等、殊に後代の聖イレネウス、テルツリアヌス、聖チブリアヌスは、この信仰の法則こそ、使徒等が、断わすにその後を繼げる司教等を以て傳へし、所謂「聖傳」に外ならざることを證明した。

(ロ)―理性は信仰上の真理を證明し、解説するのに随分役立つが、然し信仰に服従しなければならぬこと云ふことは、アレクサンドリアのクレメンスによつて完全に規定された。

(ハ)―聖三位に就ては、三位が同等なると共に、ベルソナミしては相區別されること云ふこの兩點も明にされた。

第四章 對内史、教會の組織―秘蹟―禮拜

第一節 教會の組織

概観―搖籃時代より教會組織の主成分は既に備つて居た。先づ教會は階級制度の上に立てる集團で、その階級制度は時を経、種々の必要が起るに随つて、次第に發展し、新要素が之に加はり、高級聖職の

手傳として、下級聖職の増設を見るに至つた。教會を統率するには一人の最高元首があり、その統率主權はキリストが之を制定し、聖ペトロ及びその後繼者たるローマ司教—ローマ教皇—によつて行使せられた。

(五六) — 教會の階級制度 — 基督教會は階級制度の上に建設された。實際キリストがその弟子等の中より十二使徒を選定し、彼等に教導と統治との大權を與へ給うたことは福音書に明記されてある。されば教會は初めから平等の權利を有する信徒より成れる共和團體ではなかつた。キリストの思召により、創設當初のキリスト教團體の統率に任じたのは使徒等であつた。聖ペトロはローマ教會を、聖ヤコボはエルザレム教會を、聖パウロは己が建設せし各地の教會を統治した。

(五七) — 司教、司祭、助祭 — 使徒時代から既に司教、司祭、助祭の區別が立つて居た。無論、何地の教會にも、この三階級が見られた譯ではない。然しコリントの如く、エフェゾの如く、迅速に發展せし教會に、右三階級の設立せられしことは、使徒的教父等、特にアンチオキアの聖イグナチウスの書簡によつて何ふことが出来る。

(イ) — 當時司教は今日の主任司祭と同一の任に當り、信徒を教へ、秘蹟を授け、ミサ聖祭を執行したものである。

(ロ) — 司祭は司教の助手で、祭壇に於ては司教に手傳し、聖處に在る時は、司教の傍に座を占め、

又司教不在の場合には、自ら代つてミサを執行するのであつた。

(ハ) — 助祭は主として團體の物質的事務に當つたもので、愛餐 (Agape) の給仕、貧困者の世話、財産の管理等を引受けた。なほ靈的方面でも司教が洗禮を施し、聖體を授ける時、之に手傳ふのであつた。然しだん／＼するに、助祭もその任を果すに手不足を感じる様になり、之を助けしめんが爲に、副助祭、下級聖品の職が新設されるに至つた。

(五八) — ローマ教皇の首位權 — 聖ペトロがキリストより教會の基礎を立立てられ、「親羊子」を牧する大權を授けられ、兄弟の信仰を固める任をも托されたことは、餘りにも顯著にして、誰しも否定し得ない事實である。して聖ペトロはキリストの昇天後、隨時にこの首位權を行使して居る、使徒行録を一讀したばかりでも明白であらう。

聖ペトロの後任者はローマの司教で、彼等は常に全教會の首席を占め、己が至上權を自覺するに共に、亦各教會、及びその教會の有力な司教等よりもそれを認められて居る。例へば

九十四年頃、コリント教會に紛擾が起るや、クレメンヌ教皇は書を送つてその紛擾を鎮定した。書中にクレメンヌはたゞ勸告し、懇請して居るのみならず、また嚴重に命令して居る。

アンチオキアの聖イグナチウスは使徒等の弟子であつたが、二世紀の初め頃ローマ教會を讃めて「ローマ人の地に首座たり……變の集會 (全教會) に上席たる教會」を曰つて居る。

二〇二年の頃聖イレネウスはローマ教皇の首位権を證明して、「すべての信徒はローマ教會に一致を保たなければならぬ、それはその起原が最も著名なるが爲に、又これのみによつて使徒よりの聖傳がすべて保有されてあるが爲である」と斷言した。

テルツリアヌスは異端に走り、ローマ教會にたいして好感を抱いて居ないながらも、なほその首位権を否定し得ず、「余は新たな決定的取極めがなされたことを聞いた。最高の司教、司教の又司教が取極めをして痛悔をしたものには、私通の罪でも、姦淫の罪でも赦して遣はす」と宣うた。皮肉を浴せて居る。聖チブリアヌスはローマ教會を呼んで「司祭衆の一致によつて以て來る首座教會」だの、「教會の初端、及び女王」だの、「一致を保つ爲に、キリストよりベトロの上に築かれたもの」だのを稱して居る。

なほ教皇、及び司教等の執りし處置も、上述の證言によく符合して居る。クレメンヌス教皇がコリント教會にたいしてその首位権を行使したことは、既に一言した通りである。復活祭の日取りに就て異論が起つた時、教皇聖ヴィクトル (S. Victor) はローマ教會の仕來に従ふべく小亞細亞諸教會に命じた。カリクストゥス教皇は一般的命令を發して、懺悔者にたいする嚴烈な處置を緩和せしめた。

バジリデス (Basides) シ、マルチアリス (Marialis) の兩司教はデシウス帝の迫害に背教した爲に、西班牙の司教等より廢されて、ステファヌス教皇に訴へ、その保護を求めた。異教徒なるアウレリアヌス帝ですら、ローマ教皇の首位権を認め、アンチオキア教會に黨派の争が起つた時、イタリアの司教、

殊にローマの司教に一致を保てる黨派にアンチオキアの司教座を占有せしめた位である。

(五九) 聖職者選任—給養—獨身制度—(イ) 本期に於ける司教の選任法は一定して居なかつた。司教は最初使徒等より指名されたものであるが、使徒時代以後になるに、所屬教會全體がその牧者を選任するにこゝとなり、先づ都市の聖職者が候補者を指名し、然る後平信徒の同意を求めると云ふ形式を取るようになった。後では主座司教 (Metropolitanus)、及びその管區内の司教等の確認をも必要とする様になつた。教皇の選任法も、他の司教のそれと同じく、先づローマの聖職者、及び信徒が之を選擧し、隣接地の司教等が之を確認したものである。

下級聖職者の選任は司教の權限に屬し、たゞ本人の道德的價値に就ては、信徒の意見を求めることになつて居た。二世紀の中葉から若年の聖職者に宗教學を授ける爲め、ローマ、アレクサンドリア、アンチオキア、バレスチナのセザレア等に「要理學校—Schola catechistica」なるものを設立を見た。アレクサンドリア學府はこの要理學校の發達したものに外ならぬことは、既に一言した通りである。

(ロ) 聖職者の給養法も一定して居なかつた、私財を以て衣食するか、聖パウロの如く自ら勞働して糊口を凌ぐか、或は信徒の喜捨に俟つかしたものである。

(ハ) 最初三世紀の間、聖職者は必ず獨身無妻たるべしと云ふ成文法はなかつた。然し貞潔の徳が廣く基督教界に尊重されたことは言ふ迄もない所である。四世紀に及んで聖職者の獨身制度は殆ど到る處

に確立せられた。三〇五年イスパニアはエルウイラ(Elvira)に開催された宗教會議が、初めて之を法文
 ミなし、「司教、司祭、助祭、その他すべて教役に従事する聖職者は、妻に遠かり、子を生むべからず、
 否ざれば聖職者の地位を退けらるべし」を命じた。この法文は次第に西教會全般に施行せられることゝ
 なつたが、東教會には承認せられず、後では全く排斥せられて今日に及んで居る。

第二節 秘蹟と禮拜

秘蹟—最初三世紀の間に、秘蹟に關する規律は頗る顯著な發展を遂げた。然しその發展は何等の困難
 をも見ずして、すらくと遂行された譯ではない。就中、洗禮と悔悛とを繞りては容易ならぬ論争さ
 へ巻き起つた。祝祭日の制定も年々共に形造られた。初代教會の信者等は宗教上の著大なる出來事を
 記念せんを欲した。彼等はたゞ熱烈な敬虔を以て一世の注意を惹くのみならず、殊にその嚴肅なる風
 儀、捨世的精神によつて、見る人を感服せしめた。彼等の生活は直にその信仰の華々しい辯護ともな
 つたのである。

(六〇)—秘蹟—洗禮—最初の程はキリストを信じ、その信仰を宣言しさへすれば、之に洗禮を施し、教理は
 その後で之を授けるのであつた。然し迫害時代に及んで教會は該制度を改め、もつと慎重な態度を執り、
 試み教育の爲に一定の期間を置くことにした。試みは斷食、祈禱、罪の告白、殊に信徒らしい生活を送
 るに在り、教育は信仰上の眞理を説明し、之を理解せしめるに在つたが、それよりしてこの期間を「要
 理研究期」(Catechumenatus)と稱するのであつた。

當時の洗禮は常に浸水洗禮であつたから、海濱、沼池、泉水、湖、小川等で行つたものである。然
 し水が足りないとか、受洗者が病氣であるとか云ふ場合には、灌水洗禮を施したことは、言ふ迄もない
 所である。

使徒等よりの仕來に基き、生兒にも洗禮を授けたものである。聖イレネウス、オリゲネス等はそれに
 關する文献を遺して居る。二五二年、聖チブリアヌス議長の下に開かれたアフリカの宗教會議は、生兒
 の洗禮をさし延すべしと主張する者を非難排撃して居る。それでも生兒の洗禮は往々延期せられた。生
 兒の洗禮の爲に、たゞ御復活や聖靈降臨の前日の如き特定の洗禮日を俟つのみならず、成長の後までも
 之を延期するのであつた。この惡弊は五六世紀頃までも刈除されなかつた。

第三世紀の中葉に及んで、異端者の授けた洗禮は有効なりや否やに就き、激烈な争が起り、殆ど
 半世紀の久しきに亘つて、甲論乙駁止る所を知らぬのであつた。聖チブリアヌスの如きも、無効派の
 先鋒となり、教皇聖ステファヌスに對抗したものであるが、然しアール(Air)の宗教會議、及びニケ
 ア會議はステファヌスの主張を是認し、異端者の授けた洗禮も、聖三位の御名と聖會の法規に
 従つたのは有効なりと決定した。

堅振は洗禮後直に之を授けた。固より之を授ける者は司教のみであつた。後日東教會では、司祭も同じく之を授ける様になつた。

(六一)―聖體―愛餐―もミサ聖祭は最終晩餐に於けるが如く、夕方「愛餐」を稱する食事を終つた後に續いて執行したものである。然し二世紀に及んでミサは愛餐を切り放され、愛餐は夕にミサは朝に之を執行するこゝになつた。三世紀の頃まで司教は愛餐に臨席して居たが、然し信徒の数の増加するに隨ひ、愛餐に與るものは、たゞ聖職者や貧者のみとなり、それでも色々弊害が生じて、聖堂内での愛餐は許され難くなつた爲め、何時しか廢れて、跡を絶つに至つた。

ミサ聖祭が朝に執行される様になつた頃から、聖體を拜領するには斷食を要するこゝになつた。使徒行録によるミサ(四十六節)、教會の初め頃、信徒は毎日聖體を拜領したものである。二世紀頃の文獻には信徒が日曜日に集つて聖體を拜領したことが出て居るのみで、毎日拜領したか否か判然しない。然し三世紀の聖チブリアヌスは、何か重大な罪を犯さない限り、毎日聖體を拜領するを記して居る。

當時聖體は口に受けず、掌に戴いたものである。往々は之を自宅へ持ち歸り、この力に慰めみの食物を毎日拜領するのであつた。幼兒にも洗禮後直に葡萄酒の形色を授けたものである。

(六二)―極秘の規定―キリストが「聖物を犬に與ふるこゝ勿れ」(マテオ)と曰うた所から、初代教會の信徒等は、ミサ聖祭や聖體を出来るだけ極秘に付し、之を未信者に知らしめざる様、務めるのであつた。

「極秘の規定―Disciplina arcani」の云ふ用語は、十七世紀に出來ただけれども、事實その物は二世紀の終頃から存在した。テルツリアヌス、聖イレネウス、オリゲネス等もそのこゝを洩して居る。當時の信徒が魚、錨、船、パン籬、乳を盛つた器、羔、鳩なきの象徴を用ひたのも、やはりその秘密を保つが爲であつた。迫害の結果、特にさうする必要が起つたからで、秘密にしたのは、使徒信經、秘蹟、殊に聖體の秘蹟で、信徒のみがよく之を悟り、他は到底伺ひ知るを得ざる爲に、斯う云ふ規定が出來たのである。隨つて志願者には口づから教理を授け、秘蹟のこゝは洗禮を授かつた者にのみ、之を説くのであつた。護教家の中、特に聖ユスチヌスが二三の玄義を洩して居るのは一種の除外例で、一般に「極秘の規定」は依然として行はれたものである。

(六三)―悔―悔―最初の三世紀間に行はれし悔悛の秘蹟の規定を瞭然ならしめるには、悔悛の秘蹟に要する外的三行爲、告白と償と赦罪とを區別せねばならぬ。

(イ)―告白―初代教會には内密な告白と、公の告白とが行はれたものだと言ふのを、屢耳にすることがある。然しそれは正確でない。教會が公の告白を命ずるのは、背教と殺人と姦淫の三大罪のみで、しかも公に知れ渡つた時に限るのであつた。それこそ公に知られ、公衆を贖かした罪に課する公の謝罪であつたのである。

(ロ)―償―神と教會との宥恕を蒙るが爲め、罪人は聽罪師の命ずる償を果さなければならぬ。その

償は常に秘密にして私的のものであつたが、上記の三大罪の場合には、要式的で且つ公然であつた。公の償の期間はその罪の輕重各教會の仕來如何によつて、それ々に異り、聖チブリアヌ時代には、背教の罪の償の如きは、一生の久しきに亘つたもので、罪人は公の償に服し、信者の團體より除外される、所謂「破門」されるのであつた。

(ハ)―赦罪―罪人はその償を果した上でなければ、赦罪を與へられない。除外例はたゞ死の危険が迫れる時に限る、ミ云ふのが一般法則であつた。償が私的且つ秘密である時は、赦罪も同じく然うであるが、公的である時は、赦罪も公的で、聖木曜日の莊嚴なる聖式の間、司教は懺悔者の頭上に按手して、赦罪文を誦へ、然る後彼等を信者の團體に加へたものである。

(六四)―赦罪問題より發生せし離教―當時悔悛の秘蹟に關する法規が確定して居なかつた爲に、紛争を醸し、二三の離教をも發生するに至つた。寬嚴兩極端に走れるもの間に處して、教皇は常に中庸を守り、如何なる罪も赦され得ないことはない、たゞ赦罪は償を果した上で之を與ふべし、ミ云ふ眞正な教説を固守して渝らなかつた。然しこの教説に従はないものも少からずあつて、寬に過ぎるあり、嚴に失するあり、延いては離教を起し、ローマ教會の規定に反抗を試みる者さへ無いではなかつた。

(イ)―ノワトス(Novatus)ニフェリチスシムス(Felicissimus)の兩司教は、聖チブリアヌがカルタゴの司教に選任された時、それを喜ばず、隨つて背教者に對する司教の方針を以て餘りに嚴酷だま叫び、デチウス帝の迫害に倒れた腰拔連を煽動して、離教を起した。聖チブリアヌは司教會議を召集して、該問題を取調べ、離教者を破門し、その決議文をローマへ送つた。ノワトスは自派の態度を辯護せんが爲、自らローマに赴いた。時にローマ聖座はフアビアヌス教皇の殉教後空座となり、司祭團が假りに教務を執つて居たが、その中でも幅を利かして居たのは博學の司祭ノワチアヌス(Novatianus)であつた。

二百五十一年コルネリウスが教皇に選定されるや、ノワチアヌスは服従を拒み、多分ノワトスの教唆に出たものであらうか、自ら僭立教皇となり、飽まで反抗を試みた。

奇怪なのはノワトスの態度で、カルタゴでは聖チブリアヌスの方針を嚴酷に過ぎるに稱して、反對しながら、ローマではノワチアヌスの一味になつて、教皇コルネリウスの背教者に對する方針を寬に失するに憤慨し、背教者に赦を與ふる權を有するのは神のみだ、ミ主張して、大に教會を騒がせた。聖チブリアヌスが「カトリック教會の唯一性に就て」を書いたのは、このノワチアヌス派の主張を駁撃せんが爲であつた。

(六五)―終油―品級―婚姻―終油の秘蹟を物語れる文献は少い。然し聖ヤコボの勸めに従ひ、重病人は司祭を招いて終油を授かつたことは疑ふべくもない―品級の秘蹟は、各聖品特有な儀式を以て、司教が之を授けたものである―婚姻の秘蹟は、男女の間を結ぶ一致で、配偶者の一方の死を以てせざれば、

解離不可能ニ、初から信者は承知して居たもので(ローマ七ノ二)、式は司教の前に於て之を舉行するのであつた。

(六六)―禮拜―禮拜場―最初司教等は信者を個人宅に集めて、禮拜を執行した。富有な信者は喜んで自宅をその爲に提供した。第三世紀の前半、ガリエヌス帝(Gallienus)(二六〇)の治下に當つて、聖會は決定的平和を得たものニ確信して、特殊の禮拜場を建設し初めた。是等の禮拜場はデイオクレチアヌス帝の迫害に多く破壊されたが、然し三百十三年、ミラノ勅令が發布された時、ローマ、アレクサンドリア、カルタゴ等の大都市には、猶多少遺存せるものがあつた。

迫害が猛烈なるや、信徒はカタコンブ(Catcombs)内に隠れて、禮拜式に與つた。墳墓は法律上、神聖犯すべからざるものとなつて居たので、此處ばかりは比較的安地帯であつたのである。

(ロ)―ミサ典禮―ミサに用ひる祈禱文や、儀式等を總稱して、「典禮―Liturgia」ニ稱する。ミサニ云ふ語が用ひられるに至つたのは四世紀頃からである。ミサは前後二部に區劃され、奉獻までは「志願者のミサ」ニ呼ばれ、奉獻からは「信徒のミサ」ニ稱せられ、洗禮を授つた信徒のみが之に與るのを許されるのであつた。

(ハ)―祝祭日―使徒時代から禮拜の日は土曜日から日曜日に變更された。信徒は皆勞働を休み、ミサ聖祭に與るのであつた、主日の外に信徒は聖金曜日、御復活、聖靈降臨等を記念した。東教會では夙に一

月六日を御公現の祝日として、博士等の參拜、主の洗禮、カナの奇蹟等を記念し、後では主の御降誕をも併せて祝賀するのであつた。イスパニアでは既に四世紀の初に、主の御昇天を記念して居たが、その頃まで御降誕の祝祭日は曆中に見えなかつた。

三世紀の中葉に及んで、殉教者の祝日(殉教の日)が定められた。然しローマ教會の曆表に記載してあるのは、聖ペトロ及び聖パウロニ 第三世紀の聖人のみで、他の使徒等を始め、イグナチウスにせよ、ポリカルプスにせよ、ステファヌスでも、洗者ヨハネでも列記してない、聖母マリアの祝日すら一つも見えないのであつた。

(ニ)―大齋日―初代教會の信徒は、毎週水曜、金曜の兩日に大齋するのであつた。土曜日にも同じく大齋する教會があつた。御復活前四十日間の大齋が一般に行はれる様になつたのは、三世紀の終頃からである。

(六七)―基督教徒の生活―最初の基督教徒はユデア教より改宗したもので、彼等の道德的、宗教的生活に就ては既に一言して置いたから(第九頁)、こゝにくりかへす必要はあるまい。

(イ)―異教より改宗して教會に入つて來た新信徒は、よく苦業を務め、飢饉に斷食を行つたものである。

(ロ)―社會生活上に就て言ふに、官職を奉じて居ては、始終異教の祭禮に與らねばならぬので、彼等

は喜んでその地位を抛つた。中にも選抜の熱心家は完徳の望に驅られ、祈禱、苦業の生活を送るのであつた。彼等をアスケテス (Asketes—Asceta) と稱し、世俗に止りながら、神に童貞を誓ひ、身には特別の服を纏ひ、非常に嚴重な清貧を守る篤志の人も少なくなかつた。教會は特に彼等の間よりその聖職者を選んだ。デチウス帝の迫害が猖獗を極めるに及んで、その迫害を避けて、荒野に引籠り、隱修士の生活を営む者が出て來た。その最も有名なのはテパイドの聖パウルス (S. Paulus)、及び修道生活の開祖と仰がれる聖アントニウス (S. Antonius) であつた。

附たり 聖傳

(1) 聖女ブランディナから聖ヨハネまで—紀元百七十七年、マルクス・アウレリウス帝の迫害に、リオン市で殉教した四十八名の信徒中にブランディナと呼べる妙齡の二女子があつた。彼女は賤しい奴婢ではあつたが、判事の前に立つて、恐ろしい勇氣を顯し、死を眼前に打眺めながら微動だもしない。屏弱い一女子の身を以て、鬼の如き刑吏をへたく／＼に弱らした。彼女は何處からその泰然自若の信仰をかち得たのであらうか。

聖女ブランディナを教育したのは聖イレネウス司祭であつた。このイレネウスは、後リオンの司教になつた人で、當時、基督教界有数の博學者であつた。

リオンの信徒は多く外人であつた。イレネウスも土着の人ではなく、遠く小亞細亞のスマルナから國人に従つて、轉住したものである。其頃、小亞細亞の基督教會に云へば、教會中でも餘程古い、頗る隆盛を誇つたもので、彼等は商用の爲め、故國を去つて、居をリオンに定めたのである。

イレネウスは宣教師として彼等に隨伴した。イレネウスの説く所は謹聽の價値が十分あつた。彼の知識が該博なりしのみならず、彼は青年時代に、スマルナの老司教聖ポリカルプスの門弟であつた。ポリカルプスはまた若年の頃、使徒聖ヨハネに就て、親しく教を承けた人である。夫は聖ヨハネが足を駐めた小亞細亞の何處かに於てであつた。多分エフェゾ市であつたらうかと思はれる。ポリカルプスはヨハネの事を屢々イレネウスに語り聞かせた。ヨハネは亦イエズス・キリストの事を能くポリカルプスに物語つた。要するに聖イレネウス、聖ポリカルプス、聖ヨハネと云ふ様に三つの連鎖が聖女ブランディナをイエズス・キリストに繋いだのである。この連鎖は短いだけになか／＼強かつた。裏若い奴婢の信仰が確固不拔であつた原因は、全く此處に存するのである。

(2) 聖傳—聖傳とは物を傳へる事にも當れば、その傳へた物をも意味する。前の例を以て言へば、聖女ブランディナの信仰は聖ヨハネの傳へたものであつた。聖ヨハネが親しくイエズス・キリストより授かり、次いで之を聖ポリカルプス、及び其他の人々に傳へた聖教であつた。聖ヨハネばかりではない。他の使徒等も皆それ／＼に聖傳を遺した。是等の基督教傳統を悉く一つに綜合したのが、所謂カ

トリック聖傳である。

(3) — 聖傳の完結 — 使徒等の生存せる間はカトリック聖傳も増加する一方であつた。使徒等の中には、聖パウロや聖ヨハネの如く、新に天啓を蒙れるのがあつた。左なくとも其のイエズス・キリストに授かれる眞理は頗る多く、理解し難い點も少くは無かつたので、一時に之を信徒に傳へる譯には行かない、随つて信徒の承けた聖傳は次第に増加した。然し最後の使徒が世を去るに共に、聖傳は全く完結した。眞理の寶庫は悉く世界に開放せられた、更に増加すべき所がない。吾人は今にその聖傳の下に呼吸しつゝあるのである。

(4) — 異端者 — 基督教の教理に就て、勝手に選擇を行ひ、その欲する所を探り、他は之を放棄するとか、變更するとかした手を異端者と稱する。異端者は早くから續出した。彼等は信仰の大敵であつた。教理に云ふものは、些の選擇をも許さない、増減せず、變更せず、有りの儘に之を採用すべきものである。然し彼等は教理を選擇するに付けて、互に一致し得なかつた。各人の傾向に遵ひ、勝手に選擇し、勝手に案出するのだから、一致し得ないのは、固より當然で、同一の教を説くに云ふは、彼等の爲に全く不可能であつた。之を譬へば音楽隊が互に調子を合せようとはせず、唯だ各人の感興に應ひ、思ひづくりに高く低く、長く短く、演奏する様なものである。異端の各派は少數の信徒を有するのみで、謂はゞ地方的少數團に過ぎなかつた。

(5) — カトリック教徒 — 異端者の前後左右には、教理を選擇せず、變更せず、有りの儘に承認せる基督教徒があつた。彼等は互に善く一致同心した。數から云つても絕對多數を占め、而も到る處に發展膨張し行くのであつた。彼等の團體は一地方に局限せられた小結社ではなく、實に世界的大教會であつた。二世紀の頃から人は彼等を呼んで「カトリック教徒」と稱した。世界的に發展せる信徒を意味するのである。

(6) — 神聖なるカトリック教 — 彼等カトリック教徒は自己の冠せる稱號を以て一種の誇とした。この稱號は以てその信奉せる宗教の神聖さを立證せる所以だと思つた。「カトリックは世界到る處に發展せる基督教徒が、等しく信奉する宗教である。イエズス・キリストの直傳に係る神教は、是を措いて他にあるべからず」。彼等は斯う信じて、左の如く論斷するのであつた。曰はく

一、世界各國の基督教徒が、前以て何等の申合せもせずして、均しく承認せる教は、必ず同一の師たるイエズス・キリストから傳はつたものであらねばならぬ。

實際、教理は彼等基督教徒の頭腦の産物ではない。頭腦の産物だと思すれば、必ず異端と其撰を一にし、幾多の柄鑿相容れざる主張となつて顯れたに相違ない。然し今や彼等の教理は全く同一である。彼等の音律は、節調の妙を極めて居る。是れ一人の樂長があつて、巧に之を指揮、統制せる結果ではあるまいか。其樂長こそ我等のイエズス・キリストに外ならぬのである。

一、世界到る所の基督教徒が、何かの眞理（例へばイエズス・キリストの神性）を均しく承認して居るにせよ、彼等は夫に就て前以て何等の申合をも爲し能はぬのであつた。彼等は互に遠く懸離れ、更に一面識も無かつたものである。

三、然らばカトリック教的眞理（例へばイエズス・キリストの神性）を世界到る處の基督教徒に傳へたものは使徒等であつた。否な、イエズス・キリストであつた。故に其教は神聖にして、一點の誤謬も混入しあるべき筈ではない。

(7) 照會と衆議會議—異端者が起つて、何かの教理を非認するや、カトリック教徒はその爲すべき所を知つて居た。彼等はその教理に就て各國基督教徒の信仰の如何を調査した。司教は筆を採つて主要なる教會に照會狀を發し、その教會に於て説く所、その教會に遺存せる聖傳を問合せる。照會狀を受けた教會では、早速返書を認めて使者に手渡す。返書が来るに、秘書は一々之を開いて、各教會の説く所を互に突合せて見る。斯くて何處の基督教會も同一の信仰を抱いて居る事を確めるに、夫で異端者に對する答案が出来上る。天下の基督教徒が寸毫の相違もなく一様に信奉せる教は、必ずイエズス・キリストが御口づから使徒等に授け給うた所である。全く世界的で、到る處に行はれて居るのだから、必ず神聖無比の教であらねばならぬ。この種の照會は教會の初頃から善く行はれた。之を組織的に實行して、その結果を他教會に通知するのはローマ教皇であつた。

だが司教等は照會狀の交換のみに満足し得なかつた。時として隣接地方の司教等と相會して、一層完全に其聖傳を對照して見る事もあつた。然し紀元三百十三年教會が完全なる平和を得る迄云ふものはこの宗會議會も全く地方的で、或る方面の教會を代表せるのみに過ぎなかつた。

(8) 提出し易き圖表—上述の方法によつて、基督教聖傳の眞偽は顯別されるが、然し夫は随分迂遠くて、容易なものではない。既に問題その物が頗る重大なのに持つて來て、多數の證人の申立を比較衡量せねばならぬ。時を経るに隨ひ、この方法は、益々利用し難くなつて來た。基督教は日を追うて、廣く遠く發展し、比較商量すべき證人、即ち教會の數はいよゝ増加した。教理その物も亦之を明確にするに連れて、次第に單純より複雑に進んで來た。

(9) 一カトリック教的羅馬聖傳—イエズス・キリストは最初からこの困難を豫期して、聖ペトロ、及び其相續者を教會の首領と定め、聖傳を保管し、之を解説するの重任を托し、この重任を全うするに要する助力をも彼等に約束し給うた。各地の教會に就て、公教聖傳を求めろのは、迂遠くて小而倒だ、之に反して羅馬教會の聖傳を尋ねるに、事は極めて簡易、迅速である。是れ古代教會の夙にカトリック教的、且つ羅馬的たりし所以である。

(10) 一教皇名簿—教皇の權威は羅馬の司教たり、全教會の首領たりし聖ペトロの後繼者云ふ所から來るのである。故に初代教會、殊に羅馬教會の信徒は教皇の名簿に頗る重きを置いた。其名簿こそ教皇か

全教會の首領たるの證明書、若くは辭令の如きものであつた。

アニチエトウス教皇(一五五)の代に、羅馬には、聖ペトロに始つて前代のピウス一世に終れる教皇名簿があつた。其頃ヘゼジップス(Hegesippus)云ふ東國の一信徒が羅馬を訪問して、其名簿を寫取つた。彼は異端者に對する反證を蒐めんものと、天下を周遊するのであつた。

(11) 聖パウロ聖パウロは羅馬の司教ではなかつたが、羅馬に足を駐めて布教を試みた。羅馬教會は、聖ペトロ聖パウロの遺した聖傳を一にして、之を丁寧に保存した。故に羅馬に於ては、今日に至るまで、此兩使徒を異體同功、離すべからざるものと、一様に尊崇して居る。ヘゼジップスの寫した名簿に、聖ペトロミ相列んで聖パウロの名を記載してあつたのはこれが爲である。

(12) 一兩ディオニジウスヘゼジップスから百年許りを経て、紀元二百六十二年、アレクサンドリアの信徒數名が、羅馬教會の門を叩いた。當時アレクサンドリアは、羅馬、アンチオキアに次ぐ大都であり、司教はディオニジウスミ稱し、オリゲネスの門人で、素々異教から歸正した人であつたが、盛に活動し、東國に於ける教會の重鎮であつた。たゞ異端を駁撃せんとして、多少不正確な語を漏した。アレクサンドリアの信徒が上京したのは、夫に就て教皇の意見を伺ふ爲であつた。

時の教皇は、是もまたディオニジウス(二六八)ミ稱するのであつたが、先づ少數の人々を集めて、問題の著書を朗讀せしめた。成るほき面白からぬ節がある。因つて更に會議を催して、詳に調査討究せし

め、終にアレクサンドリアの司教に懇切な親書を送つて訂正を求めた。司教は潔く承服した。今日も雖も、此種の問題が発生する毎に、同一の手段を用ひて、之が解決を計るのである。

(31) 一世界的慈善事業 羅馬教會がいよく威信を高めたのは、その世界的慈善事業、その全教會に及せる博愛心であつた。羅馬の信徒は裕福であつた丈に、好んで不幸に泣ける兄弟等を救助した。信仰の爲に囚れの身となり、曠山に苦役せられつゝある信徒によく金品を送つて、之を慰藉、激勵した。

ローマ教皇年表

- 第一代 聖ペトロ使徒 (S. Petrus) (四二年)、紀元四二年初めてローマに上り、四九年クロデイウス帝に逐はれて東國に赴き、エルザレム會議に臨み、五四年再びローマに歸り、六七年に殉教す。
- 第二代 聖リヌス (Linus)、(六七年)
- 第三代 聖アナクレトゥス又の名をクレトゥス (S. Anacletus)、(年代不詳)
- 第四代 聖クレメンヌ (S. Clemens) (九〇年)、九七年にコリント教會に書簡を贈る。二世紀の初にヘルマスはその著「牧者—Pastor」中にこの教皇の、ミミを記して居る。
- 第五代 聖エワリストゥス (S. Evaristus) (一〇〇年)

ローマ教皇年表

第二十三代 聖ステファヌス (S. Stephanus) (二五四年一) 異教者の授けし洗禮は果して有効なりや否云ふ議論が起り、聖チブリアヌスは、無効なり、再洗すべしと主張し、聖ステファヌスは斷乎としてそれに反対した。久しからずしてステファヌスもチブリアヌスも殉教して争は跡を絶ち、全教會はローマ教會の説に歸服した。

第二十四代 聖クシスツス二世 (S. Xistus II) (三五七年一)、この教皇の時、聖ペトロ聖パウロの遺骨をワチカンミオスィチアよりアツピア街道に移す。聖ラウレンチウスの殉教に就ての挿話……再洗問題に關する教皇の親書。

第二十五代 聖ディオニジウス (S. Dionysius) (三六八年一)、サベリウス派の異端に對してローマに宗教會議を開き、アレクサンドリアの司教ディオニジウスの所説の不正確なるを認め、訂正を命ず。

第二十六代 聖フェリクス (S. Felix) (三六九年一) アンチオキアの司教、サモサタのパウルスに對して、キリストの神人兩性を力説す。

第二十七代 聖エウチキアヌス (S. Eutychianus) (三七五年一)

第二十八代 聖カイウス (S. Cains) (三九六年一)

第二十九代 聖マルチエルリヌス (S. Marcellinus) (三九六年一) 教皇の殉教後、ローマ教會はディオクレチアヌスの迫害に荒されて四年間の空位を生じた。

第三十代 聖マルチエルルス (S. Marcellus) (三〇八年一)

第三十一代 エウゼビウス (S. Eusebius) (三〇九年一)

第三十二代 聖ミルチアデス (S. Milriades) (メルキアスとも云ふ) (三二四年一)、殉教せざる最初の教皇、ミラノ勅令、信教の自由。



後期 ミラノ勅令より西ローマ帝國の滅亡に至る

(三一三年—四七六年)

第一章 對 外 史

教會とローマ帝國

第一節 ミラノ勅令

概観—古代教會史の後期に至つて、異教が衰亡の坂を急轉直下するに共に、基督教は帝國の到る處に凱歌を奏するのであつた。既に四世紀の初より基督教は皇帝の宗教であり、次第に國教たるの觀を呈し、終に大テオドジウスの時、純然たる國教となり、それだけ異教は強い壓迫を蒙らざるを得ざるに至つた。無論壓迫ミ云つても、キリスト教が三百年の久しきに亘つて浴せられた様な酷烈極まる迫害ではなかつた。然し生氣もなく、活力もなく、たゞ國家の保護の下に生きて居た異教であるから、斯うなつては到底その命脈を保ち得ようはずがない。ユリアヌス背教帝の治下に、一時勢力を盛り返さうと足蹴いて見た甲斐もなく、帝の後繼者が反動的政策を以て之に臨むや、終に致命傷を蒙り、復起つ能はざるに至つた。

(六八)—倦厭と疲勞—デイオクレチアヌス帝マクシミアヌス帝の迫害は最も長く、日つ最も殘忍酷薄であつた。然し是は異教掉尾の大突撃で、彼が斷末魔の跳こも謂つべく、多少の遲延こそ免れないにせよ、最後の勝利が基督教に歸すべきことは火を賭るよりも明であつた。基督教徒は餘りにも多勢で、之を刈除し得べしは全く思ひも寄らない。迫害者自身からして、先づ弱つて來た。何に由らず、事は餘り長引くに、飽を來すものだ。況んや基督教徒ミ云へば、全然無辜の民で、羔も同様に、何等の抵抗もせずして屠所に曳かれて居る。幾ら蟲が好かぬからきて、之を無理無體に拷責、慘殺しては、氣持の善い筈がない。殺伐で、血腥い荒事を好む民衆ですら、終にその慘虐沒義道を厭ふに至つた。コンスタンチウス・クロルス帝(Constantius Chlorus) (三〇六年)は早くも其所に着眼した。彼は初め西帝國の半を領し、後その全土を併呑せし賢君であつた。今日の天下は、基督教徒征伐に没頭して居るべき場合ではない。より以上の急務が眼前に轉つて居る。帝國の防衛、富強策の如きは、一日も之を緩うする譯には行かぬ。彼は斯う思つて基督教徒を迫害しなかつた。彼は帝國の神々を以て信するに足らずに爲し、寧ろ唯一神に心を傾け、自己基督教徒に接近して來たのである。

(六九)—「コンスタンチヌス」—嗣子コンスタンチヌス(Constantinus)も父ミその見る所を同うした。彼は父帝の成功を以て全く天の報に出るに爲し、いよく自己の確信を強めた。當時、基督教の最も盛んに行は

れて居たのは小亞細亞で、彼は數年間その小亞細亞に在つて、親しく教會の實力を看破し、基督教徒を公平無私に取扱はうと云ふ氣になつた。然うなつては、到底迫害なき思立たれたものではない。然し彼はたゞ夫れだけに止らなかつた。百尺竿頭更に一步を進めて、従來の國教を抛ち、自ら基督教に歸依するに至つた。彼の此舉はその平素基督教に對して包懐せる好意のみを以てはさうしても説明し難い。然り、彼の改宗は全く超自然的干渉の結果に出でた。是れ彼の親しく斷言せし所、當代人の均しく證明せる所であつた。

紀元三百年、西帝國には二人の君主があつた。マクセンチウス (Maxentius) は羅馬に據り、コンスタンチヌスはガリアを保つた。然し兩雄並立すだ。マクセンチウスは天下を統一し、自ら西帝國の獨裁君主たらんを欲し、コンスタンチヌスに向つて、戰を宣した。今度の事は基督教に取つては、天下分目の大戰爭である。時にコンスタンチヌスはなほ異教者であつた。羅馬に向つて進發する前に、勝敗を卜せんを欲して祭祀を執行した。慣例によつて卜者は犠牲の内臓を検したが、大不吉で、内臓は何等の吉兆をも呈して居なかつた。部下の將帥は皆色を失ひ、敗北を豫期しながら進發するのを欲しなかつた。然しコンスタンチヌスは進軍を命じた。軍中には基督教徒が居た。後エジプトに於て修道院生活を創設し、之に一定の規律を授けた聖パコムス (S. Pacomus) の如きも其一人であつた。コンスタンチヌスは伊太利を縱斷して羅馬に迫まつた。市を距る二三百キロメートル、チベル (Tibere) 河畔のミルウィ

ウス (Milvius) 橋頭に於て敵と會戦し、決定的大勝利を博した。時は正に三百十二年十月二十八日で、マクセンチウスは逃走中、河に落ちて溺死した。コンスタンチヌスの英斷、及び其勝利を以て天祐に歸するに付けては、異教徒も基督教徒と全く見る所を同くした。然しその天祐の何たるかに至つては、區々として一致する所が無い。

ラクタンチウス (Lactantius) は基督教側の最も古い證人で、彼の言ふ所によれば、ミルウィウス橋頭戰の前、コンスタンチヌスは將卒に命じて、基督の略字たる X M P M を * 形に組合せて、之を其盾に書付けさせた。帝が斯く命じたのは、夢に神託を蒙り、戰勝疑なしの保證を得たからである。然し史家エウゼビウス (Eusebius) は三百三十七年、コンスタンチヌスの頌詞中に斯う曰つて居る。「或日



帝スヌチンタスニコ

の午後、帝がマクセンチウスに向つて進軍中、不圖天を仰ぐと、燦然たる十字架を太陽面上に見た。其下に、汝、この旗印を以て勝つべし—In hoc signo vinces—と銘してあつた。然し十字架の顯れたのは、何處であつたか、自分は全く知らない。帝は、戰勝後、直に羅馬に入り、大に十字架を尊敬した。間もなく羅馬市には、十字架を手にせる帝の肖像が建立された。

其時からコンスタンチヌスは既に基督教徒であつたのだが、洗禮だけは、當時の惡習に従ひ、三百三十



ムルバラ

七年、永眠間近までも延期した。

コンスタンチヌスが其將卒に授けた軍旗を「ラバルム—Labbalun」に稱する。形状は色々變化した。最初は槍の穂先に金冠を載せ、之にキリストの略字を銘したもので、金冠の下には、絹布に帝及び其二子の肖像を縫取してあつた。

(七〇)「ミラノ勅令」—コンスタンチヌスは紀元三二三年の初め、

東帝リチニウス (Licinius) ミミブノに會合して、信教自由の勅令を煥發し、宗教故に官没せる財産を返還し、基督教をして異教に對等の地位に就かした。斯くて政治に宗教は全然區別せられ、國神に敬事せずとも、チエザル (皇帝) の忠臣たり得るこゝが、公に認められた。斯の如きは極めて見易き道理であつたが、之を了解し、承認するまでに、二百五十年餘の血腥き迫害を要したのである。

因みに、是が有名な「ミラノ勅令」と稱するのであるが、然してコンスタンチヌスは果してこの勅令を發布したであらうか。なるほどリチニウス帝は同年六月十三日ミラノより歸つてニコメディアに入るや直に勅令を發し、コンスタンチヌス帝との申合せに基き、以後國民たるものは、各自の欲する宗教を奉ずるを得べしと治く告知した。然し西帝國もガリア地方では、既に三一年から迫害令は撤廢され、信教は自由になつて居たので、改めて勅令を發する必要はなかつた。たゞマクセンチウスの治下たりシイタリアとアフリカとに對してのみ、同年一月か二月頃に、三一年の信教自由令を發布したらしく思はれぬではない。なほコンスタンチヌスは各地方官に訓令を與へて、官沒財産の返還、聖職者の公務免除等を實行せしめて居る。たゞ夫のみだと Otto Seeck や H. Gregoire の如き現

代批評家等は斷言して居ると云ふ。

コンスタンチヌス帝は三二三年リチニウス帝を破つてローマ帝國を統一し、基督教を以て國教となさんと欲したが、然し異教に耽溺せるローマ舊貴族の反抗を氣遣ひ、むしろ彼等を避け、新に都を築いて之を基督教の中心となし、且つは帝國の東北境を伺へる蠻族を監視し、その侵略に備へる爲の根據地となすに若かずと思つた。よつてボスフォルス (Bosphorus) 海峡に臨み、アジアミウロッパの境に位せる要害堅固な舊都ビザンチウム (Byzantium) の跡に新都を築き、之をコンスタンチノボル (Constantinopolis) と名け、三三〇年五月十一日を以て之が祝聖式を行ひ、ローマ帝國の都となした。

基督教の爲めに盡せし帝の功勞は多大であつた。ローマの貨幣より異教的象徴を削り去り、占卜者が私宅に於て獻ぐる祭をも差止め、殊に淫猥な神々への祭祀を嚴禁した。帝は三三七年ニコメディア (Nicomedia) の司教エウゼビウス (Eusebius) より洗禮を受け、久しからずして他界した。資性殘忍で、隨分無辜の血をも流したが、然しよく時代の趨勢を察し、之に大々的方向轉換をなさしめたのは、千載の下に傳ふべき偉業たりしを以て、世は彼に冠するに「大帝」の稱號を以てして居る。

(七一)「ユリアヌス背教帝」(三六一年)、コンスタンチヌスは死に臨んで帝國を三分し、之をその三子コンスタンチヌス二世、コンスタンス、コンスタンチウスに與へた。三帝とも一時異教征伐に力を盡したので、異教はいよく大打撃を蒙つた。然しローマの舊社會に深く根底を張つて居る異教だ、一朝一夕に絶滅し終るはずがない。機會にあらば猛然として捲土重來し得べきは察するに難からぬ。機會はユリアヌ



帝スヌアリユ

ス背教帝の代に來た。帝はコンスタンチヌス大帝の甥に當り、基督教（アリウス派）の教育を受けて成長したが、心は異教徒であつた。帝位に昇るや、直にその信仰を抛棄したので、時人は之をユリアヌス背教帝と稱した。

ユリアヌスは基督教を撲滅して、異教を再興せん謀つた。然し舊來のまゝの異教では到底人の心を維ぐに足らざることを悟り、昔ながらの神話に代へるに、ギリシア哲學に基督教を混和した新プラトニスムを以てし、基督教の制度を模倣して、一種の階級制度を立て、博愛慈善を奨励し、祭禮を盛大に行ひ、以て之に生命あらしめんを務めた。到る處に神社を建て、基督教徒は之を官途より退け、彼等が高等學府を開き、若くは之が教授たることを嚴禁した。之に反して異教徒を重く用ひ、ユデア教徒、及び各種の異端者にはあらゆる特典を與へた。自ら筆を採つて眞向から基督教を攻撃し、且つは事實の上から基督の預言の虛妄なるを立證せばやと思ひ、ユデア人を勸めてエルザレムの神殿を再興せしめようとした。然し俄に地震が起るやら、地中から火玉が飛び出すやらして、流石のユデア人も終に工事を中止するの已むなきに至つた。

帝は三六三年ベルシアで戦つて重傷を蒙り、史家ソゾメヌス (Sozomenus) の言ふ所に由るに、傷口より

り流れる血を、掌に受けて、之を天に投げつけ、キリストに向つて「ガリレヤ人よ、汝は勝つたな」ミ胃潰の言を吐きつゝ死んださか。

(七二) ユリアヌス帝の後、ユリアヌスの後を承けし諸帝は皆基督教（正統派なり）を保護したので、異教は少くも都市に於ては急速に衰亡した。然し田舎には猶永く勢力を保ち、爲に其信徒は基督教徒より「田舎人—Paganini」呼ばれ、その宗教は「田舎宗教—Paganismus」稱せられた。

西ローマでは、グラチアヌス帝 (Gratianus) (三七五年) が始めて先例を破り、「大司祭—Pontifex Maximus」の稱號、その制服を拒絶し、ローマの元老院議場より「勝利の神—Victoria」の像を撤去せしめ、従來神官、及び齋女に供せられし手當や特典を剝奪した。

瀕死の異教に最後の止を刺したのは、テオドシウス大帝 (Theodosius Magnus) (三七九年) であつた。彼は東西兩帝國を統一せし最後の英君で、異教徒に迫害を加へなかつたが、祭祀及びその他の神事を禁じ、神社を閉鎖させるか、破壊させるかした。アレクサンドリアの有名なセラピオン堂 (Serapionis Templum)、コンスタンチノブルのユピテル、オリムピウス堂 (Jupiter Olympius) 等が破壊されたのはこの時のことである。三百九十二年には、更に一步を進めて内密の禮拜をも禁止し、終に三百九十四年、元老院は「自今羅馬市に於て異教を全廢す」この法律を發布した。斯くて都市は全く基督教化し了り、異教の神々は村落に退いて、此處を最後の避難所とした。

然しながら神々の思想が、民衆の頭腦より全く消失せるまでには、頗る長年月を要した。五百四十六年頃、羅馬市の眞直中に於て、夜中公會場なるヤヌス(Janus)神社の門扉を開いた者があつた。是は異教時代の古い習俗、一個の宗教行事で、平時は神社の門扉を閉して置くが、一たび宣戰の令が下るや、直に之を開いてヤヌス神の援助を祈つたものである。其頃、ゴト族との戰が激烈を極めた、基督教徒にして未だ十分に舊來の迷信を脱却し得ざる甲乙が、公會場へ行つて、陰にヤヌス神社の門扉を開いたのであつた。猶村落では、神泉、靈樹等の崇拜も盛に行はれた。

テオドシウス大帝は死に臨んで、帝國を二分して東を長子アルカヂウス(Arcadius)に、西を次子ホノリウスに與へた。是よりローマは東ローマ(ギリシア帝國とも云ふ)と、西ローマ(ラテン帝國とも云ふ)の兩帝國に分れて、また統一することがなかつた。して西ローマ帝國は北蠻に蹂躪されて四七六年に滅んだが、東ローマ帝國は猶長く命脈を保ち、一四五三年、土耳其人の爲にコンスタンチノブルを陥落されるまでに及んだ。

(七三)——ローマ帝國外の布教——ローマ帝國以外にも基督教は夙に傳播せられた。ペルシヤには二五〇年頃から福音の宣布を見、四世紀には教會階級制度も布かれてあつた。然るに三三九年國王サポル二世(Sapor II)が猛烈なる迫害令を發し、三七九年八月に最後の目を瞑るまでも殆ど間斷なく厲行せしめた。殉教者の数は非常に多く、名の知れて居るのばかりでも一萬六千人の多き上るに、史家ソゾメヌスは

斷言して居る。次王イスデゼルト一世(Isdezerd I)は即位の初め、基督教徒を厚遇したが、四二〇年頃から迫害を起し、バハラム五世(Baharam V) (四三二入)も其遺策を棄てず、以て五世紀の終に及んだ。

その頃からペルシヤの基督教會はネストリウス派に歸し、終に六五一年マホメト教徒に滅された。

アルメニアはトリダテ王(Tridate)の代(四世紀)に聖グレゴリウス光照者(S. Gregorius Illuminator)によつて、殆ど残らずキリスト教に歸依した。然し四二八年國がペルシヤの屬領となるや、一性派の異端に侵略され、四九一年にはローマ教會を全く袂を分つた。

アビシニア(Abyssinia)の布教はコンスタンチヌス帝の頃より開始され、アイザナ(Aizana)王を始め、國民舉つて教會の懷に入つて來た。然し同國の教會は主座司教(Abuna)をアレクサンドリア教會より受けることになつて居た關係上、アレクサンドリア教會が一性派に轉するや、アビシニアもそれに巻き込まれて了つた。(アビシニアは今のエチオピアだ)

六三六年頃(時代)ペルシヤのネストリウス派は支那に布教し、盛大な教會を築いた。このことは、一六二五年イエズス會宣教師が西安府(昔の長安)に於て發見せし「景教流行中國碑」によつて明である。後唐朝が亡び、次で五代の亂ミなるや、景教もそのまゝ湮滅に歸し終つた。

ゲルマン族の入信——基督後はニケア公議會前から既にドナーヴ左岸のゴト族間に流布した。三百四十八年の頃、ゴト王アタナリク(Atharic)が配下の基督教徒を迫害するや、司教ウルフイラ(Wulfila)はド

ナールヴ河を涉つてコンスタンチウス帝に謁し、ゴト族の爲に避難所を求めた。帝は快諾した。ゴト族は相率ゐてドナールヴ右岸に移住した。惜しい哉、コンスタンチウスはアリウス派の人であつたので、次第にウルフィラ及びゴト族を誘導して、アリウス派に轉宗せしめた。ワレンス帝も亦たその遺策を襲用せしより、三百八十年頃には、ゴト族を擧げて殆ど皆アリウス派を奉ずるに至つた。

ウルフィラ司教、並にコンスタンチウス帝、ワレンス帝の三人はアリウス派の異端をドナールヴ左岸にまで傳播せしめた。ワレンス帝の没後、テオドジウス及び其後繼諸帝の努力によつて、帝國內のアリウス派は滅盡に歸したが、蠻族間には油の物に滲みるが如く、徐々に不可抗的勢力を以て擴大して行つた。たゞ帝國に最も遠隔せるゲルマン族のみが、依然偶像教を信奉したもので、フランク族の如きも、其頃なほ異教徒であつたのである。

第二節 ローマ帝國內に於ける教會と國家との關係

概してローマ皇帝が基督教に歸依せし當然の結果として、政治と宗教、國家と教會との間に新たな關係を生じた。福音が社會に浸徹するに共に、亦之に多大の影響を及ぼすに至つたのは言ふ迄もない所である。一方皇帝も亦一旦キリスト教を信奉せる以上、その絶大なる勢力を教會の爲に用ひ、之が保全、發展を謀りしは當然のこゝみであるが、然し餘りにもその勢力を用ひ過ぎて、教會を左右し、自己の願使に甘從せしめようとし、爲に紛擾を醸すに至りしこゝも一再に止らなかつた。

(七四) 教會は國家に如何なる貢獻をなしたか—異教社會に踏入つて來た基督教は、國家の諸制度にその精神を滲透せしめ、行政、並に法制の上に幾多の改良を加へしめた。刑法は多くその殘忍性を和げ、十字架刑は廢止され、囚人に烙印するの禁絶せられた。

なほ教會は個人、及び社會の幸福を謀り、奴隸、婦人、子供の境遇を改善し、何處に於ても、弱者の味方となりて、強暴を禦ぎ、人を永遠の救ひに導く云ふのを終局の目的としながら、また現世的幸福をも眼中に置くことを忘れなかつた。

(七五) 國家は教會に如何なる貢獻をなしたか—國家は教會に負ふ所が頗る多かつた。それだけ教會もまた多く國家の恩恵に浴した。

先づ基督教は公認宗教となり、從來國教に與へられた特典の分配に與り、やがては國教となつて、その特典を獨占するに至つた。最初の基督教皇帝たるコンスタンチウスは、自ら任ずるに教會の恩人、防衛者を以てした。随つて聖職者の物質的境遇は全く一變し、聖堂の建築や、禮拜上に要する經費は頗る豊富になつた。基督教は從來異教の享有せし特典を承継ぎ、聖職者は、徵稅、及び公務を免ぜられ、教會裁判の特典をも授けられ、訴訟事件が起つても普通裁判の審理を受けないで、司教裁判、又は司教會議の前に出頭し得るこゝみとなつた。聖堂は異教の神殿と同じく庇護權(Jus asyli)を認められ、聖

堂内に避難した者は、教會側の承諾なしには、警吏も之を逮捕し得ざるこゝとなつた。終に國家は教會法を公認し、其法に背く罪、例へば異端の如きものは、國家が之に刑(常に流刑)を加へるこゝとなつた。

然し皇帝の保護には暗い半面の存せしこゝを忘れてならない。異教徒に強ひて基督教を信奉せしめた結果として、不純な分子を教會内に持ち込み、紛擾と腐敗との禍因を作つた。なほ皇帝自身も教會にたいする己が天職を十分に理解せず、國家萬能の異教思想に囚はれ、自ら皇帝兼大司祭を氣取り、屢宗教問題に干渉の手を突き込み、己が頭腦に描ける神學思想を押し付けようこゝを試みた。

基督教皇帝のこの宗教政策は、取りも直さず従前の異教思想に根據づけられたもので、歴史家は「チエザリスムス(Caesarism)―專制主義」だの、「チエザロ・パピスムス(Caesar-papism)―皇帝兼教皇主義」だの、ビザンチウム、即ちコンスタンチノボルに都せしローマ皇帝の主として弄びし所から「ビザンチウム主義―Bizantinism」だのと呼んで居る。

斯の如く皇帝の庇護の裏には餘り有難くもない點が少くなかつたにせよ、然し一切の控除をなしても、教會は失ふ所よりも得る所が頗る多かつた。

参 考

(七六)―アポローコンスタンチヌス―コンスタンチノボルには高い石柱の上に日の神アポロ(Apollo)の姿

その儘なるコンスタンチヌス大帝の像を建て、その下に「赫灼として日の如きコンスタンチヌス陛下」ミ銘してあつた。従来ローマ皇帝は自己を神に祭り上げしめるのであつたが、基督教皇帝に於て之を見るのは、不都合の至りミ謂はなければならぬ。然し不都合はたゞ夫だけに止らない。三三〇年コンスタンチノブルの奠都祝には、盛んな行列を組み、コンスタンチヌスの像を競馬場へ擔ぎ込んで、民衆に崇敬せしめ、一司祭は兩手を擴げて、「キリエ、エレイソン―主、我等を憐み給へ」ミ歌ひながら、行列の先頭に進んだ。

要するに帝國は、當時も其後も多少の異教臭味を帯びたもので、教會は帝その人に洗禮を施して、之を基督教徒、時には頗る敬虔な基督教徒となしたが、然し帝權に洗禮を施し、之を全く基督教化し能はなかつた。異教思想は依然その根底に蟠つて居たものだ。加之、東ローマの司教等は夙に帝意を阿り迎へる傾向があり、後に至るこゝ、其傾向はますます濃厚の度を加へるのみであつた。

(七七)―使徒と同格者―コンスタンチヌス帝は新ローマたるコンスタンチノブルに自己の陵墓を築き、す其陵墓を中心として、四方に十二使徒の聖堂を建設した。全く沙汰の限りではあるが、彼は之を設計るに頗る眞面目であつた。彼は自ら許すに教會の防衛者を以てした。死後「使徒と同格者―Isapostolus」の尊稱を奉られた。この尊稱は彼の後繼者によつて襲用せられ、ローマ皇帝の野心の如何に強烈なるかを語つて餘りあつた。禍根は全く此處に伏在し、コンスタンチヌス及び其後繼者は、たゞ教會

の防衛者たるに安んぜずして、政治と宗教とを混同し、絶えず教會部内をまぜつ返したものである。

世界的司教——史家エウゼビウスは、バレスチナ、セザレアの司教で、コンスタンチヌスと親交あり、帝を呼んで「世界的司教」を稱して居る。是れこそ帝を以て教會の首長、教皇の競争者、取つて以て教皇に代るべき者として爲すので無くして何であらう。斯る皇帝に對しては、聖職者も極めて自由を重んじ、氣節に富んで居なければ、到底自己の天職を完うし能はぬのに、惜しい哉、東教會の聖職者は概して意志の薄弱な、習間根性の抜けやらぬ人物で、大多數はエウゼビウスの思想に附和雷同するのであつた。新ローマが舊ローマの向ふを張りて、事毎に之に反對したのは怪しむに足りない。皇帝は既に「世界的司教」を以て自ら許して居る。機會さへあれば、聖ペトロの後繼者を攻撃し、故に不和を種蒔き、分離を惹起すに至つたのも、亦見易い道理ではないか。

附註——或曰コンスタンチヌスは司教等に向ひ、「卿等は教會内の人々の司教だが、朕は圏外の人々の司教だ」と曰つた。是も帝の野心の極なきを語るものでないか、と人は多く憤慨するが、然し「圏外の司教」とは、異教徒の司教を意味するに過ぎない。實際皇帝は異教の大司祭(Pontifex Maximus)を兼ねたものであつた。

第二章 對内史

教理の發展——異端——基督教文學

第一節 異端

概観——古代史の後期は何と云つても神學上に於ける大争鬭期で、特に教會を騒がしたのは(1)三位一體論、(2)キリスト論、(3)人性論の三大問題であつた。三位一體論は前期に於て未だ十分に解決されて居なかつたので、問題が起つたのは當然のこゝである。基督論に關する争は二世紀以上にも及び、その結果、三位一體と御托身に關する教理の定義を見た。人性論は人間とその救靈に關しての争論で、それよりして原罪、聖寵、自由意志に關するカトリック教理が判明するに至つた。

(七八)——三位一體に關する問題——本期に於て最も激烈な論争を惹起したのは、三位一體の教理を繞るアリウス派、半アリウス派、マケドニウス派等の異端であつた。

(イ)——アリウス派——アリウス(Arius)(二三六)はアレクサンドリアの一司祭で、北アフリカのリビアに生れ、アンチオキアで殉教者ルチアヌスに就て神學を修めたものであるが、三百十八年頃から新奇な異説を唱へ、アレクサンドリア教會に非常な混亂を卷起した。彼に言はせるに、イエズス・キリストは父に等しき神ではないが、亦純然たる人間でもない、實は兩者の中間物で、諸天使の上に位し、傑出せる被造物たるに過ぎないのだ。

彼がこうした新説を提唱したのは、異教哲學に買入れた結果に外ならぬ。前にも一言せし如く、異教哲學（新プラトン派）の主張に従へば、神が世界を創造するは不可解である、純靈なる神は直接に物質世界と關係するはすがない。物質は餘りにも低級野卑である、この低級野卑な物質世界を創造する爲に、神は中間物を用ひ給うた。フィロン (Philon) はその中間物をロゴス (Logos) と言ひ、言ひつた。グノーシス派の「デミウルゴス—Demurgos」は大同小異だ。アリウスはフィロンのこの説を踏襲し、神の御言、第二のベルソナを以て一個の被造物なりと主張した。既に被造物である、随つて父と同等にあらず、無限でもなければ、永遠でもない。たゞ最も完全なる被造物で、すべての被造物は之によつて造られた。被造物ではあるが、神と密接に一致し、或る意味に於て、神と稱する事も出来る。然し結局は一個の被造物たるに過ぎない、ミ云ふのである。もしこの主張を以て眞なりとせば、基督教は壊滅し終るの外はない。ロゴスが如何に傑出せる被造物であるにせよ、人間の罪を贖ひ得ないこゝは言を俟たざる所であらう。

(ロ) — ニケア公議會 — コンスタンチヌス帝はアリウスの異端を審査せしめんが爲に、三百二十五年小亞細亞のニケア (Nicaea) に公議會を召集した。列席せる司教三百十八名、西國の司教は教皇シルウエステル (Silvester) 第一世の使節を合せて五名に過ぎなかつた。該議會はイエズス・キリストが眞の神である、父たる神と實體を一にし、同じ神性を具備し給ふのであると決議し、その決議文を一個の信經に約めて發表した。今日ミサ聖祭中に誦へるニケア信經がそれで、アリウスの異端にたいして、特にキリストの神性を高調し、「萬代の前に父より生れ、神よりの神、光よりの光、眞の神よりの眞の神、生れ給ひて造られ給はず、父と同一體 (Consubstantialem Patri) にして、萬物は彼によりて造られたり云々」を言つてある。斯くてアリウスの異端は排斥され、其著書は火中に投げられた。アリウス及びその熱狂せる黨員四名は流刑に處せられた。

ニケアの會議は最初の公議會、全教會の總議會であつた。迫害時代には多人數の集會を催す、こゝは全く不可能であつたが、ニケア公議會の時から、ローマ皇帝は驛遞の公用馬車を司教等に供して、其往復の便を謀つた。總じて東國に開催された公議會には、西國司教等は格別參會せず、たゞローマ教皇の使節が彼等を代表するのみであつた。

(ハ) — 半アリウス派 — アリウスとその黨員四名はニケア公議會の決議に服せずして追放された。四名の中にも、ニコメディアの司教エウゼビウスは陰險術策に長けた大野心家であつた。彼はアリウス異端の赤色を緩和して、之を桃色になさんとし、欲し、ニケア信經中の「オモウジオス (Omoios) — 同一體」に一畫を加へて「オモイウジオス (Omoios) — 似たる者」となし、以て世人を瞞着せんと謀つた。之を半アリウス派と稱する。斯くて甘々ニココンスタンチヌス帝を籠絡して、故の地位を回復し、三三四年にはアリウスをも招還せしめ、倒にアタナジウスをガリアに放たしめた。帝はアリウスをエジプトに復歸させた

い腹でのつたが、民衆の反抗に怯むて之をコンスタンチノーブルへ招いた。三三六年アリウスは多数の黨員に衛られて、同地の聖堂へ赴く途中、急病を發して死亡した。翌年コンスタンチヌス帝歿し、その三子コンスタンチヌス二世、コンスタンス、コンスタンチヌスが帝國を三分し、共同の名を以て、追放されし司教等に歸還を許した。そしてコンスタンチヌス二世はニケア信條を奉じて渝らなかつたが、コンスタンチヌスは半アリウス派を助けて、正統派を迫害した。殊に三五〇年コンスタンチヌス二世はコンスタンスが歿して、コンスタンチヌスが一人で大權を掌握するや、正統派の驍將たる聖アタナジウス等を追放し、アリウスの謬説を全教會に押賣らうと務め、反抗せるカトリック教徒を叱責して「朕の欲する所は國法だ」と豪語した。全く異教的口吻で、世は迫害時代に逆轉し、アリウス派は一時凱歌を擧げ、全教會をも席卷するの概があつた。

然し異端の特色も謂ふべきは分裂、不統一で、アリウス派も先づ内から崩壊した。アンチオキアの助祭アエチウス (Aetius) ヲウノミウス (Eunomius) は純アリウス主義を奉じ、「御言は神に似ざるもの (Anomoios) 」なりと主張した。爲に「アノモイオス派」と呼ばれ、ヨウゼビウスの唱道せる半アリウス派と相争つて次第に自滅を招いた。殊に三六一年コンスタンチヌスが死するや、アリウス派はその支柱を失ひ、西は聖ヒラリウス (Hilarius) 、聖ダマスス教皇 (S. Damasus)、東は聖アタナジウス (S. Athanasius) 、セザレア (Caesarea) の聖バジリウス (S. Basilus) 、ナジアンゾ (Nazianzus) のグレ

ゴリウス (S. Gregorius) 等の運動によつて、いよゝ衰亡の坂を降つた。

終に三八〇年テオドジウス (Theodosius) 大帝はニケア信經の格守を嚴命して、アリウス派に最後の止を刺した。異端はゲルマン族の間に避難し、彼等の力を借りて俄然勢力を盛返した。實に五世紀の頃、ローマ帝國內に殺到して、到る處に新王國を築いたゲルマン族は大抵アリウス教徒で、彼等は一地方に土着するや、必ずアリウス派の教會を設け、多くの司教を置いて、カトリック教會に對立せしめた。カルディナル、ニウマン (Card. Newman) は曰つた。「教會に公の字を冠せしめるのは果して當を得たものであらうか、此一時は怪まれた。カトリック教會は異端者の大衆に埋没せられ。アリウス派は異端とは言ひながらも、整然たる組織を保ち、カルタゴ (Carthago) に、セウイル (Seville) に、トゥール (Toulouse) に、リオン (Lyon) に、ラウエンナ (Ravenna) にその普遍的特徴を見せたものであつた」云々。

四百廿九年からアリウス派を奉ぜざるワンダル人は、羅馬領アフリカに割據し、百年以上も之を統御した。其間にカトリック教徒は頗る困難な地位に立ち、猛烈な迫害、慘酷な刑罰、無情な流謫に惱されたものである。

一例を擧ぐれば、四百五十六年から四百七十四年に亘つて、ゲンセリクス (Gensericus) 王は激しくカトリック教徒を迫害した。爲にカルタゴ州には、定員百六十四名の公教司教が滅びて、僅に三名になつ



ワルダ人の暴行

た。或年の復活祭日に、レジア (Rezia) 市のカトリック教徒は、堅く聖堂の門を鎖して、聖務を執行して居るに、ワルダ人は聖堂の窓から堂内の信徒を目懸けて矢を放つたり、門を蹴破つて内へ侵入したりして、聖堂内を流血の海に化した。四百八十三年には、司教、司祭、信徒合せて四千九百六十六名の大衆がモール人 (Maures) の間に流され、備さに辛酸を嘗めさせられた。斯の如くアリウス派はゲルマン族の力を借りて暴威を逞うしたものであるが、然し之にも樺花一朝の榮で、六世紀には全く絶滅し終つた。

(二) マケドニウス派—マケドニウス派 (Macedonius) はアリウス派より論理的に導き出された異端である。神の子の神性を認めない以上、父より發する聖靈の神性をも認めざるはすがない。もし「御言」が被造物ならば、その御言より出る聖靈が被造物たるは當然のことで、この當然の結果論を導き出したのは、コンスタンチノーブルの大司教マケドニウス (366) であつた。異端は聖アタナジウ

ス、聖ヒラリウス、聖バジリウス、ナジアンゾの聖グレゴリウスより痛烈に攻撃され、各地の宗教會議、殊にコンスタンチノーブル公會議 (381年) によつて處分排斥された。

同會議は聖靈の神性を明確にすべき條項をニケア信經中に加へた。然し聖靈の發出に關しては議定しなかつたので、東西兩教會に一致しない所があつた。西教會では「父より發し—A Patre, Filioque procedit」の語を四四七年トレド (Toledo) の司教會議に於てニケア・コンスタンチノーブル信經に加へることとした。

(七九) 基督論 (Christologia) — 教會の爲に容易ならぬ難問題を捲き起したのは、三位一體の女義に關する異論よりも、御身の女義を繞る謬説であつた。ニケア公會議の教父等は神の御子たるイエズス・キリストが、御父と實體を同じうするもの、隨つて嚴密の意味に於ける眞の神であるを定義した。然し基督の内に存する神的人的の兩要素が如何様に結合されるか云ふ點は、其儘に残して問はなかつた。キリストにはベルソナが二つあるか、兩性、兩意か、或は一性、一意か、是等の問題に就て順次ネストリウス派、一性派、一意派と云ふ三個の異端が起り。教會はその異端と戦つて基督論を確定した。

(イ) — ネストリウス派 — この異端は四二八年にコンスタンチノーブルの大司教となつたネストリウス (Nestorius) が提唱したものである。イエズス・キリストは神にして人である。然しベルソナ、即ち

「私」言ひ得る者は唯一つ、神のベルソナ、神たる「私」是のみだ、云ふのが正統の信仰である。固より御托身の女義は何時になつても女義である。イエズス・キリストには、如何にして人たる「私」が消へ去つて、神たる「私」が之に代つたか、吾人の了解し得る所ではない。然るにネストリウスは曰つた「キリストには、神のベルソナと人のベルソナの二つが存する。聖母マリアは人のベルソナのみを生み給うたので、神の御母—Theocotos—ではない」との説を以て眞なりせば、御托身の女義は臺なしになる。キリストは早や一個の神人ではなく、神と人間たるキリストが個々別々になつて了はねばならぬ。

この異説にたいして極力奮闘したのは、アレクサンドリアの總司教たりし聖キリルス(S. Cyrillus)であつた。四三二年エフェゾに召集されし第三回公議會はこの異説を非認排斥し、キリストの神性人性は一位的(Hypostatic)、即ち唯一の神の御子のベルソナに於て合體されてある。ベルソナが唯一であるから、マリアは確に神の御母と稱され得る議決した。

ネストリウスはその決議に服せずして、司教の位階を剝がれ、リビア(Libya)の荒野に流され、四四〇年頃に死亡した。後、彼の與黨はベルシアに退き、支那にまで手を伸ばし、一時は頗る隆盛を誇つたものであるが、中央アジアに崛起したタメルラン(Tamerlan—チムールも云ふ)(一四〇五—一四〇六)の侵入頃より急に衰進に向ひ、今日四萬許りの信徒を擁するに過ぎない云ふ。

(ロ)一性派(Monophysitism)——この異端の提唱者はコンスタンチノーブルの修道院長エウチケス(Euthi-

ches)であつた。彼は嚴肅な規律の下に長く修道生活を續けたものであるが、神學上の知識は餘り深からず、ネストリウスの異説を猛烈に攻撃し、キリストの唯一ベルソナを擁護せんとして、正反對の誤謬に陥り、性も同じく唯一なりと説き、一滴の水が大海に落ち、全く混同して一つになるが如く、キリストの人性は、神性に吞まれて了つたのだ、又例へば大火に遭へる一片の蜜蠟の如く、容易に消へ失せて神性中に没入した、斯くてキリストの人性は神性化され終り、残る所はたゞ神性のみとなつた、ミ主張した。是が所謂一性論で、同じく御托身の女義を破壊せる妄説なのだ。果してこの説の如しせば、イエズス・キリストは既に神人でなく、純然たる神のみで、人間の救贖は到底全うされない。

教皇レオ一世はコンスタンチノーブルの司教フラウミアヌス(Flavianus)に有名な教書を與へて、カトリック教義を叙述し、エウチケスの異端を排斥した。エウチケスは皇帝テオドシウス二世に縋つて、四九九年エフェゾに公議會を召集してもらつた。アレクサンドリアの總司教で、エウチケスの與黨たりし、ディオスコルス(Dioscorus)が議長席に就き、文武の高等官を列席せしめて、司教等を脅迫し、エウチケスの説を正當なりと宣言せしめ、フラウミアヌスには散々暴行を加へて死に至らしめた。世に之をエフェゾの強盜議會(Latrocinium Ephesinum)と稱する。

四五〇年テオドシウス帝没して、マルキアヌス(Marcianus)帝が位に即き、正統信仰の爲に遠島されし司教等を召還し、四五一年、コンスタンチノーブルの對岸なるカルケドン(Chalcedon)に第四回公議會

を召集した。

列席せる司教は六百三十名、議場の中央なる卓上に聖書を安置し、至聖所の欄干に接して數人の高等官が着席し、皇帝マルキアヌスを代表して議場の整理に任じ、左側の席には聖レオ教皇使節が坐して居る。左右に速記者の席があつて、議員の發言を一々速記した。その認められた議事録は今に嚴存する。聖レオ教皇の使節は一性論を排斥せる信仰宣言書を議會に提出して、其まゝ之を採用せしめた。十月十日議場に於てレオ教皇の親簡が朗讀されるや、六百有餘の議員は一齊に聲を放つて「ペトロはレオの口を以て發言せり— Petrus per Leonem locutus est」を絶叫した。

一性派の異端はカルケトンの公議會によつて終熄した譯ではない、却つて其後一層の勢力を加へ、アレクサンドリア、アンチオキア、エルザレムの總司教區を占領して、正統信仰に對抗し、東教會に醫すべからざる重傷を負はしめ、終に東西兩教會の分離を剛致する原因となつた。一性派の異端は今なほ相當の勢力を維持し、アルメニア派、ヤコブ派、コプト派の三獨立教會を成して居る。アルメニア教會はエルゼルム (Erzerum) の總司教に統括せられ、ヤコブ教會はヤコブス・バラダイ (Jacobus Baradai + 578) に云ふ修道士の努力によつてシリアシメツボタミアに確立せるもので、今日アンチオキアの總司教を奉じて居る。コプト教會はエジプトのカイロ府に駐在せるアレクサンドリア總司教に服し、アビシニアも同じく一性派に屬して居る。

エジプト、シリア、アルメニア等が擧つて一性論に走つたのは、主としてビザンチウム朝に對する反感に基いたのであつた。彼等はカトリックを目して「皇帝派—Melchitae」をなし、皇帝に反對するが爲、又カトリック信仰にも反對した。丁度十六世紀のドイツ、スカンデナヴィア、イギリス、スコットランド等の諸國民がラテン民族に對する反感よりして、プロテスタント派を奉ずるに至つたの如き、全く其の揆を一にしてゐる。

時に隣國ペルシアはササン朝の全盛時代で、國富み、兵強く、頻りに東ローマの東邊に寇するので、東ローマの諸皇帝は、一性派が敵に内通しては氣遣ひ、キリスト教の動かすべからざる信條を犠牲にしてまで、彼等の歡心を買ひ、民心の統一を計らうとした結果、三章問題、一意派異端等の發生を見るに至つた。

(一) 三章問題—皇帝ユスチニアヌス一世 (527—565) の時、オリゲネスの謬說に關する爭論が再燃した。オリゲネス派で、カツパドキア (Cappadocia) セザレア (Caesarea) の司教テオドルス、アシダス (Theodorus Ascidas) は帝の心を他に轉ぜしめばやと思ひ、或日帝に拜謁を請ひ、「モブスウエスチア (Mopsuestia) の司教テオドルス (Theodorus) の其の著書、聖キリルス (S. Cyrillus) シェフエズ (Ephesus) 公議會に反對せしキル (Cyr) のテオドレトス (Theodoretus) の作、エデッサ (Edessa) のイバス (Ibas) の書簡は、ネストリウス派の臭味を帯びてゐて、一性派者の喜ばざる所である。よつて右三章を處分排斥せば、

容易に彼等をカトリック教會に復帰せしめ得べしと建言した。帝は早速その建言を容れ、五四三年か五四四年かに、三章の排斥令を發した。コンスタンチノーブルの總司教メンナス(Menas)を始め、東教會の司教等はすべて之に賛同した。然しカルケドン公議會は、テオドレツスミイバスが自己の謬説を誓絶した爲、彼等を故の司教座に復し、テオドルスは、教會の一致の中に安眠して居たので、そのまゝ之に觸れなかつた。随つてこの問題を再燃せしめるのは、決して時宜を得たものでない。カルケドン公議會をも侮辱する所以だとして、西教會の司教等は残らず反對した。

時の教皇ウイジリウスはユスチニアヌス帝よりコンスタンチノーブルに拉去られて居たが、種々の壓迫に屈して、五四八年終に三章を排斥した。西教會は舉つて教皇に反對し、アフリカ教會の如きは教皇に破門を投げつけるに至つた。教皇はその善後策を講せんが爲め、公議會を召集したいと欲し、一應三章の排斥を取消した。然し集まつて來た司教等は一五一人で、アフリカ教會の六名を除けば、皆唯々として帝意之れ奉ずる東教會の司教ばかりなので、教皇は列席を拒絶したが、それにも拘らず司教等は議會を開催し、三章を排斥し、その他種々の異端にも排斥處分を喰はした。教皇はユスチニアヌス帝に威嚇されるやら、甘言を以て誘はれるやらして、終に帝の意に應じ、第五回公議會を批准した。随つてまた三章をも排斥した譯になつたのである。

教皇は九ヶ年間コンスタンチノーブルに抑留され、苦しい立場にありながら、東教會の離叛を防ぐ爲め

あらん限りの努力を惜しまなかつた。その點は充分諒すべきであるが、然し信仰上の問題でこそなかつたにせよ、三度も自説を變更したのは遺憾の至りであつた。

(二)一 意派—皇帝ヘラクリウス(六四〇)も同じくカトリック派と一性派とを握手せしめ、國民思想の統一を謀らんを欲し、コンスタンチノーブルの司教セルギウスに命じて、兩者とも異論なかるべき信仰宣言書を作らしめた。セルギウスは双方を互譲せしめ、以て目的を貫徹し得べしと信じ、キリストには兩性あれども意は一なり、と説ける宣言書を作成した。キリストに兩性ありと言ふ點を正統派に譲歩し、意は一なりと云ふ方は、之を一性派に譲歩した譯だ。キリストには神人兩性ある以上、また神人兩意の存するのが當然で、セルギウスの提唱せし一意説は確に異端である。世に之を「一意派—Monothelismus」と稱する。異端に反對したのはゲマスコ生の修道士、聖ソフロニウスで、自らコンスタンチノーブルに赴き、セルギウスが異端の發頭人たることを知らず、之が援助を求めると、セルギウスは正統信仰を擬裝し、「一意、若しくは二意について語らぬ方がよい」と答へた。

久しからずして、ソフロニウスはエルザレムの總司教となり、古例に基き、ローマ教皇及びその他の總司教に書簡を送つて自分の奉ずる信仰を表白した。セルギウスはソフロニウスに先じて書をローマ教皇ホノリウス(Honorius)に呈し、一意、若しくは二意に就いて云々せず、一切の爭論を差止めるに若なし、と云ふことを巧に提言した。教皇はソフロニウスの書簡を俟たず、早速セルギウスに返書を與へ

て、彼の態度を稱讃し、「我等はイエズス・キリストの意の一なるを宣言する、教主には異なる意、或は反對の意はなかつたのである」云ひ送つた。間もなくソフロニウスの使者がローマに来て、キリストに二個の意がある以上、また當然二個の働があるべし、その正しい信仰を主張せる總司教の書簡を奉つたが、それでも教皇はソフロニウスに沈黙を命じ、彼此論争せしめなかつた。

教皇は決して信仰を謬つたのでない。一意ありき宣言したのも、相異り相反する意がないと言つたまでに過ぎない。然し教皇は平和を愛するの餘り、一切の論争を禁止した結果、倒に異端を蔓延せしめ、正統派の反抗を招き、事局をいよく紛糾せしめた。ヘラクリウス帝の如きはますます得意になつて、六三八年一個の「教義解釋—Ecthesis」を發し、國民に強ひて、セルギウスの一意説を信奉せしめんとした。六四八年コンスタンチウス二世はその宣言書を撤廢したが、その代りに「規範—Typus」と題する勅令を發し、キリストの働が一個であるか、二個であるか、それに就いて固く沈黙を守るべし、背くものあらば嚴罰に處すべしと威嚇した。

マルチヌス教皇はその威嚇をも顧みず、六四九年ローマはラテラノに會議を開き、「キリストには二個の意と二個の働とあり」と斷言した爲、遠島に處せられて其地に斃れた。聖マクシムスとその二人の弟子は舌を右手を斬落された。幸ひ次帝コンスタンチヌス、ボゴナトウス、(Constantinus Pogonatus)は正統信仰の持主で、アガト(Agatho)教皇に公議會の召集を提言したので、教皇は使節をコンスタンチノ

ープルに遣し、六八〇年、第六回公議會を司會せしめた。集會せる司教百七十名、滿場一致でイエズス・キリストに神意と人意との兩意が存し、人意は神意に從屬し給へる事を決議した。一意派の異端はこゝに消滅した。たゞリバノン山中に住めるマロニ族(Maronitae)のみはなほ異端を固守して動かさず、以て十字軍の時に及んだが、一一八二年アンチオキア司教の運動によつて、カトリック教會に復歸した、(ホ)教皇ホノリウスの問題—第六公議會はすべての異端者を排斥し、その異端者中にも特にホノリウス教皇の名を掲げて、之が排斥を宣言した。然し同議會の決議文を批准した教皇レオ二世(六八三)は、ホノリウスの排斥文を訂正して「我等はホノリウスをも排斥する。彼がこの使徒的教會をば、使徒的傳統の教もて照さず、却つて俗的裏切を以て、瑾なき信仰の倒壞されるのを放任したからである」云斷じた。さればホノリウスが排斥されたのは、異端を奉じたからではなく、己が怠慢により、異端の蔓延を助けたからである。孰にしてもホノリウスは信仰上に謬つたのでもなければ、「教座の上より—Ex Cathedra」己が意見を發表した譯でもない。随つて「教皇が教座の上より語る時は謬り能はぬ」云ふカトリックの教義は決して覆されぬ。

(八〇) —何故東國に異端の續出を見たか—基督敎の主義は頗る難解、不明瞭である。その不明瞭な點を明白にしよう云ふ空想を抛つて、温順しく之を承認するには、必ず謙遜の人であらねばならぬ。自分が世界を構成したらば、櫻樹に南瓜を下がらせ、南瓜の蔓に櫻實を結生せる筈であつた、自分が神の顧問

に備つて、意見を開陳するこゝ出来なかつたのは遺憾千萬だ、もし然うだつたら、萬事好都合に運ぶ所であつたのに！こゝ意氣揚々、神の顧問官を以て自ら許せる物識顔が、古今を通じて少くはない。彼等の中には必ずしも悪意を挟んで居るもの許りはない。中には往々善意の人もある。其點は十分汲んでやらねばならぬ。左らばこゝ彼等の空想にまで同意する譯には行かぬ。東國のギリシア人は閑散無爲である、饒舌である、何處までも、引切りなしに議論を闘はせるのを樂とし、些細な事にも、御念の入つた理窟を並べたがる癖がある。所謂神の顧問官には、詭向きであるのだ。彼等は叫んだ、「神や教會の教へる所は不完全である。基督教は全然改造しなければならぬ」こゝ。彼等の抱負は太したものであつた。斯くて三位一體の教理を改作せんこゝ企てた者に、アリウスがあり、マケドニウスがあり、御托身の教義に斧正を加へようこゝ欲して、ネストリウス、エウチケス、セルギウス等の天狗連が輩出したのである。

(八一) 人性問題に關して起つた異端はペラジウス派(Pelagianismus)と半ペラジウス派(Semipelagianismus)で、何れも實行を重する西國に起り、救靈に關する教會の教に反したものである。

(イ) ペラジウス派—人間の自由意志に對して異議を申立て、己が過失を否認する口實をせしグノーシス派の異端を攻撃せんとして、ブリタニア出身の修道士ペラジウス(Pelagius) (四三〇)は極端に自由意志を高調して、傳統的教義に反對した。彼に言はせるに、アダムの罪は子孫に傳はらない、隨つて原罪なるものは存しない。洗禮は罪を赦す爲めの儀式でなく、單に基督教會への入會式に過ぎない。人間は人

祖墮落前の状態に生れる。世の罪はアダムの罪の模倣たるに止る。死は罪の罰ではない。アダムは墮落前から、死すべき者、邪慾に惱まれる筈のものであつた。聖寵は人間の自由意志と相容れない。隨つて惡を避け、善を行ひ、救靈を全うするに必要でない。イエズス・キリストの御教と聖範と、たゞ夫れだけで充分であるのである。……要するにペラジウスは、原罪とその結果を否定し、聖寵と贖罪との無用を主張したのである。

ペラジウスの説を最も痛烈に攻撃したのは聖アウグスチヌス(S. Augustinus)で、その發行せし著作中でも「De Natura et Gratia—人性と聖寵」は最も名高く、爲に彼は「聖寵博士—Doctor Gratiae」と呼ばれるに至つた。その他インノチエンチウス二世(Innocentius)、及びゾシムス(Zosimus)の兩教皇、四一八年のカルタゴ司教會議(二百名の司教集會す)も、この異説を排斥し、終に四三一年のエフェソ公議會は之に徹底的排斥處分を加へた、

(ロ) 半ペラジウス派—原罪の存在とその性質、罪を避け、善を行ふが爲には超自然的聖寵が絶対に必要なるこゝ、然しその聖寵は無償で與へられ、善業を以て之を求め得るものでないこゝ (Quod non possit mereri)、是が聖アウグスチヌスの主張であつた。然し時人の中には、この聖寵博士の深奥なる主張を十分に理解し得ず、餘りにも聖寵を高調して、自由意志を否認せるかの如く思ひ誤り、ペラジウスの説と教會の教との中間を往き、以て聖寵の必要を自由意志を調和せしめようこゝ企てたものがあつた。

マルセイユ附近なる聖ウィクトル修道院長ヨハネ・カシアヌス(J. Cassianus)、ランス(Lerins)修道院のウイチエンチウス (Vicentius) 等をその提唱者とする。人は聖寵に由らざれば救霊の爲になることを思ふことも、爲すことも出来ない。ミ云ふのが教會の教である。然るに半ペラジウス派は之に反して「人は自力のみを以て信仰の始めに辿りつき、救霊を望み、天よりの助を得る爲に祈ることが出来る。聖寵は自由意志を働かして求め得る(Mereri potest)、終を全うすることは聖寵に關係がない、たゞ自由意志に由るのだ」と主張した。

聖アウグスチヌスは再び老耄を提げて奮戦した。聖人の死後(四三〇年)、聖プロスペル(S. Prosper)、聖ヒラリウス(S. Hilarius)がその戦を續け、終に五二九年、アルルの司教聖チエザリウス(S. C. Caesarius)はオランジュ(Orange)第二司教會議を召集して、半ペラジウス派の異端を排斥した。その決議文は教皇ボンifaceチウス二世(Bonifacius) (五三〇)より批准されて、大なる權威を得、異端はこゝに終熄した。

第二節 基督教文學

概観—異端者に對して惡戰苦闘を餘儀なくされた結果、本期には第一流の大家文豪が雲の如く輩出した。斯の如きは教會史上稀に見る現象で、しかもこの黄金時代は三三〇年から四六〇年まで一世紀以上に及んだ。教會は本期の著名なる作家を博士の列に加へ、前期の護教的教父(Patres Apologetici)の區別

するが爲め、特に「教理的教父—Patres dogmatici」と呼んで居る。迫害時代に優勢を誇りし護教文學は次第に舞臺を退き、神學と宗敎論戰とに後を譲つた。本期の一大事業とも云ふべきは、教會の教義、その各要素を分析解剖し、合理的に叙述し、之を曲解せる異端者にたいして、その眞意を明にし、之が保全を謀るに在つた。教父中でも屈指の大教父と稱すべきは、ギリシア教會に四人、ラテン教會にも同じく四人を數へる。

(a) —ギリシア教父—ギリシア教會の大教父は聖アタナジウス、聖バジリウス、ナジアンゾの聖グレゴリウス、及び金口聖ヨハネである。我等は各教父の偉業を略叙する前に、アレクサンドリア、アンチオキア、エデッサ等の學派の成行を一言して置きたい。

(a) —アレクサンドリア學派—總司教ディオスコルス(Dioscorus)が一性派の異端に陥るまでは、よくその光輝を保ち、特にアリウス派とネストリウス派の排撃に全力を傾注せし聖アタナジウス、聖キリルスの健闘振は實に目醒しいものであつた。然しディオスコルスの雜ぜつ返によつて急にその勢力を失ひ、何時しか教界面より姿を消して終つた。

(b) —アンチオキア學派—は四世紀から五世紀にかけて隆盛を誇つたもので、金口聖ヨハネの如き錚々たる偉人物をも出して居るが、大抵は唯理主義、實證主義に流れ、ネストリウス(Nestorius) モプスエチア(Mopsuetia)のテオドルス(Theodorus)、キルのテオドレトウス(Theodoretus)の如き異端者を輩



出せしめた。

(c) — エデッサ学派 — は四世紀に榮わ、アンチオキア学派と聯絡を保ち、主として神秘的、詩的作品を多く遺した。その代表的作家を聖エフREM (S. Ephrem) とする。五世紀に至つてネストリウス派の異端に陥つてその光を収めた。

(イ) — 聖アタナシウス (S. Athanasius) (三九六) — 聖アタナジウスは二九六年アレクサンドリアに生れ、ニケア公議會には一介の助祭としてアレクサンデル總司教に隨從し、アリウスの異説を駁撃して完膚なからしめた。三二八年、アレクサンドリアの總司教となり、後四十五年の間、アリウス派を向ふに廻して、筆に舌に華々しく健闘した。當時アレクサンドリアの總司教ミ云へば、教皇の次席司教で、コンスタンチウス、ワレンス (Valens) 兩帝の企てた信仰の變革を失敗に畢らしめたのは主として彼であつた。彼は五度その教座を逐はれ、十七年間以上も亡命の身となつた。第二次亡命の時には、ローマへ走つて滯留六年に及んだ。教皇ユリウス一世 (Julius) は彼を款待し、手篤き保護を加へた。

聖アタナジウスはエジプトの曠野に通れること三回、燒くが如き砂原、兀々たる岩石の間に久しく彷徨した。先づ舟に乗りてニール (Nile) 河を溯り、四千年の風雨を閱せるピラミッドの前を過ぎる時、自分の奉ぜる宗教は、四千年は疎か、神の永遠の御子を開祖と仰ぐので、世界とその起原を同するこころを思つて獨り自ら誇り、岸に上るや直に修道院に匿れた。當時の修道院は宛然城塞の如き構造で、屈竟の避難所であつた。彼はアレクサンドリアの總司教として、身富み、學博く、深く諸人に尊敬されて居るにも拘らず、貧賤なる修道者三伍するのを恥しなかつた。彼等の中には莫産を編むより外に、何等の藝當も知らぬ者すら少くはなかつたのに、喜んで彼等と共に祈つた。然し追手が迫り、搜索は益々嚴重になつたので、己むを得ず其所を去つて、エジプトの古墳に身を潛めた。彼が世界の基督教徒を鼓舞した書簡中の一通は、此の古墳を出て認められたものである。彼の書簡はバビルスに書きつけたもので、修道者等は之を手寫して、廣く天下に飛散せしめた。(挿繪は獨修士の住める洞窟)

(ロ) — 聖バシリウス (S. Basilus) (三七九) はカッパドキア (Cappadocia) 州セザレアの司教で、敬虔深き基督教家庭に人みなつた。彼の母は信仰の爲に配所の月を眺めるのも辭さない女丈夫であつた。彼がアテネの學校を卒へて歸國するや、長姉の聖女マクリナ (St. Macrina) は彼に説いて修道生活に入らしめた。聖バジリウスは既に修道者となり、嚴格に己を持するに共に、厚く窮乏を恤んだ。三百六十年彼の生國は飢饉に見舞はれた。偶ま老母が歸天したので、彼はその遺産を投出して餓者を賑はした。司教

さなるに及んで、セザレア市外に廣大なる病院を設け、屢々それを訪れ、手づから癩病者を纏帯してやるのであつた。かくまで、懇に肉體を憐む司教であるから、況して靈魂を等閑にして置く筈がない。彼は幾多の著書を公にして、基督教の教理を解説した。中には「聖靈に関する論文」、「エウノミウスに對する作」、「異教作家の研究を利用する方法」等は、千歳不磨の大作である。彼はアリウス教徒たるワレンス帝に對抗して、花々しくカトリック信仰を擁護した。ニケア公議會の決議を固守し、飽までイエズス、キリストの神性を主張した。三百七十年モデストウス (Modestus) 總督は彼に逼つて、素志を離さしめんと欲し、説諭・脅迫を盡した。然し彼は巍然として動かぬ。總督も終に持餘して、「我輩の前で斯る言辭を弄した者がない」と嘆息した。「するに閣下は、未だ司教たる者に接し給はなかつたのですね」と聖バジリウスは平然として答へた。(一五七頁の挿繪を見よ)

聖バジリウスの作にかゝる修道院規則は、東國に於ける斯道の寶典と貴ばれ、今日でもバジリウス會修道者はそれによつて生活して居る。

(ハ) ナジアンゾの聖グレゴリウス (S. Gregorius) はカツバドキアなるナジアンゾ (Nazianzus) 市に近きアジアンゾ (Arianus) に生れ、バレスチナのセザレア、アレクサンドリア、アテネ等に遊學し、聖バジリウスと刎頸の交を結んだ。バジリウスがセザレアの大司教となるや、グレゴリウスは推されてサシマ (Sasima) 云ふ小邑の司教となつたが、故あつて任地に赴くこと能はず、ナジアンゾに止つた。三七

九年コンスタンチノープルのカトリック派に懇請されて同地に赴き、信徒をアナスタジス (Anastasis) と稱する小聖堂に集めて、聖三位に關する有名な説教をなした。三百八十年テオドジウス大帝はグレゴリウスをコンスタンチノープルの大司教に推した。然し翌年開催された第二回公議會も半に彼は潔くその地位を去り、故郷のアジアンゾに歸つて隱遁生活をなし、二百八十九年に歸天した。彼はその教壇に立つて講述せし教義の正確、堅實なりしより「神學者」と呼ばれた。その他にも、多くの宗教詩と興味津々たる書簡とを遺して居る。

(ニ) 金口聖ヨハネ (S. Joannes Chrysostomus) はアンチオキア市に生れ、修道生活に入り、尋で司祭となり、三百九十八年に至つてコンスタンチノープルの司教に推され、嚴肅なる苦行、熱誠なる傳道、倦むなきの慈善心を傾けて、範を當世に垂れ、餘芳を千歳に遺した。彼の片腕となり、彼を助けて其救濟事業に當つたのは女執事の聖オリンピアス (S. Olympias) であつた。彼はその教理の正確さ、其辯舌の爽快さによりて、金口と字された。然し彼の徳行の光は、腐敗せるコンスタンチノープル宮廷の爲には餘にも眩かつたので、アルカダイウス帝の皇后エウドクシア (Eudoxia) は、彼の徳望を妬める二三の司教等と共に謀して、彼を追放した。民衆が爲に暴動を起したので、彼は一時召還されたが、四百四年更に宮廷の陰謀によつて遠流せられ、四百七年終に配所の露を消した。彼は流謫地よりローマに上告した。教皇は彼の擁護を受け、死後三十年、東國教會に嚴命して、司教等の判決を取消さしめ、彼の名譽を

回復した。彼は主として聖書の講義にその名を高くし、別に「童貞に就て」、「司祭職に就て」等の名作を遺した。

(ホ)―其他―右四大家の外にも、聖バジリウスの弟で、ニツサ(Nissa)の司教聖グレゴリウス(三九五)が居た。彼もアリウス派にたいして悪戦苦闘を重ね、ワレンス帝の遣はせしモテストウス總督に追放せられ、帝の死後漸く歸任するを得た。彼は聖書の注釋に豊富な學殖を顯したが、然し彼の最も勝れたる功業は、カトリック信仰を哲理的に解説せし作であつた。

盲者デイデムス(Didymus)(三九五)はカトリック教會の塙保己一で、四歳にして明を失ひしも、汝々として學を勵み、當時稀に見る博識の大家となり、半世紀以上も、アレクサンドリアの學府長を勤め、聖書の講義や、カトリック教理に關する多くの作を遺した。

エルザレムの聖キリルス(S. Cyrillus)(三八六)はアリウス派の勇戦奮闘し、彼等の怨を買ひ、辛辣なる迫害を浴せられたものである。彼の作中、白眉を稱すべきは「要理書―Catechesis」で、洗禮志願者の爲め、カトリックの教理を説明したものである。

聖エフレム(S. Ephrem)はシリアのニジベ(Nisibe)に生れ、エデッサ學派の大立物で、修道士、且つ助祭として身を終つた。彼の作には、聖書の注釋、讚美歌、通俗教話、論文等が頗る多い。

アレクサンドリアの聖キリルス(S. Cyrillus)(四四四)がカトリック教義のチャンピオンとして、ネストリ

ウスと華々しき論戰を交へたことは餘りにも顯著な事實で、教理史上から云ふと、彼は聖アタナジウスに次ける重要な大人物であつた。

ベルジウムのイジドルス(S. Isidorus Pelusiotus)(四四〇)も、エジプトはベルジウム市附近の司祭、且つ修道院長で、各方面に送りし二千通からの書簡によりて知られて居る。

なほ修徳神學上の作家に聖ニル(S. Nil)(四三〇)あり、教會史家としては、セザレアの司教エウゼビウス(三四〇)、ソクラテス(Socrates)、ソゾメヌス(Sozomenus)等があつた。

(ハ三)―附たり―使徒等の制度(Constitutiones Apostolicae)―本書は「聖使徒等の命令、クレメンヌ著」云ふ題名を冠して居るが、實はクレメンヌ(第三代教皇)の作でもなければ、使徒等の口から出た命令でもない。五世紀の初頃、シリアで或無名の士が各種の古書を集めて編纂したもので、全部八巻より成り、第一巻より六巻までは使徒等の教訓(Didachalia Apostolorum)―デダスカリアミは劇作者がその作を演ずる方法を説いた書々意味し、こゝでは教訓の義に筆を入れて、使徒等が異教より改宗せし信者に送れる書簡體に改作してある。第七巻は「デイダケ(Didache)」、(十二使徒の)を根底としたものであり、第八巻は三部に區分され、第一部は「賜論―Charimata」、多分聖ヒツポリトウス(三世紀)の作を再録したものでらしい。第二部は品級の秘蹟の典禮を收めたもので、是もヒツポリトウスの「De Traditione Apostolica使徒的傳來」(今は教)に據つたものと思はれる。第三部には典禮的祈禱文、共同生活、祝祭日、宗教上の

聖務等に關する法規を順序もなく、ごつちやに収録し、その終に八十五條からなる「使徒等の法典」(Canones Apostolorum)を稱するものを收めてある。

本書は多分四世紀の終から五世紀の初頃に成つたものらしい。著者は詳ならぬが、アンチオキア風に月を數へて居る所から以て觀るに、アンチオキア教會の人であつたらうかと思はれてならぬ。偽作ではあるが、東教會では六九二年のツルロ(Tullo)會議が「使徒等の法典」を眞作と認められた爲に、頗る重要視されたものである。西教會では十七世紀頃までその存在すら知られなかつた位であるが、然しこの作の成りし環境や時代を知る爲には、貴重な文献たることを失はない。

(八四)——ラテン教父——ラテン教會の大教父は聖ヒラリウス、聖アムブロジウス、聖ヒエロニムス、聖アウグスチヌスである。

(イ)——聖ヒラリウス (S.Hilarius) (三〇七)は西國のアタナジウスと稱せらる。この一語以て彼の人と成りを察するに餘りあり。彼は素ガリアの異教者で、丁年になつて洗禮を受け、後選まれて其生地ポアチエ(Poitiers)市の司教となつた。古代教會に在つて、司教の選舉權を握つて居たのは、司教座都市の聖職者及び信徒であつた。彼等は往々高貴の人に投票して、是に品級の秘蹟を授かるべく懇請したものである。コンスタンチウス帝がアリウス派の異端をガリアに移植せん謀るや、ヒラリウスは猛然起つて之に反對し、爲に捕はれて小亞細亞に流された、居るこゝ六年、得る所が頗る多かつた。小亞細亞の司教等



聖アウグスチヌス遺蹟を調査す

は教理の解説に就て意見區々、相一致し能はぬのであつた。ヒラリウスは東國の夜の静けさを利用し、司教等を會合せしめて之が一致を計つた。然うなるミアリウス派に取つては非常な不利益なので、彼等は帝に進言してヒラリウスをガリアに歸還せしめた。ヒラリウスの著書は氣魄萬丈、識見も亦之に伴つて居る。特に有名なのは、詩篇、及び聖福音書の註釋、三位一體論等である。

聖バジリウスの博愛

リア、ミラノ市の司教であつた。當時ミラノは帝國の首都で、帝の輦下に居るに、自然廣大なる威勢を贏得る機会も乏しくない。實際アンブロジウスは自家の靈腕を、過去の政治的地位によつて、勢望隆々大に官民の信頼を博した。彼はローマのキリスト教家庭に人となり、長じてミラノの總督となつたが、未だ其時まで洗禮は受けて居なかつた。偶々ミラノの大聖堂にて司教の選舉が行はれた。人選上に就き、信徒間に意見が衝突し、選舉場裡は上を下へ大騒ぎとなつた。アンブロジウスは衛兵を従へて聖堂へ駆けつけ、秩序の回復を計つた。忽ち群衆中より「アンブロジウスを司教に」と叫ぶ聲が起つた。彼

を選挙して司教の位階に就かしめよう云ふのである。無論アンブロジウスは固辭した。後各方面から強要せられて餘儀なくも承引し、洗禮を受け、型の如く諸品級を授かつた。時に年三十四歳。アンブロジウスは急造司教より一躍して模範司教となつた。内は嚴肅なる禁慾生活を持し、外は寢食を忘れて聖務に盡瘁した。極力アリウス派を論駁追窮するに共に、異教の撲滅をも計り、傍ら敬虔書を物して長姉のマルセルリナ修道女 (Marcellina) と與へた。彼の作たる「De officiis ministrorum—教役者の務」はチチエロの「De officiis—服務論」を模倣したもので、童貞論と共に屈指の大作である。其他讚美歌の改作、今にミラノ教會に行はれる「アンブロジウス典禮」の創作、聖アウグスチヌス改心の手引等は彼の名を千歳の下に不朽ならしめた。

アンブロジウスは國政の機務に通じた人であつた。グラチアヌス (Gratianus)、テオドジウス (Theodosius) の二帝、ダマス (Damascus)、シリチウス (Siricius) の兩教皇とも親交あり、その顧問に備はつて、有益な助言を與へた。彼は如何なる義務に打突つても、決して貳の足を踏まなかつた。テオドジウス大帝が一時の憤怒に驅られてテッサロニカ (Thessalonica) 市民七千人を虐殺せしめた時の如き、アンブロジウスは早速帝に書を呈して厳しく其罪を責め、之を償はない限りは聖堂の門に入るべからず、と言ひ送つた。帝は温順しく司教の命に服して、公の謝罪をなした。

(ハ) 聖ヒエロニムス (S. Hieronymus) (三三〇年) 聖アンブロジウスの嚴正、堂々犯すべからざる風采を、

聖ヒエロニムスの活氣に富み、熱烈火の如き氣象は、好個の對照であつた。聖ヒエロニムスは熱情のはちきれん許りの修道者で、ラテン文學に造詣深く、好んで異教の詩文を漁り、聖書をも耽讀し、教皇ダマスの依頼に應じて、聖書のラテン譯を訂正した。後ベトレヘムの修道院内に閉居して舊約聖書をヘブライ文より翻譯し、新約聖書(主として福音書)をギリシア文によつて訂正した。今日カトリック教會の公用聖書たる通俗譯 (Versio Vulgata) は實にヒエロニムスの新譯、若くは訂正に成つたものである。彼はオリゲネスの事業を繼續したものと謂はなければならぬ。

彼は隱遁生活に憧憬れ、聖書を現場に於て研究したい希望もあつたので、ダマス教皇が永眠に就くや、斷然ローマを去つてバレスチナに退き、最後の三十五年(三八六年)をベトレヘムの修道院で送り、一意専心讀書と著述に從事した。「絶えず何かを書くか讀むかして居た」と同時代の或人は曰つて居る。彼の著書のみを以ても、一個の小圖書館を作るに餘りあるのは怪むに足りない。

ベトレヘムなる聖ヒエロニムスの修道院近く、三個の女修道院と二三の病院とがあり、之が司管に當れるのは、聖女パウラ (S. Paula)、及び其女エウスタキア (Eustachia) であつた。兩女はローマの貴婦人で、聖ヒエロニムスの勸誘によつて、修道生活に入り、彼の後を追うてバレスチナへ行つたものである。ヒエロニムスに倣ひ、祈禱と慈善事業とに用ひた餘暇は、専ら學業に費した。聖書を原文に就て專攻し、ギリシア語、ヘブライ語にも頗る堪能で、流石のヒエロニムスも兩女の難問に弱らされ、爲にいよ

研究心を唆られるのであつた。ヒエロニムスの作中特に有名なのは、聖書の外に「De viris illustribus 諸大家傳」、「Chronicon—編年史」、書簡集等である。

(二)—聖アウグスチヌス (S. Augustinus) (三五〇) は北アフリカはタガステ (Tageste) の人で、母を聖モニカ (S. Monica) と稱し、基督教の母の典型であつた。聖アウグスチヌスを改心せしめ、之を聖アンブロジウスの許に導き、洗禮を受けしめたのは、固より神の聖寵に由るものではあつたが、然し亦母モニカも與つて大に力があつた。アウグスチヌスがミラノで洗禮を受けたのは三百八十七年の御復活祭日で、時に年三十三。彼の改心は、聖寵の威力を遺憾なく立證したものと謂はなければならぬ。初め彼は非常な名聞家で、只管自家の聲望を高めようとする腐心せるのであつたが、受洗後アフリカに歸り、後ヒツボ (Hippo—今のマルゼリアのボヌ市—Bone) の司教となつてから三十五年の間 (三九五年) と云ふものは、たゞ神の光榮を發揚するに全力を傾け盡した。彼は世にも稀なる敬虔家で、世界は全く彼の眼中に無かつた。彼の脳裡に浮び、彼の胸臆を奪へるものは唯だ神のみであつた。彼は聖寵の威力に基ける靈魂の感化、聖人等の行へる奇蹟、世界の司配等に關する神の攝理を辿つて感嘆措く能はず、神に歸すべき所を歸し奉らざる様な事があつては、唯だ夫ればかりを危懼したものである。

四百六年から北蠻のゲルマン族が帝國內に侵入し、四百十年にゴット族 (Goths) は終にローマを陥れて掠奪を擅にした。當時のローマは今日の英、佛、獨、露と云ふ様に個々の國ではなく、文化民唯

一の祖國であつた。ローマの國力ばかりは永久不動と思はれ、ローマの安危を疑ふのは、文化其物の安危を疑ふので、斯の如きは時人の到底思も寄らぬ所であつた。

然るに今やそのローマが、ゲルマン族の侵入を蒙つて動搖し初めたのを見て、全世界は震駭した。ベトレヘムに隱遁せる聖ヒエロニムスですら痛嘆を禁じ得なかつた。世俗を解脱し去れる彼も、ローマにだけは執着を禁じ得ないを見わた。基督教徒は皆同じ執着心を持つて居た。一方、異教徒はローマ衰亡の罪を基督教徒に轉嫁し、「ローマの國難は、神々を見棄てた祟だ。神々を信仰せる間はローマも幸福であつた。基督教徒の神は、ローマの神々に代るだけの勢力を有せぬ」と叫んで止まなかつた。

聖アウグスチヌスは石等の難問を論破せんが爲に、「神の都市—De civitate Dei」と題せる大作を公にした。當時の實際問題で、頗る識者の頭を悩ましたのは「ローマ帝國、及び世界の統治に關する神の攝理は如何」と云ふのであつた。アウグスチヌスは此問題を研究して、左の如き答解を與へた、曰はく「ローマが長く富強を擅にしたのは神々の力ではなく、國民の義勇奉公の精神に職して之れ由るのであつた。今日の國難も決して基督教徒の罪ではない。寧ろ教徒は全力を傾けて之を防止軽減せんを努めた位だ……つまり神が人を現世に置き給つたのは、たゞ一時的幸福に飽かしめんが爲ではなく、却て永遠の福樂に到着せしめたい思召からである。現世の不幸は、神の御業の完成に資する所が少くはない。神の御業は神の都市、即ち教會の建設事業で、教會は地上に於て惡戰苦闘を續け、後、終局の勝利を

占めて天國へ凱旋するのである。要するに神の攝理は正義、公平である。吾人は之を信する。吾人の前途は光明に輝いて居る」云。聖アウグスチヌスの著作は説教集と書簡集を除いても一百種以上に上り、その中でも「神の都市」云「告白」は傑作中の傑作である。

(ホ)―その他―基督教詩人として有名なのは「ブルデンチウス Prudentius +405」云、ノラの聖パウリヌス (S. Paulinus de Nola +431) の二人で、ルフィヌス (Rufinus +460) は歴史家、ギリシヤ文の翻譯家として當世にその名を知られたものである。教皇聖レオ一世は九十六篇の説教と、多くの書簡を遺して居る。彼の説教は用語の精練と思想の深遠を以て特に珍重される。

(ハ)―奇蹟の圖書―聖アウグスチヌスを始め、司教等は窮乏者の爲に救濟事業を起すのみに止らず、聖人等の援助をも祈つたものである。ヒツボ市では最初の殉教者聖ステファヌスの祭壇の前に於て、四百二十五年から驚くべき病氣の快復が行はれた。聖アウグスチヌスは由つて以て基督教の眞理を立證せんと思立ち、右の快復事實を取檢べて、之が圖書を作らせた。一例を挙げれば、カツバドキアの人で、パウルス (Paulus) と其の姉妹パラーチア (Palladia) は神經質の病に悩まされ、その快復を求めんとて、各地の有名なる聖堂を巡禮した。四百二十五年の御復活日にパウルスはヒツボなる聖ステファヌス祭壇の前に於て突然快復した。翌月曜日、聖アウグスチヌスは快復せしパウルスと猶病める妹を率ゐて教壇に立ち、パウルスの快復事實の圖書を讀ましめ、終つて今度の事實を鑑定せんとして獨り教壇に居残つ

た。彼が未だ何かを話して居る中に、俄然喝采の聲が堂内に起つた。ハラーチアも聖ステファヌスの祭壇前で急に快復したのであつた。聖アウグスチヌスがヒツボに於て此種の圖書を手に入れたのは十年以内に七十通の多きに上つて居る。各地の司教等も彼の例に倣つた。中世紀の聖堂内にて認められた奇蹟圖書は此にその濫觴を見た。是等は歴史上、貴重な參考資料である。(一五七頁の挿繪の下段を見よ)

第三章 對内史 教會の組織―秘蹟―禮拜

第一節 教會の組織

概観―本期の教會組織は、その根本に於て前期のそれに異なる所はなかつた。然し新たな要求が起るにつて、新たな制度が設けられた。教勢は急速の進歩を遂げ、ぐんぐん郊外に伸びて行くので、村邑にも教會を新設する必要が起つた。階級制度はますます發達し、各自の權限もそれ／＼判然と確定されて來た。教義上の争闘が激甚なりし所より、統一はいよいよ重要視され、ローマ教皇の大權は争ふべからざる事實となつた。然し教皇の權カ範圍がまだ判然と極まつて居ない所から、後世では教皇によつて、裁決される様な問題も、地方の司教會議によつて、決定されるこゝが少くなかつた。

(八五)―主任司祭―教會の初め頃、各市にはたゞ一個の教會があつて、司教が司祭團を統率して之を主宰するのであつた。信徒の増加するに隨ひ、主座教會の外に、同一都市や郊外に新教會が設立され、司

祭團の中より誰かを任命して之が管理に當らしめることとなつた。尤もその教會は全く司教に隸屬し、洗禮でも、ミサ聖祭でも、たゞ司教座の教會に於てのみ之を行ふのであつた。然し村邑の教會になると、地が遠隔して居る上に、迫害の危険もあるもので、何時迄もさうした制度を維持して居られない。斯る教會には「地方補佐司教—Chorepiscopus」なるものを任命し、司教に代つて事務を執らしめることとなつた。でも迫害が収まり、世の中が平和になると、然うして司教の権力を分散せしめる必要を見ないので、サルディカ會議(昔のダキアの主要都市、今はブルガリアのソフィア)は司祭のみで十分間に合ふ様な小さい部落に司教を置くことを禁じて居る。斯くて地方補佐司教の代りに、司祭が司教の部下に在りて、教會の事務を擔當し、信者の世話を見る様になり、それよりして「Curatus-Curé」呼ばれ、今日の所謂「主任司祭」になつたのである。

(八六) — 司教—大司教、總司教—ミラノ勅令によりて、教會は自由を獲得し、内部の組織を完成することが出来た、デオクレチアヌス帝の時、ローマ帝國は全國を四大部(Praefectura)、十二區(Diocesis)、百餘州(Provincia)に分つたので、教會もそれを模倣し、各都市を一個の教區となし、一人の司教を置いて信徒を司牧せしめ、各州には首席司教(Metropolitanus)を立て、第二流教區の司教等を監督せしめ、ローマ、アレクサンドリア、アンチオキア、コンスタンチノーブル、エルザレムの司教は特に總司教(Patriarcha)と稱した。その中でもローマ、アレクサンドリア、アンチオキアの三教區が、他

の教區の上に優越權を掌握せるのは、聖ペトロをその直接、又は間接の創設者(アレクサンドリアはペトロ)に仰いで居たからである。コンスタンチノーブルは新ローマ帝國の首都たる所から、その司教は當然、東國諸教會の首班たるべし主張し、既に三八一年の第一回コンスタンチノーブル公議會にその議案が提出され、四五年のカルケドン公議會は法令第二十八條を以てボントウス、アジア(西部小)、トラキアの諸教區を之に隸屬せしめた。かくてコンスタンチノーブルの司教等は教皇レオ一世の反對をも無視して、次第にその權力を擴張し、終に事實上、東國諸教會を總裁するに至つた。

エルザレム教區はもミアンチオキア總司教區に隸屬したものであるが、カルケドン公議會に於て、ユウエナリス司教(Juvenalis)はテオドジウス帝に取り入り、バレスチナ、フェニキア、アラビア三州の上に管理權を得、後終に總司教となつた。

(八七) — ローマ教皇—首位權—ローマ教皇はローマの司教、西國の總司教たるに共に、亦全教會の首位司教で、その首位權は本期中に入つていよく鮮明になつて來た。教義上に關して激烈な爭論が闘はされ、政權もまた絶えず干渉の手を突き込んで來る間に處して、教皇は正統信仰の保全者、教會權利の擁護者たるの職責を曠うしなかつた。教皇が他のすべての司教、大司教、總司教の上に首位權を掌握せることを證明せる事實は數ふるに遑ない程である。

(イ) — ローマ教皇の首位權は諸會議によつて聲明せられた。地方會議で罷免された司教はペトロの後

繼者たるローマ教皇に上告し得るを、サルディカ會議(三四三)は議定した。又實際ローマ教皇は聖アタナジウス、アレクサンドリアの聖キリルス、金口聖ヨハネ等の事件につき、彼等の上告を受理して、裁決を下した。

(ロ)―教皇自らもその首位権を行使して、司教等を罷免したもので、その罷免はたゞ西國司教のみならず、また東國司教にも及した。

例へばチエレスチマス一世(Celestinus I)はネストリウスを、フェリクス二世(Felix II)はアカキウス(Acacius)を、アガピトウス二世(Agapitus)はアンチムス(Anthimus)を罷免した。三人ともコンスタンチノブルの總司教であつたのである。

(ハ)―教皇の首位権は異端者や異端の擁護に任せる皇帝からも認められて居る。即ちエウチケスはコンスタンチノブル 司教會議より處分され、教皇レオ一世に上告し、ニコメチアの司教ユウセビウスは 教皇ユリウス一世に運動してアタナジウス排斥の議決文を批准せしめようとし(三三九)、アリュス派の熱心な擁護者を以て自ら許せしコンスタンチウス帝は、百方手を盡しリベリウス教皇を味方に抱き込まんを務めた。

(ニ)―終に公議會の決議文が、教皇の批准を経た後に、始めてその効力を生ずる所から推しても、その首位権は明に認められる。教皇の斷定のみが、改變の餘地なきものせられ、チエレスチマス一世

はネストリウス派を、聖レオは一性派を、聖アガトは一意派を、聖インノチエンチウス一世はペラジウス派を排斥したが、其等の裁決は皆各公議會の承認する所となつた。

(ハハ)―離教―本期の離教中、特記に値するのは、三百十一年からアフリカ教會に起りしドナトウス派の離教であらう。首領はカルタゴの司教ドナトウス(Donatus)で、事の起原は斯うである、ディオクレシアンヌ帝の迫害の際、聖職者に對して「聖書を引渡すべし」と云ふ法令が發布された。それに就き、ドナトウス及び其一味の黨員は、「カルタゴの公教司教チエチリアヌス(Caecilianus)の叙品者は、官憲に聖書を渡したのだ」と事實無根な讒構をなし、「右様な犯人は、その司教たる司祭たるを問はず、聖職権を失墜する。秘蹟を有効に授け能はぬ」と大聲疾呼して、チエチリアヌスを司教と認めなかつた。この離教はドナトウス派と稱し、百年の久しきに亘つて教會を騒がせ、國家を悩ました。コンスタンス帝の時から、聖アウグスチヌスの頃まで絶えず合同策が講ぜられたが、悉く失敗に畢つた。四百十一年、ローマ領アフリカにはカトリック司教が二百八十六名で、ドナトウス派の司教は二百七十九名を算した。四百十五年からローマ政府は斷然ドナトウス派の集會を禁じ、背く者はドシ／＼死刑に處した。一方アウグスチヌスの運動もあり、その結果教會の懷に舞ひ戻つたものも多かつたが、なほ頑として改めず、回教を奉ぜるアラビア人に征服される時にまで及んだものも少くはなかつた。

(八九)―會議―信仰と道德に關して重大問題が次から次へに續發せる當時に在つては、その紛争を解決

するが爲に、教會の代表者が一堂に會して打合せをするの必要を生じたのも當然のこゝである。随つて本期には司教等の集會の催されるこゝが頗る頻繁であつた。之を「宗教會議—Synodus」、希語—組合の義—と稱する。もし全教會の司教が召集された時は「公議會—Concilium Oecumenicum」と呼ぶのであつた。以上列記せし重大なる異端を鎮壓する爲に、六回の公議會が開催された。第一回はニケーア公議會（對アリウス）、第二回はコンスタンチノーブル公議會（對マケドニウス）、第三回はエフェゾ公議會（對ネストリウス）、第四回はカルケドン公議會（對エウチキス）、第五回はコンスタンチノーブル第二公議會（對三章）、第六回はコンスタンチノーブル第三公議會（對一書）である。是等の公議會が開かれたのはすべて東國であつたのは、異端が皆東國に起り、その始末をつける爲の公議會であつたからである。たゞ何れの公議會にも教皇使節が議長となつて之を司會し、（第二、第五公議會を除く）、決議又は教皇の批准を経て、然る後始めてその効力を生ずるのであつた。

（九〇）—公議會の外に、さまで重要ならざる一地方の宗教會議があつた。その中で、

（イ）—一州若くは一地方の司教等が集つて、その地方に起りし宗教問題を評議するのを地方宗教會議（Synodus provincialis v. regionalis）と呼ぶ。この種の宗教會議は二世紀の中葉、モンタヌス派の異端に對して小アジアに開かれ、三世紀になるに、アジア、アフリカ等には頗る頻繁に催されるのであつた。

（ロ）—教區の司祭等が集つて司教等の司會の下に教區内の問題を議し、布教や信徒指導法等を取極め

のを「教區宗教會議—Synodus dioecessana」と稱する。教區宗教會議は主任司祭が郊外に駐在する様になつた後でなければ、行はれる筈もないので、四百十五年エルザレムに開催されたのを嚆矢とする。

聖職者の選舉—養成—獨身問題

（九一）—（イ）—選舉—本期の初頃まで司教の選舉は司祭と民衆との權利に屬するのであつた。然し民衆の權利は年を追うて縮少され、ラオヂケア（小アジア）の宗教會議（三三）によつて民衆の參加權は全廢された。この頃より司教は司祭、州内司教、及び首席司教より選舉され、嘗て民衆の有せし權利は皇帝の掌中に收められ、皇帝は候補者を推薦するの特權を要求する様になり、斯くて教會の許諾により、所謂「帝冠の權利」—（Jus Coronae）なるものを見るに至つた。

（ロ）—養成—當時、聖職者は要理學校に於て養成されるのであつた。その學校中、最も有名なのはアレクサンドリア、パレスチナのセザレア、アンチオキア、エデッサ、ローマの夫れであつた、然しそれに就き、本期中著しい變化が起つたに、云ふのは、アフリカやイタリアでは（後ではイスパニアにも）、聖アウグスチヌ及びウエルセルの聖エウゼビウス（S. Eusebius Vercellensis）の勧誘により、教會所屬の司祭は、それ／＼相集つて共同生活をなし、適當の少年を集めて、之に神學を教授し、實行を習はせるに云ふ様に、神學校の濫觴でも謂つた様なものを見るに至つた。

（ハ）—獨身問題—聖職者の獨身生活に就て、東教會と西教會とに多大の相違を生じた。西教會では三〇〇

五年エルウル會議が司教、司祭、助祭に負はした獨身生活の義務をば、教皇レオ一世は副助祭にまで及した。然るに東教會では舊來の慣習を保持し、ニケア公議會に於て獨身生活を法文となし、之を東教會にも遵守せしむべしと云ふ動議を提出したのも居たが、然し上エジプトのパフィニクス (Paphnigus) 司教が反對した爲に、その動議は撤回せられた。六九二年東ローマ皇帝ユスチニアヌス二世の召集に應じて、東教會の司教等はコンスタンチノーブルのツルロ宮 (Tullo) に會議を開き、獨身の義務をたゞ司教のみに負はせ、司祭、助祭、副助祭は、もし叙品式前に妻帯したならば、そのまゝ結婚生活を續け得るに定めた。東教會ではカトリックも離教徒も、今日に至るまでこの制度を遵守して居る。

第二節 秘蹟と禮拜

概観—秘蹟に關して本期内には大した改變は行はれなかつた。たゞ悔悛の秘蹟だけは、その規律が従前よりも頗る緩和されて來た。ミラノ勅令によりて、教會に平和が與へられたと共に、禮拜式は長足の發展を遂げた。到る處に莊嚴な聖堂が建立され、典禮式は盛大となり、祝日は其數を増し、政府はまた法律を以て主日と祝日に休業を命じた。でも基督教生活は之を總觀するに、迫害時代の緊張味を失ひ、次第に弛緩し、放縱に流れて來た。それには引換へに、修道生活が新に興り、前代未聞の壯觀を呈し、赫灼たる異彩を放つに至つた。

(九二)—秘蹟—(イ)—洗禮は概して浸水式に由るのであつたが、病人には灌水式を用ひた。聖堂の傍に「洗禮堂」を設けたのは、本期からで、幼兒に洗禮を授けるのも一般の習慣となつた。

(ロ)—堅振は洗禮後、直ちに之を授けるのであつた。

(ハ)—異教者が多數相率るて改宗した結果、信徒の熱心は冷却し、聖體拜領の度數が著しく減少して來た。その埋合せにミサ聖祭中、祝別のパン (Eulogia と稱す) を各人に分配する習慣が新に生じた。今日でも歐米諸國にはこの習慣が遺つて居る。

(ニ)—悔悛—從來背教、殺人、姦淫の三大罪を犯した者は破門せられるので、之が赦を蒙るには公の償に服せねばならぬのであつた。然し公の償を命ぜられるには、公の告白を必要とし、それが却つて人の蹟を來す様な憂すら無きにしても限らぬので、コンスタンチノーブルの總司教ネクタリウス (Nectarius) は三九〇年公の告白を廢止し、西教會では聖レオ一世が之を撤廢した。公の償も餘程緩和され、懺悔者はミサ聖祭に與ふこと、臨終の際には、聖體を拜領することも許された。公の償は灰の水曜日、按手と喪服を手渡すことを以て初まり、聖木曜日に至つて、正式の和解(赦罪)が與へられるのであつた。

(九三)—(イ)禮拜所—本期に於ける宗教建築は、バジリカ式と圓形堂式を以て特色とする。バジリカは、もごくローマの裁判所や商業取引所等に充てた長方形の建物で、三列、若くは四列の柱が長く縦に並

び、奥の一室は半圓形をなし、司教、司祭等の席に充て、その奥の室に中央大廣間との間に祭壇があつた。圓形聖堂は、後の所謂ビザンチウム式で、その特色も謂ふべきは、中央の球蓋(Dome)にあつたが、代表的作品をコンスタンチノープルの聖ソフィア堂に見る。

(ロ)―ミサ典禮―本期に至つて、ミサ聖祭の執行上、主要部の一致を謀る爲め、典禮用祈禱文集が發行された。典禮は之を大別して、東教會典禮と西教會典禮とす。書簡と福音は、毎主日、及び毎祝日にそれら割り當てられた。福音講義は頗る重きを置かれ、典禮的聖歌は後年聖グレゴリウス教皇の奨励によつて大に發達し、グレゴリウス聖歌、又は平調聖歌とも稱せられるに至つた。

(九四)―祝祭日―前期に特筆して置いた吾主の祝祭日の外に、西教會では紀元三三六六年より御降誕祭を十二月二十五日に執行するこゝとなり、三七五年には、それが東教會のアンチオキアにも波及して居る。同じ四世紀の中葉より枝の主日と御昇天の祝日が設けられ、御昇天には、吾主が使徒等を従へてエルザレムから橄欖山へ赴かせ給うたこゝを記念する爲め、行列をなすのであつた。なほ本期に當つて、少なくとも東教會では、聖母を尊ぶが爲、潔の式、御告、御永眠、(後の被昇天)、御誕生の四祝日が制定された。本期には天使の崇敬も行はれ、就中、聖ミカエルは、教會の擁護者として厚く尊敬された。殉教者はその地方々々に祝はれたものであるが、然し洗者聖ヨハネ、聖ステファノ、聖ペトロ、聖パウロの祝日は全教會に行はれた。やがて教會は殉教者の外に偉大なる徳の香を遺せし聖人をば、公奉

者の名の下に尊敬する様になつた。

(九五)―聖遺物の崇敬―之に就て東教會と西教會とは大にその行き方を異にした。東教會では殉教者の遺骨を小さく割いて之を諸人に分配したものであるが、西教會では、八世紀頃まで遺骸を動かすのを慎み、之を分割するが如きは瀆聖と見做し、たゞ聖人が生前に使用せしもの、或は墓より掘出したもの(遺骨外のもの)を分配するに過ぎなかつた。利慾の念に驅られ、偽物を眞物として賣りつける者が出て來たので、聖遺物の賣買は一切禁止するこゝになつた。

(九六)―信者の生活―その風儀―(イ)本期に於ける普通信者の生活は、餘り感服されたものではなかつた。彼等は多數相率るて、教會の門を潜つて來たので、中には異教の習俗、迷信等に泥める有名無實の信者が頗る多かつた。良信者も、迫害の刺戟がなくなつた爲め、神に奉仕するにも、以前程の熱を有せず、眞剣にもなり得なかつた。

(ロ)―聖職者―普通信者と同じく聖職者中にも感服し難いものが少くなかつた。柔弱に流れ、腐敗しきつた世俗と絶えず接觸して居る所から、その面白からぬ影響を蒙るに至つたのも怪しむに足りない。

(九七)―修道生活―基督教生活の目標は何人の爲にも同一で、愛の實踐躬行に在り、神を愛し人を愛するに在つて存する。其愛が完美の境に達し、神の誠命を果して缺くる所なきに至るこゝ、之を完全なる基督教生活と稱する。基督教徒たる者は、その地位境遇の如何に拘らず、皆この完全生活を目標して突進

せねばならぬ。

基督教徒中には特に完全生活を冀ひ、修道者になつて清く一生を送る者がある。彼等は誠命の外に福音の勸諭たる清貧、貞潔、従順をも實行せんと誓ふ。蓋し福音の勸諭の實行は完全なる愛に到達する捷徑だからである。然し捷徑を取つたからして、必ずしも其目的地に到達するに極つたものではない。却て遠路を迂廻しつゝ、首尾よく彼岸に辿り着く人もある。是れ世俗に留り乍ら、完全なる基督教徒たり、世を捨て、俗を離れながらも、不完全極る修道者たる者の少からざる所以である。

(九八) 東 教會の修道者—修道生活は福音書に鼓吹され、絶えず教會内に實行されたものである。然し最初の三世紀間云ふものは、修道生活と普通の基督教生活とは外觀上さして異なる所がなかつた。四世紀に及んで初めて双方の間に差異を生じ、修道者は俗を離れて隠遁する様になつた。この離俗の風習は始めて埃及テバイド (Thebaid) 州の曠野に其の濫觴を見た。

曠野に引籠つて他に懸離れ、孤獨の生活を營める者を獨修士 (Anachoreta) と云ふ。三百四十一年に歸天せるテバイドの聖パウルス (S. Paulus) を其開祖とする。隣接せる隱遁者が互に聯絡を保ち、時々相往來して切磋琢磨すべく工夫したのは、三百五十六年に歸天せし聖アントニウス (S. Antonius) であつた。聖パコムス (S. Pacoms + 346) は四圍に塀を繞らした修道院を建て、幾多の修道者を集めて、同一規律のもとに共同生活を營むべく組織した。何れの修道者にしても、日夜、祈禱、苦業、手工に従事するのであつた。

修道生活の齎した効果は實際驚嘆に値する。修道熱は燎原の火の如く忽ち東國に蔓延した。アリウスの異端と戦ふに當つて、修道者はカトリック教會の中堅で、聖アタナジウスは彼等の中に身を潜めた。彼は聖アントニウスと親交あり、彼の物せし聖アントニウス傳は、永く修道生活の福音書となつた。小亞細亞のカツパドキア州セザレアの大司教聖バジリウスも初め修道者で、彼の認めし修道規則は東國に於ける斯道の寶典と貴ばれた。

(九九) 西 教會の修道生活—聖アタナジウスは、三百三十五年トレツ (Trevs) 市に流され、又三百四十年から三百四十五年までは羅馬に滯留した。其間に彼は曠野に於ける修道者等の感すべき生活を紹介した。羅馬の上流社會には彼の物語りに感激し、進んで修道生活に身を投ずるものが續出した。初代教會のポンボニア (Pomponia)、ドミチラ (Domitilla) と比肩するに足るべきメラニア (Melania)、パウラ (Paula)、エウストキウム (Eustochium) と云ふ様な舊門の内に、嚴肅なる修道生活を送れる貴婦人、第一世紀の執政クレメンスの跡を踐める貴公子もあつた。古代教會の大天才、大明星たる聖アウグスチヌスの如きも、聖アントニウス傳によつて深く聖寵に感じ、改心するに至つた。是頃よりして修道生活はたゞならぬ影響を絶えず教會に及した。各時代を通じて、殊に中世紀に當つて、聖職者、及び基督教界の精粹と仰がれる人々は、何れも修道生活より甚大な感化を蒙つたもので、修道院を抜きにしては、カトリック教會史は全く不可解の謎である。

ガリアに於て最も聲望高き修道士は聖マルチヌス(S. Martinus)で、彼はポアチエの司教聖ヒラリウス(Hirius)に就て道を聴き、修道者たること四十年近くに及んだ(四〇〇年)、彼は素軍人であつた。資性淡泊にして民衆を愛し、常識に富み、正義の念に篤かつた。三百六十年頃、ポアチエ(Poitiers)の附近、リグヤ(Ligugé)に一修道院を創め、三百七十一年には、ツール(Tours)市の近傍に、マルムチエ(Marmoutier)修道院を設けて、八十名からの修道者を收容した。後ツールの司教に任ぜられて大いに敏腕を振ひ、皇帝に直言して暴政に苦しめる下民を保護する一方から、全力を傾けて異教の撲滅に當つた。彼の葬儀に參會せる修道者は、無慮二千人に上つた。ツールに於ける彼の墳墓は忽ちガリアの有名な靈地となつた。門弟スルピチウス、セウエルス(Sulpicius Severus)の物せし彼の傳記は非常な好評を博し、爲に西國地方では、聖アントニウス傳の存在を忘却するに至つた。

プロワンス州(Provence)―聖マルチヌスの死後、二百年の間、プロワンス州は學藝徳風の叢淵であつた。レンン(Lelins)、イエル(Hyères)の兩島、マルセーユのセン・ウイクトル(S. Victor)修道院等から自然界、及び超自然界の恩澤が盛に流出した。聖ホノラトゥス(S. Honoratus)は有力な貴族であつたが、夙に俗を厭ひ、修道者となり、紀元四百年の頃、カンヌ(Cannes)市の前面に位せるレンン島に修道院を創めた。該院から輩出せし聖人は七十名、其中には十二名の司教、及び大司教、十名の修院長、多數の學者があつた。實にレンン修道院はガリア教會の豊饒なる苗代であつた。四百十五年の頃、東

國からカツシアヌス(Cassianus)シユン修道者が來て、マルセイユに聖ウイクトル修道院を建てた。彼はベトレムや、エジプトに於て斯道を経験せし人で、修道生活の規律を認め、靈的講演集を遺した。諸教皇は彼に厚き信頼を置いた。ネストリウス異端の發生した時、教皇が劈頭第一意見を叩いたのはカツシアヌスであつた。たゞ彼が聖寵論に躓き、半ペラジウス説を提唱したのは、惜みても餘あることであつたが、それも決して惡意に出でた譯ではなかつた。

ローマ教皇年表

第三二代、ミルチアデス(Miltiades) (三二一―三二四) コンスタンチヌスのミラノ勅令後、教會の財産を回收す。

第三三代、聖シルウエステル(S. Sylvester) (三二四―三三五) ドナトゥス派、及びアリウス派の鎮壓策を講ず、ドナトゥス派にたいするアルル宗教會議の決議文、アリウス派にたいするニケア公議會の決議文を批准し、且つ擁護す。

第三四代、聖マルクス(S. Marcus) (三三六)

第三五代、聖ユリウス(S. Julius) (三三七―三三九) アリウス派の迫害に對して、防戦大に勉め、聖アタナジウス及び追放の厄に遭ひし司教等を庇護す。

ローマ教皇年表

第三六代、聖リベリウス (S. Liberius) (三六六) アリウス派の迫害いよく、猖獗を極め、カトリック側の驍將聖アタナジウスが逐はれてローマに来るや、教皇は大に之を歡待した。その爲にコンスタンチウス帝の逆鱗に觸れ、ローマを追放され、その代りにフェリクスなる者が擁立された (三五五)。

三五八年教皇は多分シルミウム第三次信條(實質は正統信仰のもの)に署名して、ローマに歸還を許され、フェリクスはローマを退去した。然し翌年リミニ會議を排斥して、帝の怒を買ひ、カタコンブ内に潜伏して身を終つた。ローマに聖マリア大堂を建立したのはこの教皇である。

第三七代、聖ダマス (S. Damasus) (三八五)、厚く殉教者を崇敬す。アリウス及びアポリナリスの異端を排斥し、メレチウス(アンチオキア)の離教を處分し、聖靈の神性を否めるマケドニウスに對して召集されしコンスタンチノブル會議を批准した。この教皇に反して三六六年、ウルシヌスが自立したけれども、民衆の贊同を得ず、大事に至らなかつた。

第三八代、聖シリチウス (S. Siricius) (三九四)、教皇は規律に關する四通の書翰を以て、その名を知らる。聖エロニムス、オリゲネス派と相争つた時、教皇は後者に左袒せるかの如く思はれた。但し夫は教理上よりも、むしろ平和を確立する爲であつた。

第三九代、アナスタジウス (S. Anastasius) 一世 (三九一)、オリゲネス派が跳梁を極めるに至つたので、教皇は聖エロニムスを援けて、オリゲネス派の誤謬を排斥した。

第四十代、聖インノチエンチウス一世 (S. Innocentius) (四〇一)、本期に於ける有名な教皇中の一人で、

ペラジウス派(聖寵を自由意志に關する異端)を處断排斥した。ローマ皇帝西ゴート王アリクミを握手せしむべく務め、日つ熱心に金口聖ヨハネを擁護した。

第四一代、聖ゾシムス (S. Zosimus) (四一七)、重ねてペラジウスの異端を排斥した。

第四二代、聖ボニファチウス一世 (S. Bonifacius) (四二二)、この教皇に對して、エウラリウス云ふのが借立して教皇を稱したけれども、官憲の援助を得ずして自滅した。

第四三代、聖チエレスチヌス一世 (S. Caecilius) (四三三)、ペラジウス派、半ペラジウス派を鎮壓し、ネストリウスを排斥して、エフエゾ會議を召集し、その決議文を批准した。

第四四代、聖シクストゥス三世 (S. Sixtus III) (四四〇)、ネストリウスを正統信仰へ引戻すべく努力したが、その甲斐なきを見て、之を排斥處分した。

第四五代、聖レオ一世 (S. Leo I) (四四〇)、大レオと稱せられ、教會にも國家にも大功あり、匈奴王アツチラがイタリアに侵入した時、説いて退軍せしめた。ゲンセリクスの軍は喰ひ止め得なかつたが、然し火災に殺戮を凌辱しよりローマ市民を救つた。エウチケスの提唱にかゝる一性論を處分した。教理上に關するレオの書簡は特に有名である。

第四六代、聖ヒラルス (S. Hilarius) (四六八)、ネストリウス派、一性派を排斥し、異端者をローマより

追放した。教皇は特に精勤を以て稱せらる。
 第四七代、聖シンブリチウス (S. Simplicius) (四八三—)、教會規律の維持に勉む。西ローマ帝國が滅亡したしたのは、この教皇の時であつた(四七六年)

古代史概観

古代史 (自紀元三〇年 至同四八六年)

古代史はカトリック教會の創立から、西羅馬帝國の滅亡まで四世紀半に跨つて居る。其間にカトリック教會は羅馬帝國を始め、ペルシア、アルメニア、アビシニア等に順次建設せられた。中に就て最も重要で、且つ吾人に最も近い關係を有せるのは羅馬教會である。

(一) 異教國內に於けるカトリック教會 (三三〇年)

紀元三十年から七十年迄は、使徒等の教會創設時代で、七十年から百二十五年迄は、司教等の教會組織時代であつた。百廿五年から百八十年までに護教論家の活躍、初代宗教會議の開催、聖傳の完結を見た。百八十年から三百十三年にかけては、初期の大神學者(聖イレネウス、テルツリアヌス、アレクサンドリ學府、聖チブリアヌス)が輩出し、基督教は重要な發展を遂げた。

(イ)「教會と文明」—使徒等は特に西方に向つて宣教した。彼等の主として活躍した地盤は羅馬帝國であつた。彼等の往復せし大道は地中海で、彼等の用語は、帝國一般に行はれし希臘語であつた。教會の中心は最初エルザレムに在つた。尋でアンチオキアに移り、終に聖ペトロは之を文明世界の大都たりし羅馬に据ゐた。斯の如く教會は創立當初より文華の中心地に其根據を置き、世界を文明化し、到る處に基督教を傳播すべき一大民族の感化に粉骨碎身した。

爾來教會と文明とは緊く相提携し、兩者の關係は年を逐うて親密なつた。前途に光明が輝いても、暗雲が横つても、榮枯盛衰、相扶け相携へて背かなかつた。この提携に於てカトリック教會の貢獻せし所は、その不離の同伴たる文明社會の夫れに比して毫も遜色を見ない。

(ロ)「教會と羅馬帝國」—カトリック教會は三百十三年まで、異教の羅馬帝國内に生存した。帝國民の宗教心は頗る旺盛であつた。たゞ惜むらくは、其の宗教心は當時既に常軌を逸し、腐敗の極に達して居た。「一切の物を神に祭り上げながら、獨り眞の神のみを認めぬのであつた」、随つて國家は夙にカトリック教會を敵視して、之を壓殺せんを欲した。然し教徒はカトリック教會を羅馬帝國の提携が必ずしも不可能ならざるを看取して、世人の注意を促した。否な彼等は此の提携の實現を豫見して、盛に之を唱道した。既に第一世紀の末葉に當つて、教皇クレメンス一世はカトリック教會の組織を羅馬軍團の編制、即ち羅馬人の軍隊單位に比較して居る。

(ハ)「教會と哲學者」—ガリレア漁夫の歸依せしめし基督教徒中には、羅馬の上流社會、及び希臘の學園を出た錚々たる人物も少からずあつた。因つて富豪はカタコンブ經營に指を染め、哲學者は教義の哲學的解説、即ち神學の組織に着手した。爾來教會には博識なる巨人、雄辯なる説教師、達筆なる文章家が輩出した。彼等は有ゆる知識を傾けて之を聖學に應用した。

異教徒中にも精神界の指導者を以て自ら許せる哲學者が居た。彼等は一概に聖ユスチヌスを告訴したクレスセンチウスの如き俗物のみではなく、随分高潔な人格を備へ、熱心にその信する所を宣傳する君子人も居た。然し彼等の門に遊ぶ者は少數の篤學士に過ぎない、固より彼等の宣傳せる教義は、その熱心なる宣傳に比して頗る貧弱であつた。

(ニ)「先づ基督教徒たれ」—教會は貴賤、貧富、學者、無學者の別なく、之に同一の教義を教へ、同一の道德訓を授けた。神の前には萬人みな兄弟であり、平等であり、洗禮に、聖體拜領臺に、殉教に全く無差別であるに説き、何よりも先づ基督教徒たるの肩書を重ぜよと教へた。殉教者は法廷に引据わられ、「汝の姓名は？」と判事に問はれるに、「私は基督教徒で御座る」と答へ、多くはまた他を言はぬのであつた。金口聖ヨハネはその理由を説明して、「唯この一語である。然し彼等の故郷、其家族、その素姓等は一切この一語に盡きて居る」と曰つた。

(ホ)「労働と死」—斯くて教會は未だ社會の裏面に隠れながらも、既に深甚な影響を各方面に波及せしめた。嘗に奴隸の境遇を改善して之が人格を認めしめたのみならず、また大に労働の價値をも高めた。異教社會は往々労働を以て奴隸の専務とすべき所、自由民の之に携るものは少からぬ侮辱だ、と見做したものである。然るに教會はこの謬見を打破して、労働の義務を説き、その神聖を叫んだ。

次に基督教徒によつて死の意義が大に變化して來た。異教徒は甚く死を忌んだもので、死亡の年月日は大不吉として石碑に刻むのさへ極度に厭がり、殆ど皆之を記入しないのであつた。却て教會は死亡の日子を石碑に刻むの習慣を教徒間に養つた。蓋し教徒の爲には、死は終焉たるに共にもまた出發點だからである。斯の如く教會は労働と死に對する異教的觀念を改め、因つて以て現世に於ける人生觀を全く一變せしめた。現世の生活は新たな意義を得、永遠に入るの階梯と云ふ點から見て、無限の價値を有するに至つた。

(ヘ)「教會の内生」—この期間に教會の内生も頗る充實發展した。異端、離教の發生するに隨つて、信仰も、教理も、統治も、規律も、愈々整頓し、聖傳は確定、保持せられた。地方の司教等は相集つて地方議會を催した。羅馬教皇は、全教會の統治に盡瘁し、到る處に其權利は認められた。

(三)「基督教帝國内に於ける教會」
 (ト)「殉教者崇敬」—三百十三年から四百七十六年にかけて羅馬は基督教國となつた。教會は洞窟内を出て、世界の檜舞臺に立つた。異教に打勝つた殉教者等は、聖ペトロを先頭に凱旋的崇敬の的となつた。

次で聖人等に對する崇敬も起つた。斯くて諸聖人、殊に聖ペトロを尊崇、欽慕するの風習は漸次發展し中世紀の宗教史を飾れる一大美風は茲に胚胎した。

(チ)「教父と修道者」—是まで日常の出來事であつた殉教、即ち血の證明は容易に見られなくなつた。成る程アリウス派の横暴、ユリアヌス帝の迫害、新宣教地の殉教も云ふ様に、猶全くは跡を絶たなかつたが、夫にしても餘程少くなつて來た。是に於て新に代り立つたのが、教父等で、彼等はその該博なる學識、雄渾なる辯舌を以て別種の證明を與へた。彼等の叫びは非常に強烈であつた。異教哲學者は到底之が矢面に立ち得よう筈がない。力盡きてその反駁を斷念し、基督教の前に潔く胃を脱ぎ、之に歸依するに至つた。

迫害時代に基督教徒の胸を沸し、無數の殉教者を出した熱誠は、依然彼等の全身に滾つて居る。然し今や法廷もなく刑場も無い、因つて彼等は多數相率ゐて曠野の極、修道院の奥へ引籠り、以て聊か其熱氣を漏さうと欲した。斯くて幾多の修道團が起り、時を経るに隨ひ、其修道團から新規の聖職者が輩出した。是もまた見落してならぬ所で、實に修道院は、中世紀に限らず、何時の代までも、教會の宗教的一大富源であるのである。

(リ)「世俗と接觸」—彼等が曠野に隱遁せる目的は、世俗との接觸を避けんが爲であつた。三百十三年以來、教會と羅馬社會との提携は完成し、確呼して動かすべからざる事實となつた。福音のパン酵異教世界全般に行亘り、深く之に混和した。教會はその宿敵たりし帝權を握手した。利害、損得の錯雜せる關係は新に起つた。

(ヌ)「政府の保護」—帝權を握手した教會は莫大な利益を得た。國家は異教の保護を抛ち、やがては之が撲滅を謀り、公に政府の名を以てする祭禮を廢止した。其頃、東國から一種の魔法的祭禮が流布して在來の異教と結び、其勢力を盛返さんとした。其祭禮には、犠牲の血を信徒にふりかけるとか、或は複雑な儀式を執行ひ、過飲、暴食の醜を演ずるゝかするのであつた。して軍人社會の如く、神秘的觀念に乏しい連中は、斯る血醒い、淫猥な祭禮を殊更ら喜んだものである。然し政府は嚴令を下して、忽ち之を禁絶した。教會の攻撃を中止した政府は、進んで之を保護する様になり、異教の大神官たりし皇帝は、甘じて教會の一信徒となつた。飽くまで組合組織を排斥せし羅馬法典も、今や教會なる一大社團の存在を公認した。是に於て教會は法人として、有ゆる公法上の權利を行使するを得、その所有財産も結局正當と認められた。到る處に大聖堂は屹立した。教會の組織は完備した。ガリアの邊陲僻村に至るまで、小教區網が張詰められた。各都市は勿論、大きな地域には、司教が居据つた。行政上の區劃に則り、幾個かの司教區を併せて大司教區となし、地方會議を催し、信徒の團體的生活を規定するには、教皇の監督の下に公議會を開いた。

斯の如く教會は、羅馬帝國と相提携した結果、其活動は容易となり、十分の補助も與へられた。然し

一方には亦少からぬ困難に反抗に出遇せざるを得なかつた。

(ル)「東羅馬と皇帝」一教會に反抗して、之を強か手古摺らしたのは希臘—羅馬の學界であつた。彼等は信仰の前に謙遜するのを屑とせず、頻に理屈を捏廻はして、基督教の玄義を縮少し、出來得れば之を抹殺し去らんを欲した。アリウス派、ネストリウス派、一性派の如き大異端の續發したのは之が爲である。次に教會が餘程處置に苦んだのは、コンスタンチノブル總司教の傲慢であつた。彼等は新羅馬の司教と云ふのを笠に着て、舊羅馬に坐せる聖ペトロの後繼者に衝突し、之と同等の地位を争つた。

終に教會が頗る持餘したのは東羅馬皇帝であつた。從來、羅馬皇帝は異教の大神官であつたが、然し基督教に歸依した上は、當然その地位を擲たざるを得ない。謂はゞ休職大神官、否、落魄せる現人神で、今尙抹香の燕に未練を遺して居る。随つて最初は可なり謹慎して、單に「園外司教」だを稱して居たが、隨ては増長して「園内司教」たらん心の野心を起し、國政上の都合から割出して、勝手に教理を變更せんを欲し、其目的を貫かんが爲に、希臘一流の精緻なる學說、ビザンチウムの民族的尊大心、東國の教皇たらんを欲せるコンスタンチノブル總司教の野心等と結託した。それよりして三百三十年から東西の兩教會がいよく最後の袂を分つた千五十四年に至る間に、幾多の不祥事、悲むべき離教沙汰を生んだのである。

要するに、此の第一期間、羅馬帝國內に於ける教會の特色は、統一と徹底とに在つた。當時帝國の統治者は皇帝で、皇帝は初め異教徒であつたが、後基督教に歸依した。一定せる法律の下に規律正しく政治を行ひ、社會の公益(其實際を捉へて居たか否かは別問題として)を企圖したものである。その皇帝を相手にして仕事を遣つて行くのだから、教會も統一、徹底せる施設をしなければならなかつたのは、亦た自然の勢であつた。

古代史年表

(自第一世紀至第五世紀)

この年表はアルベル師の教會史に據つたので、本書中に省略せる史實をも多く取入れてある。何か役立つ所もあらうかと思ひ、そのままにして置いた。